

WebSphere Message Broker



インストール・ガイド

バージョン 7 リリース 0

WebSphere Message Broker



インストール・ガイド

バージョン 7 リリース 0

本書について

本書は、WebSphere Message Broker バージョン 7.0 のインストール方法、およびインストールの検査方法について説明します。

本書には、WebSphere Message Broker バージョン 7.0 インフォメーション・センターから取られた情報が含まれます。インフォメーション・センターに適用される利用条件および特記事項は、本書にも適用されます。

目次

表	v
最新情報の検索	vii
第 1 部 計画	1
第 1 章 インストールの計画	3
第 2 章 システム要件	9
ハードウェア要件	10
サポートされるプロセッサ	10
メモリーおよびディスク・スペースの要件	11
z/OS 上のディスク・スペース所要量	13
通信	14
ソフトウェア要件	15
32 ビットおよび 64 ビット・プラットフォームのサポート	15
オペレーティング・システム要件	16
追加のソフトウェア要件	19
ライセンス要件	24
第 3 章 共存とマイグレーション	27
共存	27
マイグレーション	32
第 4 章 多文化サポート	33
ロケール	34
第 5 章 インストール・パッケージ	35
パッケージ化のオプション	35
パッケージの内容	36
ブローカー・コンポーネントおよび WebSphere Message Broker Explorer パッケージ	38
Toolkit パッケージ	40
DVD パッケージ	41
第 2 部 準備	43
第 6 章 システムを準備する	45
セキュリティーのセットアップ	45
Linux および UNIX システムでのセキュリティー	46
Windows システムでのセキュリティー	47
Windows ドメイン環境でのセキュリティー	48
z/OS システムでのセキュリティー	49
CD および DVD へのアクセス	49
ローカル・システムでの CD および DVD のアクセス	50
リモート・システムでの CD および DVD のアクセス	53

Linux および UNIX システムでのカーネル構成の確認	56
第 7 章 何をインストールするかを選択する	57
第 8 章 インストールおよびアンインストールのインターフェース	59
ブローカーのインストールおよびアンインストールの方法	59
複数のブローカー・インストールをアンインストールする方法	62
ランタイム・コンポーネントでの応答ファイルの使用	63
WebSphere Message Broker Toolkit のインストールおよびアンインストールの方法	65
WebSphere Message Broker Toolkit での応答ファイルの使用	66
インストール・ウィザード名	68
第 3 部 インストール	71
第 9 章 Windows ランチパッドを使用したインストール	73
単一コンピューターでの複数インストール	73
インストールの要約	74
ランチパッドの開始	74
インストール	75
インストール中の問題解決	78
第 10 章 WebSphere Message Broker ブローカーのインストール	81
コンソール・モードでの WebSphere Message Broker ブローカーのインストール	83
サイレント・モードでの WebSphere Message Broker ブローカーのインストール	84
WebSphere Message Broker ODBC Database Extender のインストール (IE02)	86
WebSphere Message Broker ODBC Database Extender の構成 (IE02)	87
WebSphere Message Broker ブローカーのインストール中の問題の処理	88
第 11 章 WebSphere Message Broker Toolkit のインストール	89
サイレント・モードでの WebSphere Message Broker Toolkit のインストール	93
WebSphere Message Broker Toolkit のインストール中の問題の処理	93

第 12 章 WebSphere Message Broker Explorer のインストール 95

ウィザードとスクリーン・リーダーを併用した
WebSphere Message Broker Explorer のインストール. 98
Windows におけるコンソール・モードでの
WebSphere Message Broker Explorer のインストール. 99
Linux におけるコンソール・モードでの WebSphere
Message Broker Explorer のインストール 100
サイレント・モードでの WebSphere Message
Broker Explorer のインストール 101

第 4 部 インストール後 103

第 13 章 インストールの検証 105

WebSphere Message Broker Toolkit を使用したイン
ストールの検査. 105
WebSphere Message Broker Explorer を使用したイ
ンストールの検査 111

**第 14 章 ブローカーの動作モードと機
能レベルの確認 115**

第 5 部 付録 119

付録. インストールにおける問題点 . . . 121

索引 125

表

1. コンポーネントとプラットフォーム・サポートの要約	4	12. WebSphere Message Broker Toolkit で提供される DVD およびイメージ	40
2. 使用可能なインストール方式の要約	5	13. DVD の内容	42
3. 前提条件製品の要約	6	14. WebSphere Message Broker ブローカーのインストール・ウィザード名	68
4. ハードウェア要件	10	15. WebSphere Message Broker Toolkit のインストール・ウィザード名	68
5. ディスク・スペース所要量 (Linux および Windows システム)	12	16. WebSphere Message Broker Explorer のインストール・ウィザード名	69
6. ディスク・スペース所要量 (UNIX)	12	17. Windows ランチパッドで使用されるインストール・ウィザードの名前と場所	75
7. 32 ビットおよび 64 ビット操作のサポート	15	18. デフォルト構成ウィザードによって作成されたリソース	108
8. 実行グループのデフォルト・サイズ	16		
9. オペレーティング・システム要件	16		
10. WebSphere MQ 要件	20		
11. WebSphere Message Broker および関連製品で提供される CD およびイメージ	38		

最新情報の検索

WebSphere® Message Brokerの最新情報にアクセスします。

以下の情報が提供されています。

「Requirements」 Web サイト

サポートされているすべてのプラットフォームに関するハードウェア要件とソフトウェア要件の最新の詳細情報については、WebSphere Message Broker 要件 Web サイトにアクセスしてください。

readme.html

製品の readme ファイルは、頻繁に更新され、リリース直前に加えられた変更や、既知の問題と次善策に関する情報を含んでいます。製品 README Web ページには常に最新バージョンのファイルが置かれているので、手元にあるコピーが最新であるかどうかをいつも確認してください。製品メディアに含まれるファイルと、製品コンポーネントのインストール時にインストールされるファイルには、製品 README Web ページ上の最新バージョンへのリンクが含まれています。

インストール・ガイド

「インストール・ガイド」は、製品とともに PDF ファイルとして提供されます。この資料は IBM® Publications Center Web サイトでも入手可能です。このインフォメーション・センター内のインストール情報の記述場所について詳しくは、インフォメーション・センター内の『インストール・ガイド』を参照してください。

インフォメーション・センター

このインフォメーション・センターは、WebSphere Message Broker Toolkit および WebSphere Message Broker Explorer と一緒にインストールされるもので、更新は通常、そのコンポーネントにサービスを適用する際に組み込まれます。

インフォメーション・センターは、コードとは独立して定期的に更新され、最新のレベルはツールキット内からインストールできます。コードおよび資料の更新のインストールに関する指示は、インフォメーション・センター内の『WebSphere Message Broker Toolkit へのサービスの適用』を参照してください。

サポート情報

WebSphere Message Brokerサポート Web ページは、最新の製品サポート情報によって定期的に更新されています。例えば、以前のバージョンからマイグレーションする場合は、「Solve a problem」の見出しにある「Problems and solutions when migrating」を参照してください。

第 1 部 計画

本書の最初の部分では、WebSphere Message Broker をインストールするために必要な環境について説明します。ここに書かれている情報は、z/OS[®] および分散システムに関するものです。

- 3 ページの『第 1 章 インストールの計画』
- 9 ページの『第 2 章 システム要件』
- 27 ページの『第 3 章 共存とマイグレーション』
- 33 ページの『第 4 章 多文化サポート』
- 35 ページの『第 5 章 インストール・パッケージ』

第 1 章 インストールの計画

このチュートリアル の指示をインストール作業の概説として使用して、WebSphere Message Broker のインストールの準備を行います。

インストールを完了させるために実行する作業が以下にリストされており、各作業は必須かオプションかが示されています。各作業の要約が提供されると共に、その作業をより詳しく説明する後述の章またはセクションへのポインターがあります。

1. 必須: インストールに必要な製品パッケージを入手したことを確認します。

WebSphere Message Broker バージョン 7.0.0.2 の物理パッケージと電子パッケージが入手可能です。

使用可能なパッケージとそれぞれの内容について詳しくは、35 ページの『第 5 章 インストール・パッケージ』を参照してください。IBM パスポート・アドバンテージから電子的配信として製品を注文した場合には、すべてのコンポーネントおよびすべてのプラットフォームについて必要なすべてのイメージをダウンロードしたことを確認してください。使用可能なイメージの内容は、物理的パッケージで提供される CD と全く同じです。49 ページの『CD および DVD へのアクセス』に、製品イメージへのアクセス方法と、そのダウンロードおよび解凍の方法が記載されています。

サービス更新のダウンロードと適用の指示については、インフォメーション・センターの『サービスの適用』を参照してください。

2. 必須: インストールに必要な製品資料にアクセスできることを確認します。
 - 製品 README ファイル `readme.html` に、入手可能な最新の情報が記載されています。
 - インフォメーション・センターには、すべてのプラットフォームでの計画と準備についての説明があります。インストールに必要なインフォメーション・センターのセクションは、クイック・スタート CD でも、PDF ファイルとして使用可能です。
 - このインフォメーション・センターは、すべての分散プラットフォームでのすべてのコンポーネントのインストール手順を説明しています。インストールに必要なインフォメーション・センターのセクションは、クイック・スタート CD でも、PDF ファイルとして使用可能です。
 - 「*Program Directory for WebSphere Message Broker for z/OS*」では、z/OS でのすべてのコンポーネントのインストール手順を説明しています。

これらの資料の入手方法については、vii ページの『最新情報の検索』に記載されています。

3. 必須: コンピューターにどのコンポーネントをインストールするかを決定します。

以下の情報では、WebSphere Message Broker コンポーネントに関する最小レベルの詳細が提供されます。それらについてさらに学ぶには、57 ページの『第 7 章 何をインストールするかを選択する』をお読みください。

- WebSphere Message Broker Toolkit。少なくとも 1 台のコンピューターにこのコンポーネントをインストールする必要があります。このコンポーネントは、Linux® (x86)、Linux (x86-64)、および Windows® 上のみインストールできます。

WebSphere Message Broker Toolkit を使用して、開発環境にメッセージ・フローと関連リソースを作成、管理、デプロイ、および削除します。

- WebSphere Message Broker Explorer。このコンポーネントは、Linux (x86)、Linux (x86-64)、および Windows 上のみインストールできます。

WebSphere Message Broker Explorer を使用して、実稼働環境でブローカーを管理します。

- ブローカー。少なくとも 1 台のコンピューターにこのコンポーネントをインストールする必要があります。

望むなら、単一のコンピューターに複数のブローカーを作成できます。アプリケーション・メッセージを処理するため、1 つ以上のブローカーにメッセージ・フロー・リソースを配備してください。

4. 必須: 選択したコンポーネントをどのプラットフォーム上にインストールするかを決定します。

以下の表は、サポートされるプラットフォームにどのコンポーネントをインストールできるかを示しています。

表 1. コンポーネントとプラットフォーム・サポートの要約

コンポーネント	プラットフォーム
WebSphere Message Broker Toolkit	<ul style="list-style-type: none"> • Linux(x86) • Linux (x86-64) • Windows 32 ビット • Windows 64 ビット
WebSphere Message Broker Explorer	<ul style="list-style-type: none"> • Linux(x86) • Linux (x86-64) • Windows 32 ビット • Windows 64 ビット
ブローカー	サポートされるすべてのプラットフォーム

5. 必須: 1 つ以上のコンポーネントをインストールする各コンピューターを準備します。
 - a. ターゲット・コンピューターが初期のハードウェア、ストレージ、およびソフトウェア要件を満たしていることを確認します。

要件は、どんなコンピューターに WebSphere Message Broker をインストールするか、またどんなコンポーネントをインストールするかによって変わります。詳しくは、10 ページの『ハードウェア要件』および 16 ページの『オペレーティング・システム要件』をお読みください。

時折、サポートされるハードウェアおよびソフトウェア環境は更新されます。次の product requirements Web サイトで最新の要件情報を確認してください。

www.ibm.com/software/integration/wbmessagebroker/requirements/

- b. ご使用のコンピューターに適した作業を実行してセキュリティーと UNIX® カーネル構成をセットアップし、インストール・メディアへアクセスできるように準備します。

これらすべての作業については、45 ページの『第 6 章 システムを準備する』で説明されています。

- c. インストールを実行するために必要な権限がユーザー ID にあることを確認します。
- AIX® システム: ユーザー ID として root をインストールに使用します。
 - Linux および他の UNIX システム: ユーザー ID として root を使用するか、または別の ID を使用して root になるようにします。
 - Windows システム: ユーザー ID は Administrators グループのメンバーでなければなりません。
 - z/OS システム: インストールを実行するのに適した RACF® 特権を持つユーザー ID を使用します。

この情報は要約にすぎません。詳細は 45 ページの『セキュリティーのセットアップ』に記載されています。

6. 必須: コンポーネント・インストールの実行に使用するプログラムを確認します。

以下の表は、使用可能なプログラムをリストしています。

表 2. 使用可能なインストール方式の要約

プラットフォーム	ツール
Windows のみ	Windows ランチパッド このプログラムは、前提条件製品がまだインストールされていない場合にそれらをインストールしたり、サポートされるレベルにない前提条件製品を特定したりします。73 ページの『第 9 章 Windows ランチパッドを使用したインストール』を参照してください。
Linux、UNIX、および Windows システム	サポートされる各プラットフォーム上のインストール・ウィザードには、それぞれ固有の名前があり、68 ページの『インストール・ウィザード名』にリストされています。 <ul style="list-style-type: none"> • ランタイム・コンポーネントをインストールするには、81 ページの『第 10 章 WebSphere Message Broker プローカーのインストール』を参照してください。 • WebSphere Message Broker Toolkit をインストールするには、89 ページの『第 11 章 WebSphere Message Broker Toolkit のインストール』を参照してください。 • WebSphere Message Broker Explorer をインストールするには、95 ページの『第 12 章 WebSphere Message Broker Explorer のインストール』を参照してください。

表 2. 使用可能なインストール方式の要約 (続き)

プラットフォーム	ツール
z/OS のみ	SMP/E ランタイム・コンポーネントをインストールするには、 「 <i>Program Directory for WebSphere Message Broker for z/OS</i> 」を 参照してください。

7. 必須: WebSphere Message Broker によって必要とされる追加の製品をインストールします。

WebSphere Message Broker は、正常に作動するために他のソフトウェア・プロダクトを必要とします。それらの製品をインストールする順序は重要ではありません。ただし、WebSphere Message Broker コンポーネントを構成して開始できるようにするには、必要なすべての製品をまずインストールする必要があります。

以下の表は、それらの要件を要約しています。

表 3. 前提条件製品の要約

コンポーネント	前提条件製品
WebSphere Message Broker Toolkit	<ul style="list-style-type: none"> インフォメーション・センターを表示するための Web ブラウザー
WebSphere Message Broker Explorer	<ul style="list-style-type: none"> WebSphere MQ Explorer のインストール インフォメーション・センターを表示するための Web ブラウザー
WebSphere Message Broker	<ul style="list-style-type: none"> 他のコンポーネントと通信するための WebSphere MQ JRE

これらすべての要件の完全な詳細が 19 ページの『追加のソフトウェア要件』に記載されています。

- Web ブラウザーについては、21 ページの『ブラウザー』を参照してください。
 - サポートされる WebSphere MQ バージョンの詳細については、19 ページの『WebSphere MQ』を参照してください。
 - JRE について詳しくは、21 ページの『JRE』を参照してください。
8. オプション: 最小限のブローカー・ドメインを構成し、その動作を検証します。
- a. 最小限のブローカー・ドメインを作成するには、WebSphere Message Broker Toolkit とブローカー・コンポーネントを単一コンピューター上にインストールします。この作業を完全に行うには WebSphere Message Broker Toolkit が必要とされるので、Linux (x86)、Linux (x86-64)、または Windows コンピューターを選択する必要があります。

- a. WebSphere Message Broker Toolkit から開始できるデフォルト構成ウィザードを使用して、インストール後に必要とされるコンポーネントを作成します。
- b. このブローカー・ドメインを使用して、メッセージ・フロー・リソースを作成し、インストールを検証し、製品がどのように作動するかを調べ、製品サンプルを検討します。

検証プロセスについては、105 ページの『第 13 章 インストールの検証』に説明があります。

9. オプション: ブローカーの動作モードを変更します。

WebSphere Message Broker をインストールしてブローカーを作成する際に、トライアル (Trial Edition をインストールした場合) またはエンタープライズ (他のすべてのエディションの場合) のいずれかに設定された動作モードで、ブローカーが構成されます。ブローカーは、購入したライセンスに準拠するように構成する必要があります。したがって、Starter Edition または Remote Adapter Deployment を購入した場合には、すべてのブローカーの動作モードを正しい値に設定しなければなりません。

詳細については、115 ページの『第 14 章 ブローカーの動作モードと機能レベルの確認』を参照してください。

10. オプション: ブローカーの機能レベルを変更します。

新規のメッセージ・フロー・ノードがフィックスパックで配信される場合、それらは WebSphere Message Broker Toolkit に表示されますが、ランタイム・ブローカー環境では使用可能になりません。新規ノードを使用するメッセージ・フローを含む BAR ファイルをデプロイする場合、デプロイメントは失敗します。

新規ノードを使用およびテストしたい場合には、個々のブローカー・ベースでそれらを使用可能にすることができます。詳細については、115 ページの『第 14 章 ブローカーの動作モードと機能レベルの確認』を参照してください。

チュートリアルは完了しました。

第 2 章 システム要件

このセクションの参照情報は、ハードウェア、ソフトウェア、およびライセンスの要件を理解するために使用します。

- 10 ページの『ハードウェア要件』
- 15 ページの『ソフトウェア要件』
- 24 ページの『ライセンス要件』

製品 README ファイル `readme.html` には、この章の情報に対する更新が記載されている可能性があります。README ファイルには、すべてのコンポーネントおよびプラットフォームに直接関係する情報が記載されており、次の製品 README Web サイトで米国英語でのみ保持されています。

www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006913

最新情報を確実に得るために、このファイルを確認してください。翻訳された README ファイルは、次の資料 FTP サイトで入手できます。

<ftp://public.dhe.ibm.com/software/integration/wbibrokers/docs/>

README ファイルは製品に組み込まれていて、最小レベルの情報が記載され、読者をオンライン・バージョンに誘導します。これは以下の場所にあります。

- インストール前は、製品メディア。

README ファイルは、以下のディスクすべての `¥readmes¥locale¥` (ここで、`locale` は国、地域、または言語を識別するもので、`en_US` など) の場所に組み込まれています。

- DVD (Linux(x86)、Linux(x86-64)、および Windows の場合のみ)
- WebSphere Message Broker コンポーネント Disk 1 (すべてのオペレーティング・システム)
- WebSphere Message Broker コンポーネント Disk 2 (Windows のみ)
- WebSphere Message Broker Toolkit Disk 1
- インストール後は、以下のインストール・ディレクトリー。
 - ランタイム・コンポーネントについては、`install_dir¥readmes¥locale¥` (ここで、`locale` は国、地域、または言語を識別するもので、`en_US` など)。
 - WebSphere Message Broker Toolkit については、`package_group_directory¥wmbt¥documentation¥locale¥` (ここで、`locale` は国、地域、または言語を識別するもので、`en_US` など)。

最新の修正とトラブルシューティング技法を含む追加のサポート情報を得るため、次の WebSphere Message Broker サポート Web ページにアクセスしてください。

www.ibm.com/software/integration/wbimessagebroker/support/

時折、サポートされるハードウェアおよびソフトウェア環境は更新されます。次の WebSphere Message Broker 要件 Web サイトで最新の要件情報を確認してください。

www.ibm.com/software/integration/wbimessagebroker/requirements/

ハードウェア要件

すべてのプラットフォームでのプロセッサおよび関連ハードウェアの要件を確認できます。

- 『サポートされるプロセッサ』
- 11 ページの『メモリーおよびディスク・スペースの要件』
- 14 ページの『通信』

サポートされるプロセッサ

WebSphere Message Broker は、複数のプロセッサ上でサポートされています。

サポートされるオペレーティング・システムごとのハードウェア要件は、以下の表で示しています。サポートに関する説明はすべて、記載されているシステムが、互換性のあるオペレーティング・システムの必要なレベルを実行でき、インストールする WebSphere Message Broker コンポーネントと、すべての前提条件製品のための十分なストレージを備えていることを前提とします。

表 4. ハードウェア要件

オペレーティング・システム	要件 ¹
AIX	64 ビット IBM System p [®] システム 商標のある AIX システムを実行可能な、IBM または他のベンダーによるハードウェア ²
HP-Itanium [®]	Itanium システム
Linux (POWER [®])	64 ビット System i [®] および System p IBM POWER プロセッサ・ベースのシステムのみ
Linux(x86)	IBM eserver System x [®] またはそれと同等の Intel ベースのサーバー ³
Linux(x86-64)	AMD64、EM64T、または互換プロセッサ・サーバー ³
Linux (System z [®])	サポートされる Linux on System z リリースのいずれかを実行する能力のある任意のサーバー
Solaris (SPARC)	Sun Microsystems SPARC プロセッサ・サーバー
Solaris (x86-64)	AMD64、EM64T、および互換プロセッサ・サーバー
Windows (32 ビット)	Windows x86 テクノロジー互換 PC ハードウェア ³
Windows (64 ビット)	AMD64、EM64T、または互換プロセッサ・サーバー ³
z/OS ⁴	サポートされる z/OS リリースのいずれかを実行する能力のある任意のサーバー

注:

1. サポートされているプロセッサに関する最新の情報を、WebSphere Message Broker 要件 Web サイトと readme.html ファイルで常に確認してください。

(すべてのコンポーネントの) 製品 DVD または CD に含まれている readme.html ファイルで提供される情報は最小限の水準のものであり、定期的に更新される製品 README Web ページにあるオンライン・ファイルを参照することが勧められています。情報が最新レベルであることを確認するには、必ずオンライン・ファイルを使用してください。

2. AIX システムは、AIX のアプリケーション・バイナリーおよびプログラミング・インターフェースとの準拠についての一連の検証テストに合格した場合のみ使用できます。

3. WebSphere Message Broker Toolkit は、32 ビット・システムと 64 ビット・システムでサポートされます。これは、速度が 700 MHz 以上の Intel® Pentium® III プロセッサ (またはそれ以上) を持つコンピューターを必要とします。この指定は最小サポート・レベルです。パフォーマンスを改良するには、2 GHz のプロセッサを使用してください。

ダイアログによっては、最小モニター解像度として 1024 x 768 が必要になる場合があります (例えば「プリファレンス」ダイアログなど)。

4. 詳細については、「*Program Directory for WebSphere Message Broker for z/OS*」を参照してください。

メモリーおよびディスク・スペースの要件

インストールに必要なメモリーおよびディスク・スペースを確認します。

メモリーおよびディスク・スペース所要量は、インストール・オペレーティング・システム、およびインストールしている WebSphere Message Broker コンポーネントによって異なります。

分散システム

- ランタイム操作をサポートするには 512 MB の RAM が必要です (1 MB は約 1 000 000 バイトです)。
- Linux(x86)、Linux(x86-64)、または Windows 上で WebSphere Message Broker Toolkit 操作をサポートするには 512 MB の RAM が必要です。この仕様は最小サポート・レベルです。パフォーマンスを改良するには、1 GB を提供してください (1 GB は約 1 000 000 000 バイトです)。
- WebSphere Message Broker Explorer をサポートするには 512 MB の RAM が必要です。
- ディスク・スペース要件は、インストールするコンポーネントと、それらのコンポーネント (例えば WebSphere MQ キューおよび持続メッセージ) に必要なワークスペースによって異なります。

少なくとも表に示すスペースがコンピューターにあることを確認してください。表には、製品が永続的に求める要件と一時スペースの両方が記載されています。これらの要件が、製品の最新の readme ファイル `readme.html` で更新されていないことを確認してください。

インストール・ディレクトリーと一時スペースが同じパーティションまたはドライブにある場合は、2 つの数値を加算し、十分なスペースが使用可能かどうかを確認してください。ない場合は、使用可能なストレージを増加させるか、一時スペースの場所またはインストール・ディレクトリーを変更してください。インストールの完了時に一時ファイルは削除されます。

- AIX、HP-UX、および Linux システムでは、デフォルトの一時スペース・ディレクトリーは `/tmp` です。
- Solaris システムでは、デフォルトの一時スペース・ディレクトリーは `/var/tmp` です。
- Windows では、デフォルトの一時スペース・ディレクトリーは `TEMP` システム変数によって指されます。システムによっては、変数 `TMP`

が存在し、TEMP より優先して使用されている場合があるため、これらの両方の変数の設定を確認または変更する必要があります。

インストール・ウィザードには永続的スペースの要件が表示されますが、一時スペースの要件は表示されません。インストール・ウィザードに表示される値が下記の表に示す値より大きい場合は、コンピューターに十分なスペースがあることを確認してからインストールを継続してください。

表 5. ディスク・スペース所要量 (Linux および Windows システム)

コンポーネント	Linux (POWER)	Linux(x86) ¹	Linux(x86-64)	Linux (System z)	Windows (32 ビット) ¹	Windows (64 ビット) ¹
WebSphere Message Broker	520 MB および一時スペースとして 330 MB	456 MB および一時スペースとして 330 MB	477 MB および一時スペースとして 330 MB	469 MB および一時スペースとして 330 MB	495 MB および一時スペースとして 330 MB	538 MB および一時スペースとして 330 MB
WebSphere Message Broker Toolkit	選択不可	1.6 GB および一時スペースとして 1.6 GB	1.9 GB および一時スペースとして 220 MB	選択不可	1.6 GB および一時スペースとして 1.6 GB	1.9 GB および一時スペースとして 220 MB
WebSphere Message Broker Explorer	選択不可	250 MB および一時スペースとして 300 MB	250 MB および一時スペースとして 300 MB	選択不可	200 MB および一時スペースとして 250 MB	200 MB および一時スペースとして 250 MB
WebSphere Message Broker ODBC Database Extender (IE02)	90 MB および一時スペースとして 90 MB	80 MB および一時スペースとして 80 MB	75 MB および一時スペースとして 75 MB	80 MB および一時スペースとして 80 MB	選択不可	選択不可

注:

1. WebSphere Message Broker Toolkit に必要なスペースには、共用リソース・ディレクトリーおよびパッケージ・グループ・ディレクトリー用のスペースも含まれています。

表 6. ディスク・スペース所要量 (UNIX)

コンポーネント	AIX	HP-Itanium	Solaris (SPARC)	Solaris (x86-64)
WebSphere Message Broker	710 MB および一時スペースとして 330 MB	960 MB および一時スペースとして 330 MB	620 MB および一時スペースとして 330 MB	620 MB および一時スペースとして 330 MB
WebSphere Message Broker Toolkit	選択不可	選択不可	選択不可	選択不可
WebSphere Message Broker Explorer	選択不可	選択不可	選択不可	選択不可
WebSphere Message Broker ODBC Database Extender (IE02)	80 MB および一時スペースとして 80 MB	200 MB および一時スペースとして 200 MB	130 MB および一時スペースとして 130 MB	130 MB および一時スペースとして 130 MB

- ブローカーを作成するコンピューターには、ファイル・システム内のブローカー構成データに最大 60 MB が必要です。

- メッセージ・フローがアクセスするユーザー・データベースを作成する場合には、コンピューター上にさらに追加のスペースが必要です。
- いずれか 1 つのコンピューター上に複数のブローカーを作成しようとする場合、追加のメモリーおよびスワップ・スペースが必要となります。例えば、マイグレーションを完了するために、さまざまなバージョンの複数のブローカーを作成することがあります。他のアプリケーション用のスペースおよびメモリー要件に加えて、各ブローカーにつき 1 GB の RAM および 1 GB のスワップ・スペースを計画してください。

ブローカーに対して複雑なメッセージ・フローをデプロイする場合、または多くの異なるタグを含む大規模な (メガバイト数の大きい) メッセージまたは複合メッセージを処理する場合は、上記の数値を大きくする必要があります。

z/OS 詳細を『z/OS 上のディスク・スペース所要量』に示します。「*Program Directory for WebSphere Message Broker for z/OS*」の DASD ストレージ要件に関するセクションを参照して、この情報に対するより新しい更新がないかを調べる必要もあります。

z/OS 上のディスク・スペース所要量

WebSphere Message Broker for z/OS のインストールには、約 400 MB のディスク・スペースを使用します。コンポーネント・ディレクトリーおよび適用される新規サービス・フィックスのための余裕をみて、500 MB の使用を計画してください。

サービスを適用する際、既存のインストール済み環境を置き換えない場合 (例えば、既存のインストール済み環境に新規フィックスパック・レベルを適用する場合には、より高いサービス・レベルのライブラリーに合うように、同じ量のディスク・スペースを計画する必要があります)。

tar を使用してファイルを転送し、それらをパッケージする場合、*.tar* ファイル用に約 200 MB のスペースが必要です。

以下の OMVS コマンドを使用して、ファイル・システム内の使用済みスペースの量と空きスペースの量を確認できます。

```
df -P /pathname
```

100 MB は 512 バイト・セクターが 3 276 800 個に相当します。

以下の表では、z/OS に実装されている各コンポーネント用の WebSphere Message Broker の最小インストール (基本インストールおよび検証テスト) に必要なスペースについての指針を提供します。

コンポーネント	必要なスペース	目的
コンポーネント・ディレクトリー	20 MB	<p>そのコンポーネントのランタイム・デプロイ構成情報および出力ディレクトリーを保持します。</p> <p>この情報には、ESQL、JAR ファイル、メッセージ・セット、XSLT ファイルなどのすべてのデプロイメント情報が含まれています。</p> <p>この情報には、WebSphere Message Broker トレース・ファイルおよび大きくなる可能性のある他のユーザー問題判別データも含まれます。</p> <p>WebSphere Message Broker ランタイム環境へのデプロイメントの潜在的なサイズ、およびこのディレクトリーのサイズ (サブディレクトリーを含む) について考慮する必要があります。</p>
コンポーネント PDSE	1 MB	<p>そのコンポーネントに関するカスタマイズおよび管理ジョブ、プロシージャー、およびデータを保持します。</p> <p>レコード長固定として 80 (LRECL=80) およびフォーマットとして FB 80 を設定して、データ・セットを割り振らなければなりません。50 人のメンバー用にディレクトリー・スペースを予約するか、または PDSE を使用します (可能な場合)。</p>
開始済みタスクのユーザー ID のホーム・ディレクトリー	8 GB	<p>診断材料 (ダンプなど) を収集します。ダンプは、通常 500 MB を超えるサイズです。</p> <p>ファイル・システム内で 8 GB のスペースが使用可能でなければなりません。多くのユーザー ID には、ファイル・システム内にホーム・ディレクトリーを含めることができます。</p>

開始済みタスク・ユーザー ID ホーム・ディレクトリーでダンプが実行される場合に、コンポーネント・ディレクトリーに依然として書き込む必要のあるランタイム・ブローカーで問題の原因とならないように、コンポーネント・ディレクトリーと開始済みタスク・ユーザー ID ホーム・ディレクトリーとは区別しておく必要があります。

通信

ブローカーが使用できるプロトコルをサポートする通信ハードウェアをシステムが備えている必要があります。

以下のプロトコルのうち 1 つ以上を選択します。

- NetBIOS

- SNA LU 6.2
- SPX
- TCP/IP

ソフトウェア要件

オペレーティング・システム、データベース、その他のソフトウェア要件を表示します。

このセクションでは、WebSphere メッセージ・ブローカー の要件に関する情報が提供されています。

- 『32 ビットおよび 64 ビット・プラットフォームのサポート』
- 16 ページの『オペレーティング・システム要件』
- 19 ページの『追加のソフトウェア要件』

32 ビットおよび 64 ビット・プラットフォームのサポート

WebSphere Message Broker は、サポートされるオペレーティング・システム上で 32 ビット・モードまたは 64 ビット・モードで作動します。

次の表は、32 ビットと 64 ビットの各モードのサポートを示しています。バージョン 6.1 以降に加えられた変更は、表の下で要約しています。ご使用のプラットフォームでのサポートが変更された場合は、構成に追加の変更を加えなければならないことがあります。詳しくは、インフォメーション・センター内の『バージョン 6.1 製品からのマイグレーション』および『WebSphere Message Broker の構成』を参照してください。

表 7. 32 ビットおよび 64 ビット操作のサポート

プラットフォーム	WebSphere Message Broker 内部コンポーネントおよびコマンド	32 ビットの実行グループ	64 ビットの実行グループ
AIX ¹	64 ビット	不可	可
HP-Itanium	64 ビット	不可	可
Linux (POWER)	64 ビット	不可	可
Linux(x86)	32 ビット	可	不可
Linux(x86-64) ¹	64 ビット	不可	可
Linux (System z)	64 ビット	不可	可
Solaris (SPARC) ¹	64 ビット	不可	可
Solaris (x86-64)	64 ビット	不可	可
Windows (32 ビット)	32 ビット	可	不可
Windows (64 ビット)	64 ビット	不可	可
z/OS ¹	64 ビット	不可	可

バージョン 6.1 以降の変更:

1. このプラットフォーム上では、32 ビット実行グループによる作成または実行はできなくなりました。実行グループは 64 ビット・モードにしかできません。

実行グループ

以下のいずれかを使用して、実行グループを作成できます。

- WebSphere Message Broker Toolkit
- WebSphere Message Broker Explorer
- mqsicreateexecutiongroup コマンド
- CMP

必要とする実行グループのサイズを指定しない場合、作成されるサイズは、その作成方法、およびそれがデプロイされるターゲット・ブローカーのバージョンに応じて決定されます。以下のデフォルト値が適用されます。

- ターゲット・ブローカーがバージョン 7.0 の場合、実行グループは 64 ビットになります。ただし 32 ビットしかサポートしないプラットフォーム (Linux(x86) および Windows) は別です。

表 8. 実行グループのデフォルト・サイズ

ワークベンチ	コマンド	CMP API	32 ビット専用プラットフォーム	32 ビットおよび 64 ビットプラットフォーム	64 ビット専用プラットフォーム
デフォルト	オプションなし	createExecutionGroup(<i>name</i>)	32 ビット	64 ビット	64 ビット

オペレーティング・システム要件

WebSphere Message Broker は、複数のオペレーティング・システム上でサポートされています。

オペレーティング・システムのソフトウェア要件は、WebSphere Message Broker V7.0で定義され、以下の表に示されています。

最新の情報については、Web ページを参照してください。

表 9. オペレーティング・システム要件

オペレーティング・システム	要件 ¹
AIX	<ul style="list-style-type: none"> • IBM AIX バージョン 5.3 (テクノロジー・レベル 7 SP1)² • IBM AIX バージョン 6.1²
HP-Itanium	<ul style="list-style-type: none"> • HP-UX 11i V2 (B.11.23) for Itanium • HP-UX 11i V3 (B.11.31) for Itanium
Linux (POWER)	<ul style="list-style-type: none"> • Linux PowerPC[®] Red Hat Enterprise Linux V4.0 (サービス・レベル Update 2³ 適用済み) • Linux PowerPC Red Hat Enterprise Linux V5.0³ • Linux PowerPC SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 9 RC5 以上⁵ • Linux PowerPC SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 10

表9. オペレーティング・システム要件 (続き)

オペレーティング・システム	要件 ¹
Linux(x86)	<ul style="list-style-type: none"> • Linux Intel Red Hat Enterprise Linux V4.0 (サービス・レベル Update 2³, 4 適用済み) • Linux Intel Red Hat Enterprise Linux V5.0^{3, 4} • Linux Intel SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 9⁵ • Linux Intel SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 10
Linux(x86-64)	<ul style="list-style-type: none"> • Linux Intel Red Hat Enterprise Linux V4.0 (サービス・レベル Update 2³ 適用済み) • Linux Intel Red Hat Enterprise Linux V5.0³ • Linux Intel SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 9⁵ • Linux Intel SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 10
Linux (System z)	<ul style="list-style-type: none"> • Linux zSeries[®] (64 ビット) Red Hat Enterprise Linux V4.0 (サービス・レベル Update 2³ 適用済み) • Linux zSeries (64-bit) Red Hat Enterprise Linux V5.0³ • Linux zSeries (64 ビット) SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 9⁵ • Linux zSeries (64 ビット) SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 10
Solaris (SPARC)	<ul style="list-style-type: none"> • Sun Solaris Operating Environment 9 (SunSolve の Recommended Patch Cluster レベルを適用済み)⁶ • Sun Solaris オペレーティング環境 10 (SunSolve の Recommended Patch Cluster レベルを適用済み)
Solaris (x86-64)	<ul style="list-style-type: none"> • Sun Solaris Operating Environment 10 (SunSolve の Recommended Patch Cluster レベルを適用済み)⁷
Windows (32 ビット) ⁸	<ul style="list-style-type: none"> • Microsoft[®] Windows XP Professional (サービス・レベル SP2 適用済み) • Microsoft Windows Vista Business Edition (サービス・レベル SP1 適用済み) • Microsoft Windows Vista Enterprise Edition (サービス・レベル SP1 適用済み) • Microsoft Windows Vista Ultimate Edition (サービス・レベル SP1 適用済み) • Microsoft Windows Server 2003 Standard Edition⁹ • Microsoft Windows Server 2003 Enterprise Edition⁹ • Microsoft Windows Server 2003 R2 Standard Edition⁹ • Microsoft Windows Server 2003 R2 Enterprise Edition⁹ • Microsoft Windows Server 2008 Standard Edition • Microsoft Windows Server 2008 Enterprise Edition • Microsoft Windows 7 (32 ビット・サポート)
Windows (64 ビット) ⁸	<ul style="list-style-type: none"> • Microsoft Windows Server 2008 R2 Standard Edition • Microsoft Windows Server 2008 R2 Enterprise Edition • Microsoft Windows 7 (64 ビット・サポート)

表9. オペレーティング・システム要件 (続き)

オペレーティング・システム	要件 ¹
z/OS ¹⁰	<ul style="list-style-type: none"> • IBM z/OS バージョン 1.8 以降 • IBM SMP/E for z/OS バージョン 3.3 以降

注:

1. サポートされているオペレーティング・システムに関する最新の情報を、WebSphere Message Broker 要件 Web サイトと readme.html ファイルで常に確認してください。

(すべてのコンポーネントの) 製品 DVD または CD に含まれている readme.html ファイルで提供される情報は最小限の水準のものであり、定期的に更新される製品 README Web ページにあるオンライン・ファイルを参照することが勧められています。情報が最新レベルであることを確認するには、必ずオンライン・ファイルを使用してください。

2. WebSphere Message Broker バージョン 7.0 では、xIC または xLC++ ランタイム・ライブラリーのバージョン 9.0.0.3 以降が必要です。

WebSphere Message Broker バージョン 7.0.0.1 以降では、xIC または xLC++ ランタイム・ライブラリーのバージョン 11.1 以降が必要です。

このバージョンの xIC または xIC++ コンパイラーがインストールされていない場合、PTF を適用する必要があります。情報および指示は、この PTF サポート資料に記載されています。

3. Red Hat Enterprise Linux V4 または V5 をインストールする場合は、SELinux 機能はサポートされません。SELinux はデフォルトで使用可能になっています。WebSphere Message Broker Toolkit または WebSphere Message Broker ランタイム・コンポーネントをインストールする前に、使用不可にする必要があります。
4. Linux(x86) インストール済み環境で、Red Hat パッケージ・マネージャ (RPM) を使用する場合には、パッケージ rpm-build をインストールします。
5. SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 9 でのインストールにグラフィカル・インターフェースの使用を選択する場合は、パッケージ compat (バージョン 2002.12.6.0 以降) をインストールします。このパッケージは、コンソールまたはサイレント・インストールでは必要ありません。
6. ブローカー・コンポーネントをSolaris (SPARC) の Solaris 9 上にインストールする場合、Recommended Patch Cluster レベルには、パッチ 111711-16 (32 ビット) および 111712-16 (64 ビット) が含まれている必要があります。
7. ブローカー・コンポーネントを Solaris (x86-64) の Solaris 10 上にインストールする場合、Recommended Patch Cluster レベルには、パッチ 119964-08 が含まれている必要があります。

WebSphere Message Broker は、グローバル・ゾーンあるいは完全ルート非グローバル・ゾーンでのみサポートされ、個別にインストールする必要があります。一貫性のある環境にするために、WebSphere Message Broker と

WebSphere MQ の両方に対して同じインストール方法を使用してください。
Solaris ゾーンの詳細については、WebSphere Message Broker サポート・ステートメントを参照してください。

8. すべての Windows オペレーティング・システムの 32 ビット版と 64 ビット版の両方がサポートされます。

Windows Vista およびそれ以降のオペレーティング・システムでは、これらのオペレーティング・システムに固有な機能は WebSphere Message Broker コンポーネントによって使用されません。

注: 64 ビット版を使用する Windows 7 または Windows Server 2008 を実行する場合以外は、32 ビット版を使用してください。

9. Windows Server 2003 Standard Edition および Enterprise Edition では、コマンド・コンソールと、Citrix XenApp (Presentation Server V4.0 および V4.5) からアクセスする WebSphere Message Broker Toolkit の両方を公開できます。
10. z/OS バージョン 1.8 は、RSU0812 以降 (ターゲット・システム用) でなければなりません。

詳細については、「*Program Directory for WebSphere Message Broker for z/OS*」を参照してください。特に、「Preventative Service Planning」にある情報を検討してください。

z/OS 以外のすべての稼働環境で、障害サポートは、既に WebSphere Message Broker によってサポートされているリリースと関連する仮想環境で使用可能です。システム要件の他の箇所で言及されていない限り、WebSphere Message Broker は仮想環境ではテストされていません。したがって、WebSphere Message Broker のサポートは、構成およびセットアップに関する問題、または仮想環境そのものに直接関係する問題を支援することはできません。

追加のソフトウェア要件

WebSphere Message Broker は、正常に動作するために追加のソフトウェア・プロダクトを必要とします。

- 『WebSphere MQ』
- 21 ページの『Microsoft Visual C++ 』
- Java™ ランタイム環境
- 22 ページの『IBM Installation Manager』
- 21 ページの『ブラウザ』

WebSphere MQ

すべての WebSphere Message Broker コンポーネントには、以下に示す、サポートされている最低限のレベルの WebSphere MQ が必要です。

WebSphere MQ バージョン 7.0.1 (WebSphere Message Broker と併用するために調整された契約条件付き) が、DVD (Linux(x86)、Linux(x86-64)、および Windows のみ)、および CD (他のすべてのプラットフォーム) で提供されています。前のバージョンの WebSphere MQ がある場合は、提供されている CD または DVD を使用して、現行のインストール済み環境をアップグレードできます。

ブローカーには WebSphere MQ キュー・マネージャーが必要です。複数のブローカーが単一のキュー・マネージャーを共用することはできません。

表 10. WebSphere MQ 要件

オペレーティング・システム	要件
すべての分散システム ¹	WebSphere MQ バージョン 7.0.1 (以降) ²
z/OS ³	WebSphere MQ バージョン 7.0.1 (以降) および MQ Java Classes フィーチャー

注:

1. WebSphere MQ は、WebSphere Message Broker Toolkit だけをインストールする Linux(x86)、Linux(x86-64)、または Windows システム上では必要ありません。

WebSphere Message Broker Toolkit または WebSphere Message Broker Explorer とブローカーの間で SSL 接続を構成できます。SSL 接続を構成するには、WebSphere Message Broker Toolkit または WebSphere Message Broker Explorer がインストールされているコンピューターに SSL 証明書マネージャーをインストールしておく必要があります。WebSphere MQ を使用して SSL 管理を提供することを選択する場合は、Client または Server をインストールしてください。両方のコンポーネントとも、IBM Key Management ツールが組み込まれています。

2. 最小限インストールしなければならないコンポーネントの集合は、サーバーと Java Messaging コンポーネントです。

WebSphere MQ のインストールは、WebSphere Message Broker のインストールの前でも後でもかまいません。

バージョン 7.0.1 を既にインストール済みの場合は、インストールに Java Messaging コンポーネントが含まれていることを確認します。インストールされていない場合は、WebSphere MQ メディアからそれを追加します。

プラットフォーム (Windows を含む) で直接 WebSphere MQ バージョン 7.0.1 インストール・プログラムを開始する場合は、カスタム・インストールを選択し、サーバーと Java Messaging コンポーネントを組み込みます。

WebSphere MQ Explorer (Linux(x86) および Windows でのみ使用可能なグラフィカル・インターフェース) を使用する場合は、WebSphere Eclipse プラットフォーム・バージョン 3.3 および WebSphere MQ Explorer コンポーネントをインストールします。

他の WebSphere MQ コンポーネントはオプションです。

3. z/OS では、WebSphere MQ は必須要件で、WebSphere Message Broker をインストールする前にインストールしなければなりません。

WebSphere MQ の必要なレベルについて詳しくは、「*Program Directory for WebSphere Message Broker for z/OS*」を参照してください。

WebSphere MQ 製品およびサポートされているバージョンについて詳しくは、WebSphere MQ 製品情報 Web サイトを参照してください。

Microsoft Visual C++

WebSphere Message Broker の Windows 64 ビット・バージョンを Windows 7 または Windows Server 2008 RC2 にインストールする場合にのみ、32 ビットまたは 64 ビット用の Microsoft Visual C++ Runtime V10 が必要になります。製品メディアで提供される Visual C++ Runtime V10 インストーラーの言語は、米国英語だけです。WebSphere Message Broker ランタイム・インストーラーは、Visual C++ Runtime V10 を自動的にインストールします。Visual C++ Runtime V10 を別個にインストールする場合、インストーラーは Runtime ディスク 1 のルートにあります。

この製品の多文化バージョン (翻訳されたインストール・インターフェースおよび製品使用条件を表示するが、それ以外は米国英語バージョンと同一) をインストールする場合は、WebSphere Message Broker ランタイムをインストールする前に、必要な両方のバージョンを Microsoft Web サイトからダウンロードしてインストールする必要があります。

JRE

Java ランタイム環境 (JRE) がすべてのプラットフォーム上で必要です。

- 分散プラットフォームでは、Java Runtime Environment (JRE) バージョン 6 SR6 が製品コンポーネント内に組み込まれています。
- z/OS では、JRE (バージョン 6 で、SR6 以降のサービス・リリースでなければならない) を取得してインストールする必要があります。

詳細および最新情報については、「*Program Directory for WebSphere Message Broker for z/OS*」を参照してください。特に、「Preventative Service Planning」にある情報を検討してください。

WebSphere Message Broker は、Java Message Service Specification バージョン 1.1 に準拠するすべての JMS プロバイダーをサポートし、ここで言及されている最小レベルの JRE を必要とします。クライアントがブローカーに組み込まれる JMS プロバイダーを選択するときには、この両方の要素を考慮する必要があります。

ブラウザー

WebSphere Message Broker Toolkit でインフォメーション・センターを表示して最良の結果を得るには、Linux(x86) および Linux(x86-64) の場合は Mozilla 1.4.2 (以降) を使用してください。

Windows の場合は、組み込みブラウザーが起動されてインフォメーション・センターが表示されます。

一部の Linux(x86) および Linux(x86-64) オファリングでは、デフォルトで Mozilla はインストールされません。ご使用の Linux(x86) または Linux(x86-64) システムに WebSphere Message Broker Toolkit をインストールすることを計画している場合、Mozilla のサポートされるバージョンがすでにインストールされていることを確認してください。インストールされていない場合、Linux(x86) または Linux(x86-64) オペレーティング・システム・メディアから Mozilla をインストールしてください。

IBM Installation Manager

IBM Installation Manager によって WebSphere Message Broker Toolkit がインストールされます。

バージョン 7 以降のすべての Rational® 製品は、IBM Installation Manager によってインストールされます。このプログラムは、管理、更新、ライセンス交付、およびアンインストールも制御します。WebSphere Message Broker Toolkit には、いくつかの Rational 製品のコンポーネントも含まれるので、Installation Manager が含まれていてそれを使用します。

以下の Rational 製品は Installation Manager によって制御されます。

- WebSphere Message Broker Toolkit バージョン 7.0 以降
- Rational Application Developer (RAD) バージョン 7.5 以降
- Rational Software Architect (RSA) バージョン 7.0 以降
- WebSphere Integration Developer (WID) バージョン 7.0.0.1 以降

Installation Manager は、WebSphere Message Broker Toolkit およびこのリストの中の他の製品に組み込まれています。WebSphere Message Broker Toolkit (または他のリストされている製品) を最初にインストールするときには、Installation Manager は、ユーザーが指定するディレクトリーに自身をインストールしてから、WebSphere Message Broker Toolkit (または他のリストされている製品) のインストールを駆動します。別の製品をインストールする場合には、Installation Manager は自身が既にインストールされていることを検出し、その製品のインストールだけを駆動します。

例えば Eclipse フィーチャーおよびプラグインなど、他の製品がインストールされている場合には、WebSphere Message Broker Toolkit は特定のリソースをそれらの製品と共有します。インストール済み製品によって使用されるすべての共通リソースは、共有リソース・ディレクトリーと呼ばれる単一のディレクトリーにインストールされる必要があります。WebSphere Message Broker Toolkit または他の Rational 製品を最初にインストールするとき、このディレクトリーの位置を指定するように指示されます。

別の製品をインストールする場合には、Installation Manager は共有リソース・ディレクトリーを検出し、インストール・プロセス中にその内容を使用します。このディレクトリーの位置を変更することはできません。

共有リソース・ディレクトリーは、このコンピューターにとってローカルなドライブ上になければなりません。マップされたドライブやリモート・ドライブは指定できません。共有リソース・ディレクトリーに指定するドライブには、予定されているすべてのインストールを処理するのに十分なサイズが必要です。インストール後にこのディレクトリーを変更または拡張することはできません。最初のインストール中にこのディレクトリーを指定する際には、競合の原因になり得るどんなファイルも入っていないようにするため、新規ディレクトリーを指定してください。

WebSphere Message Broker Toolkit のメモリー所要量は、11 ページの『メモリーおよびディスク・スペースの要件』にリストされています。追加の Rational 製品をインストールする予定の場合には、追加の製品ごとに 2 GB を見込んでください。

インストールされた Rational 製品のために作成するワークスペース・リソースを管理できる、別のディレクトリー内のスペースを割り振る必要もあります。

WebSphere Message Broker Toolkit をインストールする際に、パッケージ・グループを指定するようにも指示されます。単一パッケージ・グループにインストールする製品群は Eclipse フィーチャーおよびプラグインを共有し、それらのリソースは単一の Eclipse インスタンスの中でロードされ、その中で表示可能です。パッケージ・グループ内の製品を他の製品と一緒にインストールするか、それとも WebSphere Message Broker Toolkit を新規パッケージ・グループにインストールするかを選ぶことができます。

各パッケージ・グループは他のパッケージ・グループ内の製品からは分離されていますが、すべてのパッケージ・グループが単一の共有リソース・ディレクトリーにアクセスします。パッケージ・グループ・ディレクトリーの位置を指定するように指示されます。新規パッケージ・グループごとに、新しいディレクトリーを指定する必要があります。すべての製品固有のファイルが、このディレクトリーにインストールされます。

WebSphere Message Broker Toolkit と他の Rational 製品の異なる組み合わせをインストールするために、別個のパッケージ・グループを使用することを選ぶなら、ユーザーはそれぞれ調整された Eclipse インスタンスへのアクセスを得ることができます。最初の製品をインストールするときに、最初のパッケージ・グループが **IBM WebSphere Message Broker Toolkit** という名前で作成されます。この名前は固定されており、変更できません。

新規パッケージ・グループに別の製品をインストールすることを選んだ場合には、別のグループが **IBM Software Development Platform_1** という名前で作成されます。新しいパッケージ・グループ名はそれぞれこの同じ命名パターンに従い、数字の接尾部が 1 ずつ増分されます。

例えば、次のようなパッケージ・グループを定義したとします。

- **IBM WebSphere Message Broker Toolkit**。これには WebSphere Message Broker Toolkit と RAD をインストールしました。
- **IBM WebSphere Message Broker Toolkit_1**。これには WebSphere Message Broker Toolkit と RSA をインストールしました。
- **IBM WebSphere Message Broker Toolkit_2**。これには WID と RSA をインストールしました。

これらのパッケージ・グループのいずれかで Eclipse セッションを開始すると、そのグループにインストールされた製品に関連したリソースだけにアクセスすることができます。

いずれかの製品の後続のバージョンを別のパッケージ・グループにインストールする場合、その更新はそのグループ内でのみ使用可能です。共有リソース・ディレクトリーも共有ファイルの後続のバージョンと共に更新されますが、それらは元のバージョンとは別に維持され、アップグレードされた製品だけに使用されます。

各 Rational 製品は、どのバージョンのプラグインおよびフィーチャーを必要とするかを指定します (該当する場合)。Installation Manager は、各パッケージ・グループ

内でそれらの要件の整合性を保ちます。現在インストール中の製品がこの整合性を壊す場合には、Installation Manager はそのパッケージ・グループへのインストールが行われないようにします。

さらに Installation Manager は、WebSphere Message Broker Toolkit および上にリストされている他の製品のアンインストールも制御します。すべてのパッケージ・グループ内にある、リストされたすべての製品が除去されるまでは、Installation Manager をアンインストールすることはできません。

Installation Manager は、どのランタイム・コンポーネントにも必要ではありません。

ライセンス要件

このセクションの参照情報は、ライセンス要件を理解するために使用します。

WebSphere Message Broker をインストールして、変換およびルーティング操作すべてをサポートすることができます。適切な場合、機能のサブセットだけでビジネス要件を満たせるのであれば、制限付きの機能セットをサポートするエディションをインストールすることができます。製品の用法と構成が、購入したご使用条件に適合していることを確認してください。

- **WebSphere Message Broker Trial Edition.** このエディションは Web から無料でダウンロードできます。このエディションには独自のライセンスと契約条件があり、90 日間有効です。使用可能なすべての機能を使用でき、作成および保守するリソースの数は制限されていません。
- **WebSphere Message Broker Starter Edition.** 使用可能なほとんどまたはすべての機能を使用したいものの、キャパシティー要件を低く抑えるために制限された環境を構成する場合は、このエディションを購入してください。使用可能なすべての機能を使用できますが、作成および保守するリソースの数は制限されています。
- **WebSphere Message Broker Remote Adapter Deployment.** WebSphere Message Broker の標準的な使用として、エンタープライズ情報システム (EIS) との統合を期待している場合は、このエディションを購入してください。このエディションは、EIS との対話を可能にする開発リソースのサブセットをサポートします。
- **WebSphere Message Broker.** 使用可能なほとんどまたはすべての機能を使用するフル・ブローカー環境をセットアップする場合は、フル (無制限) ライセンスが必要です。

Remote Adapter Deployment か、Starter Edition または Trial Edition では、WebSphere Message Broker for z/OS は利用できません。

フル・ライセンスから 2 つの特殊ライセンスのいずれかにご使用条件を変更することにした場合には、現行の構成がサポートされなくなることがあります。各ライセンスでどのフィーチャーが使用可能かに関する詳細、および環境の構成方法については、インフォメーション・センターの『WebSphere Message Broker 技術概説』を参照してください。

適切な場合、別のライセンスを購入することにより、他のエディションからフル・ライセンスにアップグレードすることができます。

ライセンスは開発および単体テスト目的での製品の使用も対象とします。
WebSphere Message Broker 用のリソースおよびアプリケーションで作業をしている組織内のすべての開発者は、すべてのコンポーネントの 1 コピーを各自のコンピューター上にインストールできます。開発者は機能上またはリソース上の制約事項なしにブローカー環境を作成および構成できます。WebSphere Message Broker Toolkit のインストールでは、Windows、Linux (x86)、および Linux (x86-64) コンピューターでの使用のみに制限されます。WebSphere Message Broker for z/OS 用のライセンスを購入した場合でも、単体テスト環境はこれら 3 つのプラットフォームのみに限定されます。

また、提供される WebSphere MQ 製品については、購入したご使用条件に関係なく、開発者が開発構成およびテスト構成を作成するコンピューターにインストールすることができます。

インストール後には、選択した言語で、ディレクトリー `install_dir/license/` においてライセンスを表示できます。WebSphere Message Broker が使用するサード・パーティー製品についても、契約条件が提供されます。これらの詳細が記載されたファイルは、1 つ以上のランタイム・コンポーネントをインストールするときに、同一のライセンス・サブディレクトリーに保管されます。

ご使用条件に関する詳細をさらに必要とする場合や、追加のライセンスを購入したり、購入済みのライセンスのタイプを変更したりしたい場合には、IBM 担当員にお問い合わせください。

第 3 章 共存とマイグレーション

WebSphere Message Broker バージョン 7.0 は、以前のバージョンとの共存が可能です。

WebSphere Message Broker バージョン 7.0 を、前のバージョンがインストールされているコンピューターにインストールできますが、いずれのバージョンも *install_dir* として参照される固有のディレクトリーにインストールする必要があります。異なるバージョンが共存可能であり、独立して実行できます。また、適切な場合には、ブローカーをあるバージョンから別のバージョンにマイグレーションできます。さらに、同一バージョンの複数のインスタンスを、同じコンピューター上のそれぞれ個別のディレクトリーにインストールすることもできます。この対象には、フィックスパック・レベルの異なるブローカーも含まれます。例えば、V7.0.0.0 と V7.0.0.1 を共存できます。さらに、WebSphere Message Broker ランタイムおよび WebSphere Message Broker Toolkit の同一バージョンの複数のインスタンスを同じコンピューター上にインストールできます。しかし、WebSphere Message Broker Explorer はこれに該当せず、1 つのバージョンの WebSphere Message Broker Explorer のみが許可されます。

以下のセクションで、詳しく説明します。

- 『共存』
- 32 ページの『マイグレーション』

共存

以下のように WebSphere Message Broker バージョン 7.0 を以前のバージョンと共存させることが可能です。

- ブローカー・コンポーネントは、バージョン 6.0 およびバージョン 6.1 のランタイム・コンポーネントと共存可能です。
- WebSphere Message Broker Toolkit は、バージョン 6.0 およびバージョン 6.1 のツールキットと共存可能です。

以下のセクションでは、共存を実現する方法と、適用される制限について説明します。

分散システム上のブローカー・コンポーネント

WebSphere Message Broker を分散システムにインストールする場合、インストール・ウィザードによるデフォルト・アクションでは、ブローカーをデフォルト・ディレクトリーにインストールする「標準インストール」が実行されます。

標準インストール用のデフォルト・ディレクトリーは固定であり、変更できません。このディレクトリーには、インストールしている製品のバージョンおよびリリースが「v.r (バージョン.リリース)」のフォーマットで、以下のような値として含まれます。

Linux /opt/ibm/mqsi/v.r

UNIX /opt/IBM/mqsi/v.r

Windows

C:\Program Files\IBM\MQSI\v.r (Windows (x86) 製品 (32 ビット・オペレーティング・システム) および Windows (x86-64) 製品 v.r の場合)

C:\Program Files(x86)\IBM\MQSI\v.r (Windows (x86) 製品 (64 ビット・オペレーティング・システム) の場合)

これらのロケーションは、各プラットフォームの *install_dir* のデフォルト値を定義します。

したがって、製品の固有のバージョンおよびリリースは、それぞれ異なるデフォルト・ロケーションにインストールされます。

インストール・ウィザードは、バージョンおよびリリース・レベルの違いのみ区別可能であり、修正レベルやフィックスパック・レベルの違いは区別できません。現在の修正レベルは 0 (バージョン 7.0.0) です。以降の修正レベルが使用可能になる場合、インストール先は同じデフォルト・ロケーションになり、それに伴いバージョン 7.0.0 の修正レベルが (例えば、バージョン 7.0.1 のように) アップグレードされます。

ウィザードは、フィックスパックを以前のフィックスパックの上にインストールしますが、以前の修正やフィックスパックをより最近のものの上にインストールすることは禁止します。

同じバージョンおよびリリースの製品を、複数回インストールできます。その際に、インストールの修正レベルやフィックスパック・レベルは、同じであっても、異なってもかまいません。同時インストールを行うには、「カスタム・インストール」オプションを選択し、インストールごとに固有のディレクトリー (いずれか一方にはデフォルト・ディレクトリーを指定可) を指定する必要があります。

カスタム・インストールを使用して、デフォルト以外のディレクトリーにインストールすることも可能です。

カスタム・インストールを選択したコンピューター上で、一度も製品の標準インストールを実行していない場合、ディレクトリーはデフォルト・ディレクトリーに初期設定されていますが、このデフォルト値は選択した値に変更できます。

以前のバージョンのブローカーのインストールが既に含まれているディレクトリーにブローカーをインストールしようとする、インストールを続行するかどうかを確認するプロンプトが出されます。これは、インストールによって既存のインストールが上書きされるためです。既存の構成を保存するには、インストールを取り消し、別のディレクトリーを選択します。

同一のバージョンおよびリリースを複数回インストールする場合、ネイティブ・インストーラーのサポートではこれらのインストールを通常の方法で管理できません。62 ページの『複数のブローカー・インストールをアンインストールする方法』を参照してください。

修正レベルやフィックスパック・レベルが異なる複数のインストールを使用して、修正や新機能をテストしたり、新規フィックスパック・レベルの段階的な導入を行ったりすることができます。詳しくは、インフォメーション・センターの『サービスの適用』を参照してください。

インストールの間および完了後には、自分が現在ログオンに使用しているユーザー ID に関連付けられた作業ディレクトリーにもファイルが保管されます。ロケーションは、オペレーティング・システムに応じて異なります。

Linux および UNIX

`/var/mqsi`

Windows

`%ALLUSERSPROFILE%¥Application Data¥IBM¥MQSI`

環境変数 `%ALLUSERSPROFILE%` は、システム作業ディレクトリーを定義します。デフォルトのディレクトリーは、オペレーティング・システムによって異なります。

- Windows XP および Windows Server 2003: `C:¥Documents and Settings¥All Users¥Application Data¥IBM¥MQSI`
- Windows Vista およびそれ以降のオペレーティング・システム: `C:¥ProgramData¥IBM¥MQSI`

実際の場所はコンピューターによって異なる場合があります。

単一のコンピューターに複数のインストールがある場合、作業ディレクトリーのルートに保管されている `install.properties` ファイルの内容を検討できます。バージョン 6.1 以降の各インストールについて、ファイルのロケーションおよびレベルが更新されています。

次の例では、単一のインストールが完了した Windows (32 ビット) オペレーティング・システムの `install.properties` の内容が示されています。

```
C¥:¥¥Program¥ Files¥¥IBM¥¥MQSI¥¥7.0=7.0.0.0
```

(円記号 ¥ はエスケープ文字として解釈されます。これは、文字を保存するために、ストリング内の非英字と非数値の各文字の前に挿入されます。この例では、コロン、スペース、およびいくつかの円記号がエスケープされます。)

何らかの理由で、最新のインストールから以前のレベルに戻す場合は、現在のバージョンをアンインストールしてから、以前のレベルの製品をインストールする必要があります。アンインストールする前に、前の状態に戻すすべてのリソースのバックアップをとります。

標準インストールの完了時には、バージョンおよびリリースがディレクトリー構造に組み込まれるため、バージョン 6.0、またはバージョン 6.1 のいずれかを既にインストールしているコンピューターに、バージョン 7.0 以降のリリースもインストールすることができます。バージョン 7.0 のインストールは、既存のインストールと共存可能です。これら 2 つの構成は、独立して操作可能です。

バージョン 7.0 以降のリリースのカスタム・インストールを使用する場合、リリースごとに固有のインストール・ディレクトリーを指定可能であり、そうすることにより単一コンピューターにおけるリリースの共存を実現します。

バージョン 7.0 以降のインストール回数は、システム・リソースが使用可能かどうかによってのみ制限されます。

異なるバージョンおよびリリースが共存可能であるため、旧バージョンからバージョン 7.0 へのマイグレーションの方法は制御可能です。その際には、すべてのブローカーを同時にマイグレーションする必要はありません。詳しくは、32 ページの『マイグレーション』を参照してください。

z/OS 上のブローカー・コンポーネント

z/OS では、ブローカーの複数のコピーを同一コンピューターにインストールすることが可能です。その場合は、コピーごとに異なるインストール・ロケーションを指定します。インストールは、相互に独立して実行できます。コードのバージョンおよびリリース・レベル (バージョン 6.0、バージョン 6.1、およびバージョン 7.0) は、同じであっても、異なってもかまいません。インストール回数は、システム・リソースが使用可能かどうかによってのみ制限されます。

ロケーション、ライブラリー、およびファイル・システムのパスについては詳しくは、「*Program Directory for WebSphere Message Broker for z/OS*」を参照してください。

Linux (x86 版)、Linux (x86-64 版)、および Windows 上の WebSphere Message Broker Toolkit

Linux WebSphere Message Broker Toolkit をインストールする場合、インストール・ウィザードによるデフォルト・アクションでは、Installation Manager ファイル、共有ファイル、および製品固有のファイルが以下のディレクトリにインストールされます。

- Installation Manager のインストール・ディレクトリ:
/opt/IBM/InstallationManager
- 共有リソース・ディレクトリ:
/opt/IBM/SDP70Shared
- パッケージ・グループ・ディレクトリ:
/opt/IBM/WMBT700

このロケーションは、このプラットフォームの *install_dir* のデフォルト値を定義します。

これらのディレクトリの説明については、89 ページの『第 11 章 WebSphere Message Broker Toolkit のインストール』を参照してください。

WebSphere Message Broker Toolkit バージョン 7.0 の複数のインスタンス (修正レベルやフィックスパック・レベルは、同じであっても、異なってもかまいません) を、単一のコンピューターにインストールできます。それぞれのインストール済み環境は別個のパッケージ・グループに属する必要があります。パッケージ・グループについての詳しい説明は、22 ページの『IBM Installation Manager』を参照してください。

Windows

WebSphere Message Broker Toolkit をインストールする場合、インストー

ル・ウィザードによるデフォルト・アクションでは、Installation Manager ファイル、共有ファイル、および製品固有のファイルが以下のディレクトリにインストールされます。

- Installation Manager のインストール・ディレクトリ:
 - C:\Program Files\IBM\InstallationManager (32 ビット版の場合)
 - C:\Program Files (x86)\IBM\InstallationManager (64 ビット版の場合)
- 共有リソース・ディレクトリ:
 - C:\Program Files\IBM\SDP70Shared (32 ビット版の場合)
 - C:\Program Files (x86)\IBM\SDP70Shared (64 ビット版の場合)
- パッケージ・グループ・ディレクトリ:
 - C:\Program Files\IBM\WMBT700 (32 ビット版の場合)
 - C:\Program Files (x86)\IBM\WMBT700 (64 ビット版の場合)

このロケーションは、このプラットフォームの *install_dir* のデフォルト値を定義します。

これらのディレクトリの説明については、89 ページの『第 11 章 WebSphere Message Broker Toolkit のインストール』を参照してください。

WebSphere Message Broker Toolkit バージョン 7.0 の複数のインスタンス (修正レベルやフィックスパック・レベルは、同じであっても、異なっていてもかまいません) を、単一のコンピューターにインストールできます。それぞれのインストール済み環境は別個のパッケージ・グループに属する必要があります。パッケージ・グループについての詳しい説明は、22 ページの『IBM Installation Manager』を参照してください。

WebSphere Message Broker Toolkit を Windows にインストールする場合、独自のディレクトリ・ロケーションを指定する際には、Windows ファイル・システムによって課される 256 文字のファイル・システム制限に注意してください。この制限によりリソース (例えばメッセージ・フロー) へのパス指定に制約事項が生じることがあり、パスとリソース名の組み合わせがこの制限を超えるとアクセスの問題が発生することがあります。この制約事項に関連した問題が生じないようにするには、インストール場所とリソース名を短くするようにしてください。

WebSphere Message Broker Toolkit バージョン 7.0 は、WebSphere Message Broker Toolkit バージョン 6.0 またはバージョン 6.1 と共存可能です。単一のコンピューターにインストール可能な WebSphere Message Broker Toolkit バージョン 6.0 のインスタンスは、1 つだけです。

WebSphere Message Broker Toolkit バージョン 7.0 は、ブローカーについて説明された制限を前提として、ブローカーの複数のインストールと共存可能です。

インストールのための環境の設定

単一のコンピューターに複数のインストールを保持できるので、そのようなコンピューターでコマンドを発行する際には、宛先とするインストール・コードのバージョンが正しいことを確認する必要があります。

- Linux および UNIX システムでは、プロファイル・ファイル *mqsiprofile* を実行して正しい環境をセットアップしてから、*mqsicreatebroker* などの他の WebSphere

Message Broker コマンドを実行する必要があります。プロファイル・ファイルは、`install_dir/bin` に保管されています。

システム・ログオン・プロファイルにプロファイル・ファイルを追加すると、ログオンするたびにそのファイルが自動的に実行されます。

- Windows システムでは、インストールごとにコマンド・コンソールが用意されます。そのため、特定のインストールについて、正しいウィンドウでコマンドを実行する必要があります。

希望に応じて、`install_dir\bin` に保管されている `mqsiprofile.cmd` ファイルを実行できます。

同じコンピューターにこの製品の旧バージョンをインストールしている場合は、現在のユーザー ID に旧プロファイルが設定されていないことを確認してください。2つのプロファイルは非互換であり、予測不能な結果を生じる可能性があります。バージョンごとに異なるユーザー ID を使用し、各ユーザー ID に正しいプロファイルに関連付けることで、潜在的な問題を回避することを検討してください。

この要件は、z/OS システムには適用されません。

`mqsiprofile` について詳しくは、インフォメーション・センターの『コマンド環境のセットアップ』を参照してください。

単一のシステムに一度にインストールできる WebSphere Message Broker Explorer のコピーは 1 つのみなので、最新レベルの WebSphere Message Broker Explorer がインストールされていることを確認する必要があります。例えば、WebSphere Message Broker V7.0.0.0 と WebSphere Message Broker V7.0.0.1 を同じシステムにインストールしている場合は、WebSphere Message Broker Explorer が新しい方の V7.0.01 レベルでインストールされていることを確認する必要があります。この内容は Windows、Linux (x86)、および Linux (x86-64) システムのみに適用されます。

マイグレーション

WebSphere Message Broker バージョン 7.0 は、旧バージョンやバージョン 7.0 の他のインストールと同じコンピューターにインストール可能なので、バージョン 7.0 をインストールする前にマイグレーション・タスクを実行する必要はありません。

WebSphere Message Broker バージョン 7.0 では WebSphere MQ バージョン 7.0.1 が必須であるため、既存の WebSphere Message Broker バージョン 6.0 および WebSphere Message Broker バージョン 6.1 インストールを WebSphere MQ バージョン 7.0.1 を使用するように更新してから、WebSphere Message Broker バージョン 7.0 をインストールする必要があります。

WebSphere Message Broker バージョン 7.0 へのマイグレーションについて詳しくは、インフォメーション・センターの『マイグレーションおよびアップグレード』を参照してください。

第 4 章 多文化サポート

分散システムおよび z/OS の両方において、言語選択で多文化サポートが使用可能です。

ユーザー・インターフェースとメッセージ・カタログは、以下の言語で分散システム上に備えられています。

- ブラジル・ポルトガル語
- フランス語
- ドイツ語
- イタリア語
- 日本語
- 韓国語
- 中国語 (簡体字)
- スペイン語
- 中国語 (繁体字)
- 米国英語

メッセージ・カタログは z/OS で以下の言語で提供されています。

- 日本語
- 中国語 (簡体字)
- 米国英語

z/OS オペレーター・コンソールに書き込まれるメッセージ (syslog に書き込まれるメッセージのサブセット) は、米国英語だけであり、選択するシステム構成に応じて、大/小文字混合か大文字で書き込まれます。

WebSphere Message Broker では、生じる問題をレポートするのにプロダクト・コンポーネントで使用されるメッセージ・カタログを選択できます。WebSphere Message Broker と共に使用するプロダクトでは、WebSphere Message Broker にメッセージ・カタログを使用してエラーをレポートさせたり、独自の手法を使用して問題をレポートすることができます。

使用する他のプロダクトに付属の資料を参照して、採用するプロセスを決定する必要があります。特に、使用するデータベースに付属の資料と、WebSphere Message Broker 環境に統合するユーザー定義ノードまたはパーサーに付属の資料を調べるようにします。

WebSphere Message Broker および WebSphere MQ は、サポートされている任意の言語でインストールできます。各プロダクトの全言語バージョンは、他のプロダクトの全言語バージョンと互換性があります。全言語の WebSphere MQ メッセージング・プロダクトは、WebSphere Message Broker に付属の WebSphere MQ サーバー CD にあります。

内部コンポーネント間メッセージ交換用に生成されるすべてのメッセージ (例えば、mqsireadlog 用にデプロイされた構成メッセージおよびログ・ファイル) は、コード・ページ 1208 (utf-8) で生成されます。

ロケール

メッセージ・サポートは、いくつかのロケールで提供されています。

WebSphere Message Broker は、少なくとも以下のロケールをサポートしています。

Windows	AIX	Solaris	HP-UX ¹	Linux ²	z/OS
英語 (米国)	en_US	en_US	en_US.iso88591、 en_US.roman8	en_US	En_US.IBM- 1047、 En_US.IBM-037
ドイツ語 (標準)	de_DE、De_DE	de	de_DE.ISO88591、 de_DE.roman8	de_DE	サポートされてい ない
スペイン語 (現代語)	es_ES、Es_ES	es	es_ES.ISO88591、 es_ES.roman8	es_ES	サポートされてい ない
フランス語 (標準)	fr_FR、Fr_FR	fr	fr_FR.ISO88591、 fr_FR.roman8	fr_FR	サポートされてい ない
イタリア語 (標準)	it_IT、It_IT	it	it_IT.ISO88591、 it_IT.roman8	it_IT	サポートされてい ない
ポルトガル語 (ブラジ ル語)	pt_BR、Pt_BR	pt_BR	pt_BR.ISO88591、 pt_BR.utf8	pt_BR	サポートされてい ない
日本語	Ja_JP、ja_JP	ja_JP.PCK、ja	ja_JP.SJIS、 ja_JP.eucJP	ja_JP	Ja_JP.IBM-939、 Ja_JP.IBM-930
中国語 (簡体字) (中 国)	Zh_CN、zh_CN	zh、zh.GBK	zh_CN.hp15CN	zh_CN	Zh_CN.IBM- 1388、 Zh_CN.IBM-935
中国語 (繁体字) (台 湾)	Zh_TW、zh_TW	zh_TW、 zh_TW.BIG5	zh_TW.big5、 zh_TW.eucTW	zh_TW	サポートされてい ない
韓国語	ko_KR	ko	ko_KR.eucKR	ko_KR	サポートされてい ない

注:

1. HP-Itanium オペレーティング・システムでのシステム・ログ・サポートは限られているため、メッセージは米国英語でのみログに書き込まれます。
2. これらの値は、すべての Linux システムで同じです。

他のロケールもサポートされる可能性があります。詳細については、ご使用のオペレーティング・システムを確認してください。

第 5 章 インストール・パッケージ

使用可能なインストール・パッケージと、それらのパッケージの内容を表示します。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

- 『パッケージ化のオプション』
- 36 ページの『パッケージの内容』
- 38 ページの『ブローカー・コンポーネントおよび WebSphere Message Broker Explorer パッケージ』
- 40 ページの『Toolkit パッケージ』
- 41 ページの『DVD パッケージ』

パッケージ化のオプション

物理メディアと電子イメージの両方を WebSphere Message Broker のインストールに使用できます。

物理メディア

WebSphere Message Broker Starter Edition、Remote Adapter Deployment、および完全 (無制限) ライセンスに関する物理メディアを注文できます。内容については、36 ページの『パッケージの内容』で説明されています。

メディアから製品をインストールする際には、購入したライセンスに準拠するモードで作動するようにブローカーを構成してください。詳細は、インフォメーション・センターを参照してください。

電子イメージ

IBM Passport Advantage® に登録されている場合は、WebSphere Message Broker Starter Edition、Remote Adapter Deployment、およびフル (制限なし) ライセンスの IBM パスポート・アドバンテージ についての電子イメージをダウンロードすることができます。1 つの物理メディアのセットを求めることもできます。

電子イメージは、36 ページの『パッケージの内容』で説明されている物理メディアをそのままミラーリングしたものです。ただし、CD または DVD イメージとしてはフォーマットされていません。詳細については、おおよび登録するには、IBM パスポート・アドバンテージの Web サイトにアクセスしてください。

電子イメージは、z/OS 版の WebSphere Message Broker を求める場合に入手できます。IBM 担当員に問い合わせて詳しい情報を入手し、指示に従ってください。

これらのイメージから製品をインストールする際には、購入したライセンスに準拠するモードで作動するようにブローカーを構成する必要があります。詳細は、インフォメーション・センターを参照してください。

Trial Edition の電子イメージ

分散システムの場合に限り、WebSphere Message Broker Trial Edition の電子イメージを、developerWorks® WebSphere Message Broker トライアル・パッケージの Web サイトからダウンロードできます。

ランタイム・コンポーネントおよび WebSphere Message Broker Toolkit に関するイメージが用意されています。この版を使用して、製品が自分のビジネス要件を扱う方法を評価し、貴社の既存のソフトウェアと併用する方法を検討してください。

サポートされる試用版に関する最新情報については、必ず製品 README Web サイト上の WebSphere Message Broker readme.html ファイルを確認してください。

以下の制約事項が適用されます。

- すべての製品機能を使用できますが、ブローカー・コンポーネントが作動するのはインストール後 90 日間に限定されます。
- WebSphere MQ バージョン 7.0.1 の電子イメージは、WebSphere Message Broker Trial Edition には組み込まれていません。まだ WebSphere MQ バージョン 7.0.1 を注文してインストールしていない場合は、Web から試用パッケージをダウンロードできます。WebSphere MQ の体験版には、必要な Java および Eclipse コンポーネントが付属しています。WebSphere MQ トライアル・パッケージ Web サイトからバージョン 7.0.1 をダウンロードしてください。
- Trial Edition の物理イメージは入手できません。
- z/OS 版の Trial Edition は入手できません。

試用期間中またはその後に WebSphere Message Broker の購入を選択して、インストールした製品コンポーネントを引き続き使用する場合は、再インストールする必要はありませんが、購入したライセンスに準拠するモードで、既存のブローカーを再構成し、新しいブローカーを作成する必要があります。試用期間中に開発したりインポートしたりした関連リソースはすべて保持できます。詳しくは、インフォメーション・センターの『ブローカーの動作モードの変更』を参照してください。

本書で特に明記されていない限り、電子イメージは物理 CD や DVD と同じ方法で使用でき、説明されているインストール手順やセットアップ手順はすべて試用パッケージと完全パッケージで同一です。

パッケージの内容

WebSphere Message Broker Starter Edition、Remote Adapter Deployment、および完全 (無制限) ライセンスに関する物理メディア・パッケージの内容。ダウンロード可能な電子イメージの内容も同様です。

Trial Edition パッケージの内容は制限付きです。その違いは適用される箇所で説明されています。

パッケージの内容は、注文した製品に応じて以下のように異なります。

WebSphere Message Broker

パッケージには、サポートされるすべての分散オペレーティング・システム用の製品コードと、他のオプション・ソフトウェアと資料が組み込まれています。

- クイック・スタート CD。PDF 形式の資料が含まれています。この CD は常にパッケージの一番上にあります。この CD には、以下の資料が含まれています。
 - Quick Start Guide の PDF ファイル (英語版および翻訳版)。
 - このインストール・ガイドの PDF ファイル (英語版および翻訳版)。
- 4 枚の DVD (1 枚は Linux(x86) 用、1 枚は Linux(x86-64) 用、1 枚は Windows (32 ビット) 用、もう 1 枚は Windows (64 ビット) 用) が入っているプラスチック・ケース。この DVD には、すべての必須およびオプションの製品コードが入っています。DVD の内容の構成については、41 ページの『DVD パッケージ』で説明されています。

WebSphere Message Broker Toolkit パッケージは、DVD に収録されています。WebSphere Message Broker Toolkit パッケージの内容の詳細については、40 ページの『Toolkit パッケージ』を参照してください。

- オペレーティング・システム別のブローカーのインストール CD が入っている一連のプラスチック・ケース (Linux(x86)、Linux(x86-64)、および Windows 以外のシステムが対象です)。38 ページの『ブローカー・コンポーネントおよび WebSphere Message Broker Explorer パッケージ』に CD がリストされています。
- Quick Start Guide (英語、フランス語、および日本語版)。

WebSphere Message Broker for z/OS

パッケージには、z/OS オペレーティング・システム用の製品コードを含む磁気テープと、他のオプション・ソフトウェアと資料が組み込まれています。さらに、Linux(x86)、Linux(x86-64)、および Windows 版の WebSphere Message Broker も受け取ります。WebSphere Message Broker Toolkit はこれらのオペレーティング・システムのみで使用できるからです。

ダウンロード可能な電子イメージの内容も同様です。

- 4 枚の DVD (1 枚は Linux(x86) 用、1 枚は Linux(x86-64) 用、1 枚は Windows (32 ビット) 用、もう 1 枚は Windows (64 ビット) 用) が入っているプラスチック・ケース。この DVD には、すべての必須およびオプションの製品コードが入っています。DVD の内容の構成については、41 ページの『DVD パッケージ』で説明されています。

WebSphere Message Broker Toolkit パッケージは、DVD に収録されています。WebSphere Message Broker Toolkit パッケージの内容の詳細については、40 ページの『Toolkit パッケージ』を参照してください。

- z/OS 磁気テープ

WebSphere Message Broker for z/OS で提供される磁気テープに関する情報は、「*Program Directory for WebSphere Message Broker for z/OS*」を参照してください。

ブローカー・コンポーネントおよび WebSphere Message Broker Explorer パッケージ

ブローカー・コンポーネント・パッケージの内容

以下の表は、ブローカーのインストールのために提供される内容を示します。
WebSphere MQ イメージは Trial Edition には組み込まれていません。

Linux(x86)、Linux(x86-64)、および Windows では、製品コードが DVD に組み込まれています。DVD の内容の構成については、41 ページの『DVD パッケージ』で説明されています。これらのオペレーティング・システムに対応したダウンロード・イメージの内容を以下の表に示します。

DVD の物理パッケージには、記号  が付いています。

Linux(x86)、Linux(x86-64)、Windows、および z/OS 以外のオペレーティング・システムでは、製品コードが CD に組み込まれています。

CD の物理パッケージには、記号  が付いています。

表 11. WebSphere Message Broker および関連製品で提供される CD およびイメージ

オペレーティング・システム ¹	CD ラベル	説明
AIX	WebSphere Message Broker バージョン 7.0 AIX (Runtime Disk 1)	製品コード ²
	WebSphere MQ バージョン 7.0.1 AIX (Runtime Disk 2)	製品コード
HP-Itanium	WebSphere Message Broker バージョン 7.0 HP-Itanium (Runtime Disk 1)	製品コード ²
	WebSphere MQ バージョン 7.0.1 HP-Itanium プラットフォーム (Runtime Disk 2)	製品コード
Linux (POWER)	WebSphere Message Broker バージョン 7.0 Linux (POWER) (Runtime Disk 1)	製品コード ²
	WebSphere MQ バージョン 7.0.1 Linux (POWER) プラットフォーム (Runtime Disk 2)	製品コード
Linux(x86)	WebSphere Message Broker バージョン 7.0 Linux(x86) (Runtime Disk 1)	製品コード ²
	WebSphere MQ バージョン 7.0.1 Linux(x86) (Runtime Disk 2)	製品コード
Linux(x86-64)	WebSphere Message Broker バージョン 7.0 Linux(x86-64) (Runtime Disk 1)	製品コード ²
	WebSphere MQ バージョン 7.0.1 Linux(x86-64) プラットフォーム (Runtime Disk 2)	製品コード

表 11. WebSphere Message Broker および関連製品で提供される CD およびイメージ (続き)

オペレーティング・システム ¹	CD ラベル	説明
Linux (System z)	WebSphere Message Broker バージョン 7.0 Linux (System z) (Runtime Disk 1)	製品コード ²
	WebSphere MQ バージョン 7.0.1 Linux (System z) プラットフォーム (Runtime Disk 2)	製品コード
Solaris (SPARC)	WebSphere Message Broker バージョン 7.0 Solaris (Runtime Disk 1)	製品コード ²
	WebSphere MQ バージョン 7.0.1 Solaris (Runtime Disk 2)	製品コード
Solaris (x86-64)	WebSphere Message Broker バージョン 7.0 Solaris (x86-64) (Runtime Disk 1)	製品コード ²
	WebSphere MQ バージョン 7.0.1 Solaris (x86-64) (Runtime Disk 2)	製品コード
Windows (32 ビット)	WebSphere Message Broker バージョン 7.0 Windows (32 ビット) (Runtime Disk 1)	製品コード ³
	WebSphere MQ バージョン 7.0.1 Windows (32 ビット) (Runtime Disk 2)	製品コード ⁴
Windows (64 ビット)	WebSphere Message Broker バージョン 7.0 Windows (64 ビット) (Runtime Disk 1)	製品コード ³
	WebSphere MQ バージョン 7.0.1 Windows (64 ビット) (Runtime Disk 2)	製品コード ⁴

注:

- すべてのオペレーティング・システムで、WebSphere MQ (Runtime Disk 2) の CD とイメージは、Trial Edition には組み込まれていません。WebSphere Message Broker の Trial Edition をサポートするには、他のソースから前提ソフトウェアを入手する必要があります。詳しくは、19 ページの『追加のソフトウェア要件』を参照してください。
- すべての Linux および UNIX システム版のディスク 1 には、以下のリソースが組み込まれています。
 - WebSphere Message Broker インストール・ファイル。
 - WebSphere Message Broker Explorer インストール・ファイル (Linux(x86) および Linux(x86-64) のみ)
 - ライセンス・ファイル。これらのファイルは、インストール・ウィザードで使用され、サポートされるすべての言語で提供されています。
 - README ファイル。readme.html ファイルには、製品とその資料に関する最新の更新情報が含まれており、サポートされるすべての言語で提供されています。製品 README Web ページに常に最新版が用意されています。製品メディアに組み込まれているファイルには、製品 README Web ページ上の最新版へのリンクが含まれています。
 - インストール・ガイド。このインストール・ガイドの PDF ファイルは、サポートされる言語に翻訳されて提供されています。英語および他の言語の PDF ファイルについては、IBM 資料センターにアクセスしてください。

- サンプル・スクリプト。これらのサンプル応答ファイルを使用して、サイレント・インターフェースを実行し、コンポーネントのインストールとアンインストールを行います。
3. Windows 版のディスク 1 には、以下のリソースが組み込まれています。
 - WebSphere Message Broker インストール・ファイル。
 - WebSphere Message Broker Explorer インストール・ファイル。
 - ランチパッド。
 - クイック・ツアーの独立型の実行可能プログラム。
 - ライセンス・ファイル。これらのファイルは、インストール・ウィザードで使用され、サポートされるすべての言語で提供されています。
 - README ファイル。readme.html ファイルには、製品とその資料に関する最新の更新情報が含まれており、サポートされるすべての言語で提供されています。製品 README Web ページに常に最新版が用意されています。製品メディアに組み込まれているファイルには、製品 README Web ページ上の最新版へのリンクが含まれています。
 - インストール・ガイド。このインストール・ガイドの PDF ファイルは、サポートされる言語に翻訳されて提供されています。
 - サンプル・スクリプト。これらのサンプル応答ファイルを使用して、サイレント・インターフェースを実行し、コンポーネントのインストールとアンインストールを行います。
 4. ランチパッドと独立型クイック・ツアーは、Windows 用のディスク 2 にも組み込まれています。

Toolkit パッケージ

Toolkit パッケージの内容。

WebSphere Message Broker Toolkit のインストール用に、Toolkit パッケージが製品 DVD で提供されています。DVD の内容の構成については、41 ページの『DVD パッケージ』で説明されています。

Toolkit パッケージには、disk1、disk2、および disk3 という 3 つのディレクトリーが含まれています。ディスクの内容については、以下の表に説明されています。

表 12. WebSphere Message Broker Toolkit で提供される DVD およびイメージ

オペレーティング・システム	ディレクトリー	説明
Linux(x86)	disk1	<ul style="list-style-type: none"> • 製品コード • Installation Manager¹ • 追加リソース²
	disk2	製品コード
	disk3	製品コード
Linux(x86-64)	disk1	<ul style="list-style-type: none"> • 製品コード • Installation Manager¹ • 追加リソース²
	disk2	製品コード
	disk3	製品コード

表 12. WebSphere Message Broker Toolkit で提供される DVD およびイメージ (続き)

オペレーティング・システム	ディレクトリー	説明
Windows (32 ビット)	disk1	<ul style="list-style-type: none"> 製品コード Installation Manager¹ 追加リソース²
	disk2	製品コード
	disk3	製品コード
Windows (64 ビット)	disk1	<ul style="list-style-type: none"> 製品コード Installation Manager¹ 追加リソース²
	disk2	製品コード
	disk3	製品コード

注:

1. Installation Manager は、ターゲット・コンピューター上に存在しない場合のみインストールされます。この製品は、WebSphere Message Broker Toolkit のインストールを管理するのに必要です。
2. ディスク 1 には、以下の追加リソースが組み込まれています。
 - README ファイル。readme.html ファイルには、製品とその資料に関する最新の更新情報が含まれており、サポートされるすべての言語で提供されています。
 - インストール・ガイド。インストール・ガイドの PDF ファイルは、サポートされる言語に翻訳されて提供されています。
 - サンプル・スクリプト。これらのサンプル応答ファイルを使用して、サイレント・インターフェースを実行し、コンポーネントのインストールとアンインストールを行います。
 - ランチパッド (Windows のみ)。
 - クイック・ツアーの独立型の実行可能プログラム (Windows のみ)。

これらのファイルは、38 ページの『ブローカー・コンポーネントおよび WebSphere Message Broker Explorer パッケージ』で説明されているファイルと同様です。

DVD パッケージ

DVD パッケージを使用して、WebSphere Message Broker ブローカー・コンポーネント、WebSphere Message Broker Toolkit、WebSphere Message Broker Explorer、および WebSphere MQ バージョン 7.0.1 をインストールします。

DVD (タイプ DVD-R、サイズ DVD-5) は、Linux(x86)、Linux(x86-64)、および Windows 版のみ提供されています。DVD のラベルは、WebSphere Message Broker バージョン 7.0 Linux(x86)、WebSphere Message Broker バージョン 7.0 Linux(x86-64)、WebSphere Message Broker バージョン 7.0 Windows (32 ビット)、および WebSphere Message Broker バージョン 7.0 Windows (64 ビット) です。

DVD のイメージは Trial Edition には組み込まれていません。

物理パッケージには、記号  が付いています。

DVD には以下の製品のコードが含まれています。

- WebSphere Message Broker ブローカー・コンポーネント
- WebSphere Message Broker Toolkit
- WebSphere Message Broker Explorer
- WebSphere MQ バージョン 7.0.1

ランチパッドを使用して Windows 上でインストールする場合 (73 ページの『第 9 章 Windows ランチパッドを使用したインストール』で説明されています)、ランチパッドが DVD にナビゲートして、インストールのために選択された製品とコンポーネントを検出します。そのため、ユーザーが DVD の内容の構成に精通している必要はありません。

Linux(x86) にインストールする場合、または Windows でランチパッドを使用せずにインストールする場合は、以下の表に示されている DVD の構成を利用して、必要なものを見つけてください。

表 13. DVD の内容

ディレクトリー	説明
¥ (ルート)	<ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Message Broker インストール・ファイル • (Windows のみ) ランチパッドおよびクイック・ツアー¹
¥installation_guide	インストール・ガイド ^{2, 3}
¥license	ライセンス・ファイル ³
¥Message_Broker_Toolkit_V7	WebSphere Message Broker Toolkit インストール・リポジトリ ⁴
¥MBExplorer	WebSphere Message Broker Explorer インストール・リポジトリ
¥readmes	README ファイル ³
¥sample-scripts	サンプル応答ファイル ³
¥WebSphere_MQ_V7.0	WebSphere MQ インストール・イメージ

注:

1. これは、クイック・ツアーの独立型の実行可能バージョンです。Windows でのみ使用できます。Linux(x86) および Windows では、WebSphere Message Broker Toolkit からクイック・ツアーにアクセスできます。
2. Linux(x86) では、このディレクトリーには 2 つのサブディレクトリーがあります。1 つは英語版の PDF 用で、もう 1 つは翻訳版の PDF ファイル用です。
3. このディレクトリー内のファイルは、38 ページの『ブローカー・コンポーネントおよび WebSphere Message Broker Explorer パッケージ』で説明されている同様のファイルと同じです。
4. このディレクトリーには、WebSphere Message Broker Toolkit インストール・リポジトリおよび Installation Manager が含まれています。このディレクトリー内の Installation Manager のバージョンはターゲット・オペレーティング・システム固有のものです。

第 2 部 準備

本書の第 2 部では、WebSphere Message Broker のインストールを開始する前に完了しておく必要のあるタスクについて説明します。ここに書かれている情報は、z/OS および分散システムに関するものです。

- 45 ページの『第 6 章 システムを準備する』
- 57 ページの『第 7 章 何をインストールするかを選択する』
- 59 ページの『第 8 章 インストールおよびアンインストールのインターフェース』

第 6 章 システムを準備する

オペレーティング・システムによっては、WebSphere Message Broker をインストールする前に、いくつかの作業を完了していなければなりません。

インストールの意図によっては、他の作業も実行したい場合があります。

インストールの前に、以下のセクションをお読みください。

1. 『セキュリティーのセットアップ』
2. 分散システムにインストールする場合は、50 ページの『ローカル・システムでの CD および DVD のアクセス』。
3. Linux または UNIX システムにインストールする場合: 56 ページの『Linux および UNIX システムでのカーネル構成の確認』

これらの作業を完了したら、該当する章にある、分散システム用のインストールの指示に従ってください。

- 分散システムでは、どの WebSphere Message Broker コンポーネントをインストールするかを選択します。57 ページの『第 7 章 何をインストールするかを選択する』を参照してください。
- z/OS の場合は、「*Program Directory for WebSphere Message Broker for z/OS*」を参照してください。

セキュリティーのセットアップ

WebSphere Message Broker をインストールする前に、必要なセキュリティーをセットアップします。

このセクションでは、以下のセキュリティー要件について説明します。

- 製品をインストールする
- 105 ページの『第 13 章 インストールの検証』で説明されている手順を完了する

インストール後に、インフォメーション・センターの見出し「セキュリティー」の下にあるトピックを確認して、他のタスクを実行する追加のユーザーのためのセキュリティー要件を検討し、実装します。

WebSphere Message Broker コンポーネント、リソース、およびタスクのセキュリティー管理は、オペレーティング・システムのセキュリティー・サブシステムに対する、ユーザーおよびユーザーのグループ (プリンシパル) の定義に依存します。

WebSphere Message Broker をインストールする前に、インストールするユーザーに適切な権限があり、必要なプリンシパルが整っていることを確認します。

ユーザー ID の制約事項: 一部のオペレーティング・システムおよび他の製品では、ユーザー ID に関して以下の制約事項が課されます。

- Windows システムではユーザー ID の長さは最大で 12 文字まで可能ですが、Linux、UNIX、および z/OS システムでは 8 文字までに制限されています。DB2® などのデータベース製品でも、ユーザー ID は 8 文字までに制限される場

合があります。混合環境の場合、ブローカー環境で使用するユーザー ID が最大で 8 文字までに限定されるかどうかを確認してください。

- ブローカー環境内で、ユーザー ID の大/小文字 (大文字、小文字、または混合) の使用に整合性があることを確かめてください。大文字のユーザー ID と小文字のユーザー ID が同一であると見なされる環境もあれば、大/小文字が異なるユーザー ID が固有のものであると見なされる環境もあります。例えば Windows では、ユーザー ID の 'tester' と 'TESTER' は同じものですが、Linux および UNIX システムではそれらは別個のユーザー ID として認識されます。
- ユーザー ID でスペースおよび特殊文字を使用する場合には、ブローカー環境内にある関連するすべてのシステムと製品でこうした文字が受け入れられることを確かめるため、その文字が有効かどうかを確認してください。

使用するユーザー ID がこうした制約に適合しないと、インストールまたは検証中に問題が生じる可能性があります。その場合は、代わりにユーザー ID を使用するか、新しいユーザー ID を作成して、インストールと検証が完了できるようにしてください。

ご使用のオペレーティング・システムでセキュリティーを適切にセットアップする方法については、以下の資料があります。

- Linux または UNIX システムにインストールする場合、『Linux および UNIX システムでのセキュリティー』を参照してください。
- Windows にインストールする場合、47 ページの『Windows システムでのセキュリティー』を参照してください。
- z/OS にインストールする場合、49 ページの『z/OS システムでのセキュリティー』を参照してください。

Linux および UNIX システムでのセキュリティー

WebSphere Message Broker をインストールする前に、Linux および UNIX システムで必要なセキュリティーをセットアップします。

これらの作業を完了するため、使用するオペレーティング・システムで提供されるセキュリティー機能を使用します。例えば、AIX の Systems Management Interface Tool (SMIT) や HP-Itanium の System Administration Manager があります。

以下の操作を行います。

1. システムにログインします。AIX 上では、root としてログインする必要があります。Linux および他の UNIX コンピューター上では、インストールを完了するには、使用するユーザー ID に root 権限が必要です。root 権限を獲得するには、ご使用の環境でのセキュリティーの指針に従ってください。root としてログインするか、または別のユーザーとしてログインし、それから root になるかのいずれかです。

root 以外のユーザー ID を使用することにはいくつかの利点があります。例えば、インストールを実行するユーザー ID の監査証跡が提供され、root 権限の有効範囲を単一セッションで実行される作業に制限することができます。リモート・システムからのログインの場合、root 以外のユーザー ID を使用することが必須である場合もあります。

使用しているのが Linux(x86) または Linux(x86-64) システムで、WebSphere Message Broker ブローカーのインストールは計画していない場合、手順 6 に進みます。

2. *mqbrkrs* という新しいセキュリティー・グループを作成します。
3. 現在のログオン ID を *mqbrkrs* グループに追加します。

実動サーバーとして実行するシステム (ブローカー・コンポーネントがインストールされる) にインストールしている場合、製品コンポーネントでのみ使用する新しいユーザー ID を作成し、それを *mqbrkrs* グループに追加します。

開発またはテスト・システムとして実行する Linux(x86) または Linux(x86-64) システムでは、ログインしたユーザー ID でインストールを完了することができます。

4. このシステムに既に WebSphere MQ をインストールしてある場合、*mqm* というグループ、および *mqm* というユーザーが定義済みになっています。WebSphere MQ のインストールをまだ行っていない場合、このグループとユーザーを作成する必要があります。
5. ログインに使用したユーザー ID、新しいユーザー ID (作成した場合)、およびユーザー ID *mqm* を *mqm* グループに追加します。

システムによっては、この新しいグループ (*mqbrkrs* および *mqm*) の定義が認識されるようにするため、いったんログオフしてログオンしなおさなければならぬかもしれません。

6. 検証手順は、Linux (x86) のみで提供されています。検証を完了するのに root 権限は必要ありません。root 権限で検証の完了を行わない場合は、インストールが完了した時点でログオフします。同じユーザー ID、または異なるユーザー ID でログインします。root にはならないでください。

別のユーザー ID でログインした場合、まだその ID を *mqbrkrs* グループおよび *mqm* グループに追加していなければ、その作業を WebSphere Message Broker Toolkit を起動する前に行ってください。

Windows システムでのセキュリティー

WebSphere Message Broker をインストールする前に、Windows システムで必要なセキュリティーをセットアップします。

WebSphere Message Broker ブローカー・コンポーネント、WebSphere Message Broker Toolkit、または WebSphere Message Broker Explorer をインストールする前に、Administrator 権限を持つユーザー ID でログオンします。

ブローカー・コンポーネントのインストールを行っている場合、インストール・ウィザードは以下のタスクを完了するために `mqsisetsecurity` コマンドを呼び出します。

- *mqbrkrs* という新しいセキュリティー・グループを作成します。
- 現在の (ログオンしている) ユーザー ID を *mqbrkrs* グループに追加します。
- *mqm* グループが存在していれば、そのグループに現在のユーザー ID を追加します。

このシステムに WebSphere MQ を既にインストールしてあれば、*mqm* グループが存在しています。まだ行っていない場合は、WebSphere MQ のインストールが完了した時点で *mqsisetsecurity* コマンドを呼び出します。Windows ランチパッド (73 ページの『第 9 章 Windows ランチパッドを使用したインストール』を参照) を使用している場合、ランチパッドが最初に WebSphere MQ のインストールを完了します。

WebSphere Message Broker をインストールする前にプリンシパルを作成しておきたい場合は、Windows コントロール パネルで提供されるセキュリティー機能を使用します。

このコンピューターで Terminal Services を実行している場合、インストール中にとられる処置を正しく完了させるため、ユーザー・モードを変更してください。こうした処置には、例えばデフォルトのシステム・ディレクトリー C:\Windows に .ini ファイルや他の関連するファイルを作成する処置があります。ユーザー・モードを変更しないと、ファイルが他の場所に書き込まれ、インストールが首尾よく完了したように見えても、製品は期待どおりに動作しない場合があります。

- 製品コンポーネントを 1 つでもインストールする前に、以下のコマンドを入力してユーザー・モードを変更します。

```
change user /install
```

- インストールが完了した後で、以下のコマンドを入力して、元のユーザー・モードに戻します。

```
change user /execute
```

検証を完了するには、使用しているユーザー ID に Administrator 権限がなければなりません。インストールを実行した ID とは異なるユーザー ID でログインする場合、そのユーザー ID を *mqbrkrs* グループおよび *mqm* グループに追加する必要があります。Windows のセキュリティー機能を使用するか、または *mqsisetsecurity* コマンドを使用して、この追加作業を行います (このコマンドはその異なる ID でログインしてから実行します)。

Windows ドメイン環境でのセキュリティー

WebSphere Message Broker をインストールする前に、Windows ドメイン環境で必要なセキュリティーをセットアップします。

Windows ドメイン環境にインストールする場合、WebSphere Message Broker をドメイン・コントローラーにインストールするかどうかを決める必要があります。

WebSphere Message Broker をドメイン・コントローラーにインストールする場合、以下のように行います。

1. ドメイン内のどのワークステーションにインストールするのよりも先に、ドメイン・コントローラーにインストールします。

WebSphere Message Broker のインストール・プログラムは、Domain Administrator 権限を持っている場合にのみ、*mqbrkrs* というローカル・グループを作成します。インストール時にこの権限を持っていない場合は、後でこのグループを作成します。

ドメイン環境では、WebSphere Message Broker にはグローバル・グループである Domain *mqbrkrs* も必要となります。これは、Windows のセキュリティ機能を使用して作成する必要があります。さらに、Domain *mqbrkrs* をローカル・グループ *mqbrkrs* に追加します。

2. 同じドメインのメンバーである各ワークステーションにインストールを行います。WebSphere Message Broker のインストール・プログラムは、*mqbrkrs* というローカル・グループを作成します。Domain *mqbrkrs* グローバル・グループをローカルの *mqbrkrs* グループに追加します。

WebSphere Message Broker をドメイン内の別のコンピューターにインストールする場合、以下のように行います。

1. ドメイン・コントローラー・システム上で、Domain *mqbrkrs* グローバル・グループを作成します。
2. 必要な製品コンポーネントをドメイン内の各ワークステーションにインストールします。インストールが完了した後、Domain *mqbrkrs* グローバル・グループをローカルのグループに追加します。

z/OS システムでのセキュリティ

z/OS システム製品のインストールに必要なユーザー ID のセキュリティ。

製品をインストールするのに使用するユーザー ID の長さは、8 文字以下でなければなりません。さらにそのユーザーには、ご使用の環境内で SMP/E インストールを実行するための適切な RACF 特権がなければなりません。製品は SMP/E APPLY 処理中に指定されたファイル・システム・パスにインストールされるので、ユーザー ID は有効な OMVS セグメントを持っていないければなりません。

CD および DVD へのアクセス

WebSphere Message Broker をインストールするために CD および DVD にアクセスします。

WebSphere Message Broker をインストールまたはアップグレードする際に、ローカル・システム上の CD または DVD にアクセスするか、または共有ドライブをセットアップして、複数のコンピューターから共有リソースにアクセスすることができます。

以下のセクションの情報は、CD と DVD の両方に関係があります。すべての箇所ですべて CD に言及していますが、DVD の動作も同じです。DVD は Linux(x86)、Linux(x86-64)、Windows (32 ビット)、および Windows (64 ビット) のみ使用可能です。

パスポート・アドバンテージから入手したインストール・イメージからインストールまたはアップグレードすることもできます (この体系に登録している場合)。

1. パッケージに付属している指示をお読みください。
2. ご使用の環境のオペレーティング・システムに必要なイメージをダウンロードします。
3. イメージの内容を解凍します。解凍先のディレクトリーの短いパスを指定します。オペレーティング・システムによっては、制限に達した場合にディレクトリ

一構造の深さやディレクトリー名によって問題が生じる可能性があります。例えば、Windows 上で 256 文字の限度を超える可能性があります。

4. CD または DVD に対して行うのと同様の方法で、それらのイメージへのローカル・アクセスまたはリモート・アクセスをセットアップします。ローカル・インストールについては『ローカル・システムでの CD および DVD のアクセス』を、リモート・インストールについては 53 ページの『リモート・システムでの CD および DVD のアクセス』を参照してください。

Windows 上にインストールしている場合、インストール・プログラムにアクセスするために汎用命名規則 (UNC) パス (\\server\drive) を入力することはできません。ドライブをマップする必要があるし、そうしないと Java プロセスがタイムアウトします。ドライブをマップできない場合や、ドライブをマップしないことにした場合には、DVD の内容をローカル・ドライブにコピーし、そのドライブからインストールしてください。

ローカル・システムでの CD および DVD のアクセス

ローカル CD または DVD、あるいはローカル・ダウンロード・イメージから製品コンポーネントをインストールする場合には、この作業を実行します。

正確な詳細について、必ずオペレーティング・システム資料を確認してください。

AIX

1. root としてログインします。別の ID としてログインした後に root になった場合には、インストールを正常に完了させることができません。
2. 46 ページの『Linux および UNIX システムでのセキュリティー』で説明されているセキュリティー・セットアップを実行します。
3. CD マウント・ポイント・ディレクトリーを次のように作成します。

```
mkdir /cdbroker
```

ここで、*/cdbroker* はマウント・ポイントです。

4. 製品コンポーネントのインストール先となるコンピューターのドライブに CD を挿入します。
5. SMIT を使用して CD をマウントするか、または次のコマンドを使用します。

```
mount -r -v cdrfs /dev/cd0 /cdbroker
```

ここで、*/dev/cd0* は CD デバイス、*/cdbroker* はマウント・ポイントです。

これで、この CD で提供される製品をインストールする準備ができました。

HP-Itanium

HP-Itanium の CD は、Rockridge 拡張が使用可能な ISO 9660 フォーマットです。ボリューム管理ソフトウェアを使用中であれば、CD を CD ドライブに挿入すると自動的に CD のマウントが行われます。あるいは、以下の手順に説明されているとおりに、CD をマウントすることができます。

CD が不適切にマウントされた場合には、一部のファイルを読み取ることができず、インストールは失敗して、壊れたディレクトリーが残ります。Rockridge 拡張を使用可能にして CD をマウントする必要があります。

1. ログインし、ユーザー ID に root 権限があることを確認します。
2. 46 ページの『Linux および UNIX システムでのセキュリティー』で説明されているセキュリティー・セットアップを実行します。
3. CD マウント・ポイント・ディレクトリーを作成し、すべてのユーザーに読み取り専用アクセスを認可します。

```
mkdir /cdbroker  
chmod 775 /cdbroker
```

ここで、*/cdbroker* はマウント・ポイントです。

4. 製品コンポーネントのインストール先となるコンピューターのドライブに CD を挿入します。
5. 次のコマンドを使用して CD をマウントします。

```
mount -F cdfs /dev/dsk/device /cdbroker
```

ここで、*/device* は CD デバイス (例えば */c0t0d0*)、*/cdbroker* はマウント・ポイントです。

これで、この CD で提供される製品をインストールする準備ができました。

Linux(x86) および Linux(x86-64)

1. ログインし、ユーザー ID に root 権限があることを確認します。
2. 46 ページの『Linux および UNIX システムでのセキュリティー』で説明されているセキュリティー・セットアップを実行します。
3. DVD マウント・ポイント・ディレクトリーを次のように作成します。

```
mkdir /dvdbroker
```

ここで、*/dvdbroker* はマウント・ポイントです。

4. 製品コンポーネントのインストール先となるコンピューターのドライブに DVD を挿入します。
5. 以下のコマンドを実行します。

```
mount -o ro -t iso9660 /dev/dvdrom /dvdbroker
```

ここで、*/dev/dvdrom* は DVD デバイスの名前 (例えば */dev/hdc*)、*/dvdbroker* はマウント・ポイントです。

これで、この DVD で提供される製品をインストールする準備ができました。

Linux(x86) と Linux(x86-64) 以外の Linux

1. ログインし、ユーザー ID に root 権限があることを確認します。
2. 46 ページの『Linux および UNIX システムでのセキュリティー』で説明されているセキュリティー・セットアップを実行します。
3. CD マウント・ポイント・ディレクトリーを次のように作成します。

```
mkdir /cdbroker
```

ここで、*/cdbroker* はマウント・ポイントです。

4. 製品コンポーネントのインストール先となるコンピューターのドライブに CD を挿入します。
5. 以下のコマンドを実行します。

```
mount -o ro -t iso9660 /dev/cdrom /cdbroker
```

ここで、*/dev/cdrom* は CD デバイスの名前 (例えば */dev/hdc*)、*/cdbroker* はマウント・ポイントです。

これで、この CD で提供される製品をインストールする準備ができました。

Solaris

1. ログインし、ユーザー ID に root 権限があることを確認します。
2. 46 ページの『Linux および UNIX システムでのセキュリティー』で説明されているセキュリティー・セットアップを実行します。
3. 製品コンポーネントのインストール先となるコンピューターのドライブに CD を挿入します。
4. 次のコマンドを入力して、ボリューム・マネージャーがシステム上で稼働しているかどうかを確認します。

```
/usr/bin/ps -ef | /bin/grep vold
```

ボリューム・マネージャーが稼働している場合には、CD は自動的に */cdrom/vol_label* にマウントされます。ここで、*vol_label* は現行 CD のボリューム・ラベルです。例えば、Runtime Disk 1 の場合は *wmb6_sol* です。

5. ボリューム・マネージャーが開始していない場合には、次のコマンドを実行して CD をマウントします。

```
mkdir -p /cdbroker  
mount -F hsfs -o ro /dev/dsk/cdrom /cdbroker
```

ここで、*/dev/dsk/cdrom* は CD の場所 (例えば *c0t0d0*)、*/cdbroker* はマウント・ポイント・ディレクトリーです。

コマンド *iostat -En* を使用して、CD がどこに配置されているかを確認します。あるいは、*volcheck* コマンドを使用して、CD デバイスを自動的にマウントします。

これで、この CD で提供される製品をインストールする準備ができました。

Windows

1. Administrator 権限を持つユーザー ID を使ってログオンします。
2. 47 ページの『Windows システムでのセキュリティー』で説明されているセキュリティー・セットアップを実行します。
3. 製品コンポーネントのインストール先となるコンピューターのドライブに DVD を挿入します。ランチパッドが開きます。

これで、この DVD で提供される製品をインストールする準備ができました。

リモート・システムでの CD および DVD のアクセス

リモート (サーバー) CD または DVD から製品コンポーネントをインストールする場合には、この作業を実行します。

この作業の正確な詳細について、必ずオペレーティング・システム資料を確認してください。

1 つ以上のコンポーネントの複数のインストールを実行する場合には、リモート・サーバー・セットアップによって幾らかのパフォーマンス上の益が、特に最も大きなコンポーネントである WebSphere Message Broker Toolkit に関して得られる可能性があります。また、サイレント・インターフェースを使用してインストールを実行する場合にも、この方式がいっそう便利かもしれません。

サイレント・インターフェースを使用して WebSphere Message Broker Toolkit をインストールすることを望んでいて、DVD からはインストールできない場合には、ここに説明されているとおりにインストール・イメージをディスク・ドライブにコピーすることにより、処理中に CD を交換する必要がないようにしてください。

リモート・インストールを可能にするためには、サーバー (CD、DVD、または共有ドライブがマウントされているコンピューター) と、各ターゲット・システム (製品のインストール先) の両方で、作業を実行する必要があります。これらの例で使用されるコマンドの詳細については、オペレーティング・システム資料を参照してください。

サーバーをセットアップするには、『サーバーのセットアップ』を参照してください。

ターゲット・システムをセットアップするには、55 ページの『ターゲット・システムのセットアップ』を参照してください。

サーバーのセットアップ

サーバー上の CD ドライブを共有するか、またはインストール・イメージをディスクにコピーしてそのディスク上のディレクトリーを共有することができます。

Linux または UNIX 上の CD ドライブを、他のサポートされている任意の Linux または UNIX システムと共有できますが、Windows とは共有できません。Windows の CD ドライブは、他の Windows システムのみと共有できます。

1. インストール・イメージのコピーを共有したい場合には、次のようにコピーを作成します。
 - a. インストール・イメージを保管する、サーバー上のディレクトリーを作成します。

Linux および UNIX

以下のコマンドを入力します。

```
mkdir /instbroker
```

ここで、*instbroker* は製品ファイルのコピー先のディレクトリーです。

Windows

以下のコマンドを入力します。

```
md m:¥instbroker
```

ここで、*m* はインストール・イメージを保管するドライブで、*instbroker* はそのドライブ上のディレクトリーです。

Linux(x86)、Linux(x86-64)、または Windows 上で WebSphere Message Broker Toolkit 用のディレクトリーを作成している場合には、3 つのディスク・サブディレクトリーすべてを同じディレクトリー内に作成する必要があります。以下に例を示します。

```
/instbroker/disk1  
/instbroker/disk2  
/instbroker/disk3
```

ここで、各サブディレクトリー (disk1 など) は、対応する CD イメージのルート・レベルです。

この構造により、インストール・プログラムは場所についてのプロンプトを出さなくなり、正しいイメージが見つからないために失敗するということがなくなります。

- b. 50 ページの『ローカル・システムでの CD および DVD のアクセス』に説明されているとおりに、該当する CD をドライブに挿入してマウントします。ランタイム・コンポーネント用のインストール・プログラムと WebSphere Message Broker Toolkit とは、別々の CD にあります。このサーバーからインストールするコンポーネント用の正しい CD を挿入してください。

Windows 上でランタイムまたはツールキットの CD を挿入し、自動実行が有効になっている場合には、ランチパッドが開始します。初期ウィンドウが開いたら、「キャンセル」をクリックしてそれを閉じてください。

- c. CD の完全な内容を新規ディレクトリーにコピーします。

Linux および UNIX

以下のコマンドを入力します。

```
cp -rf /cdrom/. /instbroker
```

Windows

以下のコマンドを入力します。

```
xcopy f:¥*. * m:¥instbroker /e
```

ここで、*f* は CD ドライブです。

2. 製品コードが入っているドライブに対するアクセスをユーザーに認可します。以下の指示は、CD 内容をコピーしたディスク・ドライブと、CD ドライブ自体とで同じです。

AIX smit と入力して「通信アプリケーションおよびサービス」→「NFS」→「ネットワーク・ファイル・システム (NFS)」→「ディレクトリーをエクスポート・リストに追加」をクリックするか、またはファスト・パス・コマンド smitty mknfsexp を入力します。適宜フィールドを完成させて Enter を押します。

HP-UX および Linux

`exportfs` コマンドを使用します。下記の例では、NFS を使用して、すべてのユーザーに読み取り専用アクセスを付与します。

```
exportfs -i -o ro /instbroker
exportfs -a
```

ここで、`/instbroker` は CD ドライブか、または CD コピーが入っているディレクトリーを表します。

Solaris `share` および `exportfs` コマンドを使用します。下記の例では、NFS を使用して、すべてのユーザーに読み取り専用アクセスを付与します。

```
share -F nfs -o ro -d "Broker LAN server" /instbroker
exportfs -a
```

ここで、`"Broker LAN server"` はオプションの説明であり、`/instbroker` はサーバーの CD ドライブか、または CD コピーを含むディレクトリーを表します。

Windows

Windows エクスプローラを開き、共有したいドライブを右クリックします。「共有」をクリックし、「プロパティ」ダイアログ・ボックスの指示に従います。

ターゲット・システムのセットアップ

サーバーから CD および DVD にアクセスするようにターゲット・システムをセットアップします。

1. Linux および UNIX システムでは、共有ディレクトリーをマウントするための新規ディレクトリーを作成します。以下のコマンドを入力します。

```
mkdir /remotebroker
```

ここで、`remotebroker` は新規ディレクトリーの名前です。

2. 以下のように、リモート・ディレクトリーにアクセスします。

Linux および UNIX

以下のコマンドを入力します。

```
mount server name:instbroker /remotebroker
```

ここで、`server name` は、CD または DVD コピーを作成したサーバーの名前です。

Windows

ターゲット・システムで、コマンド・プロンプトに `net use` コマンドを使用することにより、適切なドライブおよびフォルダーに接続します。以下に例を示します。

```
net use x: %server_name%instbroker
```

ここで、`x:` はターゲット・システム上の必要なマップ・ドライブです。

共有インストール・ディレクトリー名にスペースが含まれる場合 (例えば、`Broker Image`) には、二重引用符で囲ってください。

サーバーが保護されている場合、このコマンドでユーザー ID とパスワードを指定が必要になることがあります (net use コマンドについての詳細は、Windows オンライン・ヘルプを参照してください)。または、Windows エクスプローラーや、それに代わる他の方法を使用して、共有リソースをドライブ名にマップしてください。

インストール・プログラムにアクセスするために UNC パス (*server*drive) を入力することはできません。示されているようにドライブをマップする必要があります。そうしないと、Java プロセスはタイムアウトになります。ドライブをマップできない場合や、ドライブをマップしないことにした場合には、DVD の内容をローカル・ドライブ上にコピーし、そのドライブからインストールしてください。さらに、インストール・ウィザードが入力としてパスを要求したときにも、UNC パスを入力することはできません。ウィザードは UNC パスを解釈できません。

3. リモート・イメージ・ディレクトリーに移動します。これで、ランチパッド (Windows のみ) またはインストール・ウィザードを実行してリモート・ディレクトリーからローカル・システムに製品をインストールする準備ができました。

Linux および UNIX システムでのカーネル構成の確認

前提条件および相互必要条件の製品について、Linux および UNIX システムでのカーネル構成パラメーターを確認します。

WebSphere Message Broker にはカーネル構成パラメーターについて特定の要件はありませんが、他の製品が特定の設定を必要とする場合があります。インストールした製品に適合するようにカーネル・パラメーターを調整しないと、予期しない動作が見られたり、パフォーマンスの低下を経験したりする可能性があります。

1. 以下の製品について、文書化された値を確認してください。
 - a. WebSphere MQ。該当するオンラインの WebSphere MQ インフォメーション・センターで、ご使用のオペレーティング・システム用の『カーネル構成』のトピックを参照してください。バージョン 7 については、以下をご覧ください。
publib.boulder.ibm.com/infocenter/wmqv7/v7r0/index.jsp
2. 各パラメーターの最高値を取り、それをカーネル構成内の対応する値と比較します。
3. 現行値が文書化された最高値よりも低い場合には、適切なツールを使用して (例えば HP-Itanium)、現在の設定を更新します。現行値の方が高い場合には、変更しないでおきます。
4. Solaris では、システム上の同時オープン・ファイル記述子の最大数を少なくとも 256 に増やします。
5. 何らかのカーネル値を変更した場合には、それらの変更が有効になるために、システムを再始動しなければならないかもしれません。これらのパラメーターに関するさらに詳しい情報について、ご使用のオペレーティング・システムの資料を確認してください。

第 7 章 何をインストールするかを選択する

どの WebSphere Message Broker コンポーネントをインストールするかを選択します。

オペレーティング・システムによっては、WebSphere Message Broker をインストールする前に、いくつかの作業を完了していなければなりません。詳しくは、45 ページの『第 6 章 システムを準備する』を参照してください。

WebSphere Message Broker は 3 つのコンポーネント、すなわちブローカー、Explorer、および Toolkit によって構成されます。サポートされているすべてのオペレーティング・システム上にブローカーをインストールできます。Explorer と Toolkit については、Linux (x86) および Windows 上のみインストールできます。

ブローカー

ブローカーとは、メッセージ処理機能を提供する一式の実行プロセスであり、Point-to-Point 通信とパブリッシュ/サブスクライブ通信の両方を使用する様々なアプリケーション・クライアントと相互作用します。ブローカーは、ユーザーが作成するメッセージ・フローのホストになります。ブローカーは、1 つ以上の実行グループ内で多くのメッセージ・フローのホストになることができ、多くのクライアントをサポートできます。

メッセージがどのように受信され、処理され、受信側アプリケーションまたはサブスクライバーに配信されるかを、ユーザーが定義します。

- マッピング、ESQL、Java、PHP、および XSL スタイル・シートを使って、メッセージ・フロー内の一部のメッセージ処理ノードをカスタマイズすることができます。
- メッセージ・モデルを作成することによりメッセージ構造を定義することができます、それらは、C および COBOL データ構造、SWIFT や EDIFACT などの業界標準、さらに XML DTD またはスキーマによって判別されます。
- ユーザー定義の拡張 (ノードおよびパーサー) を開発することにより、用意されているノードやパーサーでは提供されないメッセージ処理オプションをサポートすることができます。
- メッセージ・フローのデバッグと処理のステップスルーにより、パスおよび結果を検査することができます。
- メッセージ・フロー集約を使用して、単一の入力メッセージによって生成される複数の要求と応答を管理することができます。

どのシステムにも複数のブローカー・コンポーネントをインストールすることができます。別々のインストールがどのようにして共存できるかについて詳しくは、27 ページの『第 3 章 共存とマイグレーション』を参照してください。

ブローカー・コンポーネントのインストールでは、標準インストールとカスタム・インストールのいずれかを選択できます。それらのインストール・オプションについては、27 ページの『第 3 章 共存とマイグレーション』で解説されています。

WebSphere Message Broker Explorer

Explorer は Eclipse プラットフォームをベースとするスタンドアロン管理環境であり、1 つ以上のブローカーと通信します。管理者は Explorer を使用して、それらのブローカーに関連付けられたリソースを管理します。管理用タスクだけを実行するためのコンピューターに Explorer をインストールしてください。

WebSphere Message Broker Toolkit

Toolkit は、Eclipse プラットフォームおよび Rational フレームワークに基づいた、統合開発環境およびグラフィカル・ユーザー・インターフェースです。

アプリケーション開発者は、Toolkit の別個のインスタンスで作業して、メッセージ・フロー、メッセージ・セット、およびユーザー定義のノードとパーサーを開発します。共有リポジトリ (例えば CVS) にアクセスして、リソースを保管し、保護された仕方でも複数のユーザーがそれらにアクセスできるようにすることができます。

WebSphere Message Broker ODBC Database Extender

WebSphere Message Broker を使用して、DataDirect ODBC ドライバーを介してサポートされない ODBC データ・ソースとのインターフェースを設ける場合には、WebSphere Message Broker ODBC Database Extender が必要です。

WebSphere Message Broker をインストールするために使用するインターフェースを選択します。詳しくは、22 ページの『IBM Installation Manager』を参照してください。

第 8 章 インストールおよびアンインストールのインターフェース

ランタイム・コンポーネントおよび WebSphere Message Broker Toolkit のインストールとアンインストールには、異なるインターフェースを使用できます。

ランタイム・コンポーネントのインストールまたはアンインストール時には、グラフィカル、コンソール、またはサイレントの各インターフェースを選択できます。これらのオプションについては、『ブローカーのインストールおよびアンインストールの方法』で説明されています。

WebSphere Message Broker Toolkit のインストールまたはアンインストール時には、グラフィカル・インターフェースまたはサイレント・インターフェースを選択できます。これらのオプションについては、65 ページの『WebSphere Message Broker Toolkit のインストールおよびアンインストールの方法』で説明されています。

このセクションのトピック内のコマンド例では、インストール・ウィザードまたはアンインストール・ウィザードの名前に、*installer* と *uninstaller* を使用しています。ウィザードを使用するプラットフォームに合わせて正しい名前に置き換えてください。特に断りのない限り、この例はコンポーネントのアンインストール、またはサービスの適用に使用できます。3 つすべての操作について同じ形式が使用されています。

ブローカーのインストールおよびアンインストールの方法

3 つのインターフェースのうちの 1 つを使用して、ブローカーをインストールおよびアンインストールします。

- 60 ページの『グラフィカル・インターフェース』
- 60 ページの『コンソール・インターフェース』
- 61 ページの『サイレント・インターフェース』

それぞれのインターフェースには異なる利点があり、それらは該当するセクションで論じられています。使用するインターフェースが選択済みの場合は、以下のようになります。

- ユーザー ID に、このタスクを実行するための正しい権限があることを確認します。詳細については、インフォメーション・センターの『インストールおよびアンインストールの許可』を参照してください。
- 複数のブローカーがシステムにインストール済みである場合、62 ページの『複数のブローカー・インストールをアンインストールする方法』を参照してください。
- インフォメーション・センター内の『インストール』（新規インストールの場合か、サービスを既存のコンポーネントにインストールする場合）、またはインフォメーション・センター内の『アンインストール』（製品コンポーネントとサービスの場合）にあるインストールの指示に従います。

グラフィカル・インターフェース

インストールおよびアンインストール・ウィザードは、オプションを何も指定せずに開いた場合、グラフィカル・インターフェースで開始されます（これはデフォルトのインターフェースです）。ウィザードは、オプションおよびデフォルトを提供する一連のページと共にインストールまたはアンインストール処理をガイドします。デフォルト値を受け入れるか、ご使用の環境および要件に合うようにそれを変更することができます。

グラフィカル・インターフェースでは、最も高いレベルの情報および指針が提供されます。製品に不慣れである場合、または進行状況をモニターする場合は、このインターフェースを使用してください。

「インストール進行状況」パネルまたは「アンインストール進行状況」パネルが表示される前に「キャンセル」をクリックすると、セットアップを終了することができます。終了することを選択すると、システムはウィザードを起動する前の状態に戻ります。ただし、インストールまたはアンインストールが完了し、最後の「要約」パネルが表示された後にインストール・ウィザードをキャンセルしても、システムは以前の状態に復元されません。ウィザードは即時に停止します。インストール済みのプログラムを除去する場合は、アンインストール・ウィザードを起動してください。

ウィザードを使用する際に、「次へ」をクリックしてから次のパネルに移動するまで、数秒間待機しなければならない場合があります。進行状況は常にすべてのパネルで表示されるわけではありません。「次へ」を2回クリックすると、パネル全体がスキップされる場合があります。インストーラーまたはアンインストーラーが進行中であることを確認するために、プロセッサ使用量をモニターしてください。インストールおよびアンインストール時には、プロセッサ使用量が大幅に増加します。

コンソール・インターフェース

コンソール・インターフェースは、コマンド・ウィンドウで対話する文字ベース・インターフェースです。これは、グラフィカル・インターフェースと同じオプションを提供します。

グラフィカル・インターフェースよりもコマンド行またはテキスト・インターフェースを使用することを望む場合は、コンソール・インターフェースを使用します。このインターフェースは、キーボードだけを使用して値の選択やインストールのナビゲートを行うユーザーや、JAWSなどのスクリーン・リーダー・ソフトウェアを使用するユーザーに適しています。

インストーラーは、以下のコマンドで呼び出します。アンインストーラーの場合も同様のフォーマットを使用します。

```
installer -console
```

以下のプロンプトを使用して、ウィザード全体をナビゲートします。

- 1 次のパネルへ進む
- 2 前のパネルに戻る
- 3 ウィザードをキャンセルして終了する

- 4 現在の画面を再表示する

デフォルト・オプションは常に大括弧内に表示されます (例、[1])。このデフォルト・オプションが正しい選択であれば、Enter キーを押して続行します。

サイレント・インターフェース

多数の同一システムに対して自動化インストールまたはアンインストールを行う場合は、サイレント・インターフェースを使用します。サイレント・インストールまたはサイレント・アンインストールを開始すると、ウィザードは対話なしに実行します。このインターフェースを使用すると、デフォルト・オプションを使用して、または事前定義されたオプションのセットに従って、プロセスが完了します。サイレント・インターフェースでは、呼び出し元へのフィードバックは一切送信されないため、ログを表示してアクションが正常に実行されたかどうかを確認する必要があります。

サイレント・インターフェースを使用してブローカーをアンインストールする場合、起動するアンインストール・ウィザードの場所には関係なく、ウィザードは常に最後に認識されたバージョン 7.0 インストール場所 (つまり、最新のインストール済み環境) からコンポーネントをアンインストールします。以前のバージョン 7.0 インストール済み環境からコンポーネントを除去するには、コンソールまたはグラフィカル・インターフェースを使用します。

サイレント・インストールは、次のような方法で実行できます。

- デフォルト・オプションを使用する。

インストール・ウィザードは、以下のアクションを実行します。

- 前提ソフトウェアがインストールされていることの確認
- デフォルト・ディレクトリーへのインストール
- すべての選択可能フィーチャーのインストール

インストール・ウィザードは、前提条件ソフトウェアをサイレント・インターフェースを使用して検査し、前提条件ソフトウェアがまだインストールされていない場合、プログラムは失敗します。応答ファイルを使用する場合 (63 ページの『ランタイム・コンポーネントでの応答ファイルの使用』を参照)、またはコマンド呼び出しの際にデフォルト以外の値を持つ適切なパラメーターが含まれている場合、この検査をオーバーライドすることができます。

アンインストール・ウィザードは、以下のアクションを実行します。

- すべての選択可能フィーチャーの削除

デフォルト・オプションを指定してウィザードを実行する場合は、コマンドで `-silent -G licenseAccepted=true` オプションを指定します。

```
installer -silent -G licenseAccepted=true
```

- 1 つ以上のデフォルト以外のオプションを使用する。

ウィザードで 1 つ以上のオプションにデフォルト以外の値を使用する場合は、63 ページの『ランタイム・コンポーネントでの応答ファイルの使用』の説明に従って、コマンド呼び出しまたは応答ファイルでデフォルト以外のオプションを指定します。

サンプル応答ファイルが、ルート CD ディレクトリーの `sample-scripts` ディレクトリーで提供されています。このファイルには、変更可能なオプションおよびそれらのオプションを変更するのに入力する必要がある値に関する詳細情報が含まれています。このファイルを要件に合わせて調整するか、または新規の応答ファイルを生成します。

`response1.txt` という応答ファイルを使用して、調整されたサイレント・インストールを実行するには、コマンドで `-silent` オプションおよびファイル名を以下のように指定します。

```
installer -silent -G licenseAccepted=true -options response1.txt
```

複数のブローカー・インストールをアンインストールする方法

複数のブローカー・インストールが存在する場合のブローカーのアンインストール

単一コンピューターに同じバージョンおよびリリース (例えば、バージョン 7.0) のランタイム・コンポーネントを複数回インストールする場合、オペレーティング・システムによって提供されるインストーラー・サポートは、通常の方法でこれらのインストールを管理できません。

後で複数のインストールのいずれかをアンインストールする場合は、オペレーティング・システムによって提供される機能ではなく、除去する特定のインストールの `_uninst_runtime` ディレクトリーにあるアンインストール・プログラム `uninstaller` を使用します。

`install.properties` ファイルを表示して、現在のインストールとその場所を参照し、オペレーティング・システムの表記を確認することができます。

AIX 最初のインストールは `mqsivr` と記録されます (例えば、`mqs70`)。 **lspp** を使用してインストール済み製品をリストする場合、同じ `vr` レベルの後続のインストールは最初のインストールの下に表示されます。 **smitty** および **geninstall** を使用してこれらの後続のインストールを管理する場合、結果は予測不能になります。

Linux、HP-UX、および Solaris

最初のインストールは `mqsi/vr` と記録されます (例えば、`mqsi/70`)。同じ `vr` レベルの後続のインストールは、`mqsi/vr-2` などと記録されます。

Windows

特定のバージョンおよびリリースで完了した最新のインストールは、「プログラムの追加と削除」に表示されます。それ以外のインストールはここに表示されません。同様に、「スタート」メニューの「コマンド・コンソール」オプションは、特定のバージョンおよびリリースの最新のインストールと関連付けられたオプションです。

「プログラムの追加と削除」にリストされている特定のバージョンおよびリリースの製品をアンインストールする場合、コンピューター上で完了した以前のインストールはその表示には復元されません。

他のインスタンスをアンインストールするには、アンインストール・プログラムが含まれているディレクトリーに移動します。アンインストール・タスクについて詳しくは、インフォメーション・センターを参照してください。

ランタイム・コンポーネントでの応答ファイルの使用

サイレント・インターフェースを実行するインストールまたはアンインストール・ウィザードの動作を定義するには、応答ファイルを使用します。

応答ファイルはテキスト・ファイルであり、ウィザードが作成する選択項目を定義するオプションが含まれます。応答ファイルを使用して、デフォルト以外の値でランタイム・コンポーネントをインストールまたはアンインストールしたり、サービス更新を適用したりできます。

- 『サンプル応答ファイルの編集』
- 64 ページの『応答ファイルの記録』
- 64 ページの『応答ファイルの生成』
- 64 ページの『コマンドでの応答ファイルの呼び出し』

サンプル応答ファイルの編集

サンプル応答ファイルが提供されています。Linux および UNIX システムでは、このファイルは `/sample-scripts/install.opt` です。Windows では、このファイルは `¥sample-scripts¥install.opt` です。サンプル応答ファイルには、変更可能なオプションおよびそれらのオプションを変更するのに入力できる値に関する詳細情報が含まれています。このファイルは要件に合致するように調整できます。

行の先頭の番号記号 (#) は、コメントを示します。行を有効にするには、コメント文字を削除します。

以下の行の先頭にあるコメント文字を削除する必要があります。これを行わない場合、他の選択内容は無視されます。

```
# -W setupTypes.selectedSetupTypeId=
```

インストール応答ファイルの変更方法を示すいくつかの例を以下に示します。

- 製品ライセンスに同意するには、次のようにします。
`-G licenseAccepted=true`
- カスタム・インストールを選択します (標準インストールがデフォルト・オプション)。
`-W setupTypes.selectedSetupTypeId=custom`
- デフォルト以外のディレクトリーにインストールします。

以下の行を見つけて、番号記号を削除し、選択したインストール・ディレクトリーを挿入します。

```
### -P installLocation=new_location
```

- プログラムが前提条件ソフトウェアをチェックするかどうかを指定します。

以下の行をファイルに追加し、インストール・ウィザードが WebSphere MQ のチェックを無視するよう指示します。

```
# don't check for WebSphere MQ  
-P mqPrerequisite.active=false
```

応答ファイルの記録

以下のコマンドを使用して、応答ファイルを記録します。

```
installer -options-record responsefile
```

ここで、*responsefile* は、選択した応答ファイルの絶対パスおよびファイル名です。Windows では、パスと名前にスペースが含まれている場合には、それらを引用符で囲みます ("response file")。このファイルは、製品がインストールされているディレクトリとは別のディレクトリに作成します。

インストール・ウィザードがグラフィカル・インターフェースを開始し、進行に応じてユーザー応答を記録していきます。インストールが完了した時点で、応答ファイルにはインストール時に行ったすべての選択が含まれます。

コンソールでのインストール時に応答ファイルを記録したい場合には、以下のコマンドを使用します。

```
installer -options-record responsefile -console
```

応答ファイルの生成

以下のコマンドを使用して、テンプレート・インストール応答ファイルを生成します。このウィザードは、これらのオプションを指定して開始するときには、インストールまたはアンインストールを実行しません。

```
installer -options-template responsefile
```

ここで、*responsefile* は、選択した応答ファイルの絶対パスおよびファイル名です。Windows では、パスと名前にスペースが含まれている場合には、それらを引用符で囲みます。アンインストールする場合は、別のディレクトリに応答ファイルを作成し、アンインストールの一部として削除されることのないようにします。

生成されたテンプレート応答ファイルには、それを編集して必要なオプションを指定する方法に関する詳細な説明が含まれます。

コンソールでのインストール時に応答ファイルを生成するには、以下のコマンドを使用します。

```
installer -options-template responsefile -console
```

コマンドでの応答ファイルの呼び出し

以下のコマンドを使用して、応答ファイルを使用するサイレント・インターフェースを実行します。

```
installer -options responsefile -silent
```

ここで、*responsefile* は、選択した応答ファイルの絶対パスおよびファイル名です。Windows では、パスと名前にスペースが含まれている場合には、それらを引用符で囲みます。

ウィザードが稼働して、その入力を応答ファイルから取ります。

WebSphere Message Broker Toolkit のインストールおよびアンインストールの方法

2 つのインターフェースのうちの 1 つを使用して、WebSphere Message Broker Toolkit をインストールおよびアンインストールします。

- 『グラフィカル・インターフェース』
- 66 ページの『サイレント・インターフェース』

それぞれのインターフェースには異なる利点があり、それらは該当するセクションで説明されます。使用するインターフェースが選択済みの場合は、以下のようになります。

- ユーザー ID に、このタスクを実行するための正しい権限があることを確認します。詳細については、インフォメーション・センターの『インストールおよびアンインストールの許可』を参照してください。
- インフォメーション・センター内の『インストール』（新規インストールの場合か、サービスを既存のコンポーネントにインストールする場合）、またはインフォメーション・センター内の『アンインストール』（製品コンポーネントとサービスの場合）にあるインストールの指示に従います。

グラフィカル・インターフェース

インストールおよびアンインストール・ウィザードは、オプションを何も指定せずに開いた場合、グラフィカル・インターフェースで開始されます（これはデフォルトのインターフェースです）。ウィザードは、オプションおよびデフォルトを提供する一連のページと共にインストールまたはアンインストール処理をガイドします。デフォルト値を受け入れるか、ご使用の環境および要件に合うようにそれを変更することができます。

グラフィカル・インターフェースでは、最も高いレベルの情報および指針が提供されます。製品に不慣れである場合、または進行状況をモニターする場合は、このインターフェースを使用してください。

「インストール進行状況」パネルまたは「アンインストール進行状況」パネルが表示される前に「キャンセル」をクリックすると、セットアップを終了することができます。終了することを選択すると、システムはウィザードを起動する前の状態に戻ります。ただし、インストールまたはアンインストールが完了し、最後の「要約」パネルが表示された後にインストール・ウィザードをキャンセルしても、システムは以前の状態に復元されません。ウィザードは即時に停止します。インストール済みのプログラムを除去する場合は、アンインストール・ウィザードを開始してください。

ウィザードを使用する際に、「次へ」をクリックしてから次のパネルに移動するまで、数秒間待機しなければならない場合があります。進行状況は常にすべてのパネルで表示されるわけではありません。「次へ」を 2 回クリックすると、パネル全体がスキップされる場合があります。インストーラーまたはアンインストーラーが進行中であることを確認するために、プロセッサ使用量をモニターすることができます。インストールおよびアンインストール時には、プロセッサ使用量が大幅に増加します。

サイレント・インターフェース

多数の同一システムに対して自動化インストールを行う場合は、サイレント・インターフェースを使用します。サイレント・インストールまたはサイレント・アンインストールを開始すると、ウィザードは対話なしに実行します。デフォルト・オプションを使用して、または事前定義されたオプションのセットに従って、プロセスが完了します。サイレント・インターフェースでは、呼び出し元へのフィードバックは一切送信されないため、ログを確認してアクションが正常に実行されたかどうかを判別する必要があります。

サイレント・インストールは、デフォルト設定で、または 1 つ以上のデフォルト以外の値を指定して実行できます。

- デフォルト設定では、インストール・ウィザードは以下のアクションを実行します。
 - デフォルト・ディレクトリへのインストール
 - すべてのサポート対象ロケールのインストール

デフォルトのサイレント・インストールを実行するには、以下のコマンドを入力します。ローカルまたはリモートの DVD、あるいはネットワーク・ドライブの /Message_Broker_Toolkit_V7/disk1/IBMInstallation Manager ディレクトリにあるインストール・ウィザードを見つけます。IBM Installation Manager がまだインストールされていない場合は、WebSphere Message Broker Toolkit のインストール前にインストールされます。

Linux Linux(x86)

```
./install -nosplash --launcher.suppressErrors -silent -input mbtoolkit-silent.xml
```

Windows Windows

```
install.exe -nosplash --launcher.suppressErrors -silent -input mbtoolkit-silent.xml
```

- 1 つ以上のデフォルト以外の設定を指定すると、ウィザードは取るべきアクションを判別するために、応答ファイルで指定したオプションを適用します。

ウィザードで 1 つ以上のオプションにデフォルト以外の値を使用する場合は、『WebSphere Message Broker Toolkit での応答ファイルの使用』の説明に従って、記録された応答ファイルを指定してください。

WebSphere Message Broker Toolkit での応答ファイルの使用

応答ファイルを指定して、インストール・ウィザードまたはアンインストール・ウィザードの動作を定義します。

応答ファイルを使用して、WebSphere Message Broker Toolkit をインストールまたはアンインストールしたり、サービス更新を適用したりできます。

- 67 ページの『サンプル応答ファイルの編集』
- 67 ページの『応答ファイルの記録』
- 67 ページの『コマンドでの応答ファイルの呼び出し』

サンプル応答ファイルの編集

サンプル応答ファイル `mbtoolkit-silent.xml` は、Linux(x86) および Windows で提供されています。このファイルは、IBM Installation Manager がまだインストールされていないことを想定しており、Installation Manager と WebSphere Message Broker Toolkit の両方をデフォルトの場所にインストールするためのオプションを設定します。

これらのファイルは要件に合致するように調整できますが（例えばインストール場所の変更など）、グラフィカル・インストールまたはアンインストールの記録オプションをお勧めします。記録オプションを使用すれば、ファイル内容を変更する必要がありません（ファイルは複数のインストール、ディレクトリー、およびオプションを扱っているため、ファイル内容の変更は複雑です）。

応答ファイルの記録

以下のコマンドを使用して、応答ファイルを記録します。

- Linux(x86) の場合:

```
./install -record response.xml
```

- Windows の場合:

```
install.exe -record response.xml
```

ここで、`response.xml` は、選択した応答ファイルの絶対パスおよびファイル名です。Windows では、パスと名前にスペースが含まれている場合には、それらを引用符で囲みます。このファイルは、製品がインストールされているディレクトリーとは別のディレクトリーに作成します。

インストール・ウィザードはグラフィカル・インターフェースで開かれ、進むにつれてユーザーの入力が必要になります。応答はインストール時に記録されます。インストールが完了した時点で、応答ファイルにはインストール時に行ったすべての選択が含まれます。

コマンドでの応答ファイルの呼び出し

以下のコマンドを使用して、サイレント・インターフェースと記録された応答ファイルを使用してインストール・ウィザードを実行します。

- Linux(x86) の場合:

```
./install -nosplash --launcher.suppressErrors -silent -input response.xml
```

- Windows の場合:

```
install.exe -nosplash --launcher.suppressErrors -silent -input response.xml
```

ここで、`response.xml` は、記録した応答ファイルの絶対パスおよびファイル名です。Windows では、パスと名前にスペースが含まれている場合には、それらを引用符で囲みます。

ウィザードが稼働して、その入力を応答ファイルから取ります。

インストール・ウィザード名

WebSphere Message Broker ブローカー、WebSphere Message Broker Toolkit、および WebSphere Message Broker Explorer をインストールするのに使用されるインストール・ウィザードを表示します。

インストール・ウィザードには、オペレーティング・システムごとに異なる名前が付けられています。これらのプログラムを調べるため、以下の表に名前を示します。

WebSphere Message Broker ブローカーのインストール・ウィザード名

以下の表に、ブローカー・コンポーネントのインストーラーを開始するのに使用するインストール・ウィザードの名前を示します。

表 14. WebSphere Message Broker ブローカーのインストール・ウィザード名

オペレーティング・システム	インストール・ウィザード名
AIX	setupaix
HP-Itanium	setuphpia64
Linux (POWER)	setuplinuxppc
Linux(x86)	setuplinuxia32
Linux (x86-64)	setuplinuxx64
Linux (System z)	setuplinux390
Solaris (SPARC)	setupsolaris
Solaris (x86-64)	setupsolarisx64
Windows (32 ビット)	setup.exe
Windows (64 ビット)	setup.exe

WebSphere Message Broker Toolkit のインストール・ウィザード名

以下の表に、WebSphere Message Broker Toolkit のインストールを制御する Installation Manager を開始するのに使用するインストール・ウィザードの名前を示します。

表 15. WebSphere Message Broker Toolkit のインストール・ウィザード名

オペレーティング・システム	インストール・ウィザード名
Linux(x86)	install
Linux(x86-64)	install
Windows (32 ビット)	install.exe ¹
Windows (64 ビット)	install.exe ¹

注:

1. Installation Manager の開始に、installc.exe を使用することもできます。このプログラムは同期的に動作するので、インストールが完了するまでコマンド行には制御が返されません。

WebSphere Message Broker Explorer のインストール・ウィザード名

以下の表に、WebSphere Message Broker Explorer のインストーラーを開始するのに使用するインストール・ウィザードの名前を示します。

表 16. WebSphere Message Broker Explorer のインストール・ウィザード名

オペレーティング・システム	インストール・ウィザード名
Linux(x86)	install
Linux(x86-64)	install
Windows (32 ビット)	install.exe
Windows (64 ビット)	install.exe

第 3 部 インストール

本書のこの部分では、Launchpad (Windows でのみ使用可能) またはインストール・ウィザードを使って WebSphere Message Broker を分散システムにインストールする方法を示します。

- ブローカー・コンポーネント、WebSphere Message Broker Toolkit、および WebSphere Message Broker Explorer を Windows にインストールするには、Launchpad を使用します。また、このプログラムは、前提条件となる製品がまだインストールされていない場合にそれらをインストールし、サポートされるレベルに達していない場合は通知します。このプログラムについては、73 ページの『第 9 章 Windows ランチパッドを使用したインストール』で説明しています。
- ブローカー・コンポーネントを Linux または UNIX システムにインストールするには、ご使用のオペレーティング・システムに適したインストール・ウィザードを実行します。81 ページの『第 10 章 WebSphere Message Broker ブローカーのインストール』の説明に従ってください。

また、Windows で Launchpad を使用する代わりにウィザードを使用することもできます。

- Linux(x86) および Linux(x86-64) に WebSphere Message Broker Toolkit をインストールするには、89 ページの『第 11 章 WebSphere Message Broker Toolkit のインストール』の説明に従ってインストール・ウィザードを実行します。

また、Windows で Launchpad を使用する代わりにウィザードを使用することもできます。

- Linux(x86) および Linux(x86-64) に WebSphere Message Broker Explorer をインストールするには、95 ページの『第 12 章 WebSphere Message Broker Explorer のインストール』の説明に従ってインストール・ウィザードを実行します。

また、Windows で Launchpad を使用する代わりにウィザードを使用することもできます。

z/OS にランタイム・コンポーネントをインストールするには、「*Program Directory for WebSphere Message Broker for z/OS*」に説明されている手順に従ってください。

第 9 章 Windows ランチパッドを使用したインストール

Windows ランチパッドを使用して、WebSphere Message Broker コンポーネントとその前提条件製品をインストールします。

どの WebSphere Message Broker コンポーネントをインストールするかを選択します。詳しくは、57 ページの『第 7 章 何をインストールするかを選択する』を参照してください。

Windows に限り、ランチパッドを使用すると、以下のインストールに関する追加の支援が得られます。

- WebSphere Message Broker Toolkit
- WebSphere Message Broker Explorer
- ブローカー
- ブローカーの前提条件の製品

ランチパッドを使用すると、必要なものをすべてインストールでき、他の章で説明されている、ブローカー、WebSphere Message Broker Toolkit、および WebSphere Message Broker Explorer のインストールに関する手順に従う必要はありません。

ランチパッドは、物理メディア (DVD) と、IBM パスポート・アドバンテージからダウンロードした電子イメージの両方に対応していますが、DVD と同じファイル構造で動作するようになっているので、ダウンロード時やダウンロード後にファイル構造を変更しないでください。

単一コンピューターでの複数インストール

ランチパッドを使用する場合、単一のコンピューターに各コンポーネントの 1 つのインスタンスのみをインストールできます。ブローカーまたはツールキットのコンポーネントを選択してインストールした場合は、ランチパッドを使用してこれらのコンポーネントを別の場所に再インストールすることはできません。

追加のインスタンスをインストールするには、該当するインストール・ウィザードを直接実行してください。これらのタスクの実行方法の説明は、81 ページの『第 10 章 WebSphere Message Broker ブローカーのインストール』、89 ページの『第 11 章 WebSphere Message Broker Toolkit のインストール』、および 95 ページの『第 12 章 WebSphere Message Broker Explorer のインストール』を参照してください。

またランチパッドは、単一のコンピューター上で WebSphere MQ の 1 つのインストールのみ管理します。複数インスタンスをインストールする場合は、これらの製品の関係資料を参照してください。

インストールの要約

以下のリストは、取るべきアクションについて要約しています。

1. これらのインストール指示に対する更新について、`readme.html` ファイルを調べてください。
2. メモリーとディスク・スペースが十分あることを確認します。11 ページの『メモリーおよびディスク・スペースの要件』を参照してください。
3. サーバーからインストールするか、各システム上でローカルにインストールするかを決めます。これらの選択項目については、49 ページの『CD および DVD へのアクセス』で説明されています。
4. ランチパッドを開始して、WebSphere Message Broker とその前提条件の製品 WebSphere MQ をインストールします。詳細な指示については、『ランチパッドの開始』を参照してください。

ランチパッドの開始

Windows ランチパッドの開始。

ランチパッドは、製品コンポーネントまたは前提条件製品をインストールできるすべての DVD およびダウンロードしたイメージに対して使用できます。

物理製品メディアを使用する場合は、自動実行を使用可能にすると、ランチパッドは自動的に開始されます。自動実行を使用可能にしない場合や、ダウンロード・イメージからインストールする場合は、DVD またはイメージのルート・ディレクトリにナビゲートし、ファイル `mqsilaunchpad.exe` をダブルクリックするかコマンド・ウィンドウで `mqsilaunchpad` と入力して、**Enter** キーを押します。

「インストール」ウィンドウが表示されます。「インストール」ウィンドウでは、WebSphere Message Broker のデフォルト構成に必要な製品のセットをインストールできます。これには、WebSphere MQ も含まれます (まだインストールされていない場合)。詳しくは、75 ページの『インストール』を参照してください。

左側のペインから、以下の追加情報にアクセスしてください。

- 「インストール・ガイド」をクリックして、インストール・ガイドの PDF コピーを Adobe® Reader で立ち上げます。
- 「**Readme**」をクリックして、新しいブラウザ・ウィンドウで README ファイル `readme.html` を表示します。
- 「クイック・ツアー」をクリックして、製品を紹介するツアーを実行します。詳しくは、インフォメーション・センターの『WebSphere Message Broker 概説』を参照してください。

選択内容によっては、ランチパッドがインストール・ウィザードを検索する必要があります。DVD からインストールする場合は、必須の製品はすべて使用可能ですが、ダウンロード・イメージからインストールする場合は、プログラムが別のダウンロード・イメージにある可能性や、予想した場所がない可能性があります。必要に応じて、ランチパッドはファイルを見つけるために適切なアクションを取ることを求めるプロンプトを出します。以下の表は、提供されている製品ごとに、プログラム名とそのダウンロード・イメージ上での場所を示しています。

表 17. Windows ランチパッドで使用されるインストール・ウィザードの名前と場所

製品	インストール・ウィザード名	ディレクトリー	ダウンロード・イメージ
WebSphere Eclipse Platform V3.3 ¹	IBM WebSphere Eclipse Platform V3.3.msi	¥WebSphere_MQ_V7.0.1¥Prereqs¥IES¥MSI	Runtime Disk 2
WebSphere MQ V7.0.1 ¹	IBM WebSphere MQ.msi	¥WebSphere_MQ_V7.0.1¥MSI	Runtime Disk 2
WebSphere Message Broker ブローカー	setup.exe	¥ (ルート・ディレクトリー)	Runtime Disk 1
WebSphere Message Broker Explorer	install.exe	¥MBExplorer	Runtime Disk 1
WebSphere Message Broker Toolkit	install.exe	¥IBMInstallationManager ²	Toolkit Disk 1

注:

1. WebSphere Message Broker Trial Edition にはこの製品は組み込まれていません。詳細は、35 ページの『第 5 章 インストール・パッケージ』を参照してください。
2. ランチパッドは Installation Manager を開始します。その際、必要に応じて、Installation Manager がインストールされ、WebSphere Message Broker Toolkit のインストールを開始します。

インストール

「インストール」ウィンドウを使用して、デフォルト構成をインストールします。

ランチパッドを開始すると、「インストール」ウィンドウが開きます。

1. デフォルト構成に必要な、以下の最小限の製品のセットがリストされます。
 - WebSphere MQ V7.0.1
 - WebSphere Message Broker V7.0
 - WebSphere Message Broker Toolkit V7.0
 - WebSphere Message Broker Explorer V7.0
2. リストされた製品ごとに、表示される初期インストール状況を確認します。
 - 「**必須**」は、この製品がインストールされておらず、最小の構成に必要な製品の 1 つであり、関係するチェック・ボックスのチェックを外したか、ランチパッドでインストールできない (この場合はチェック・ボックスは表示されない) ことを示します。
 - 「**保留**」は、最小構成のブローカー・ドメインの操作が確実に正常に行われるには、この製品をインストールしなければならないことを示します。関係するチェック・ボックスが選択されると、この製品がインストールされることを示します。
 - 「**インストール済み**」は、WebSphere Message Broker でサポートされているレベルでこの製品が既にインストールされていることを示します。インストールされているバージョンが示され、チェック・ボックスは表示されません。

- 「部分インストール」は、この製品はインストールされていますが、システム上で最小構成のブローカー・ドメインの操作が確実に正常に行われるために必要なコンポーネントの一部がインストールされていないことを示します。関係するチェック・ボックスが選択されると、追加のコンポーネントがインストールされることを示します。
- 3. リストされている各製品の左側にある正符号を順にクリックします。ランチパッドは製品に関する追加の情報を表示するので、インストールするかどうか決めるのに使用できます。該当する場合、追加情報には、各製品のインストールを完了するのに要する時間の見積もりも示されます。
- 4. インストールで、必要な WebSphere MQ コンポーネントがすべてインストールされているか確認します。WebSphere Message Broker にはサーバー、WebSphere MQ Explorer、および Java Messaging コンポーネントのみ必要で、これらのコンポーネントのみインストールされます。

追加のコンポーネントが必要な場合は、WebSphere MQ インストーラーを使用してください。

- 5. WebSphere MQ Explorer の場合は、WebSphere Eclipse Platform をインストールする必要があります。WebSphere MQ V7.0.1 を選択した場合は、Eclipse Platform は自動的にインストールされます。
- 6. リストされた製品をインストールしない場合は、その製品に関係したチェック・ボックスのチェックを外します。リストされた製品がすべて揃わないとインストールを構成したり検証したりできないので、状況が「**必須**」に変わります。チェックを外した製品が別の製品の前提条件になっている場合、その別の製品のチェックも外されます。残りの製品のインストールを完了し、チェックを外した製品を後でインストールできます。

WebSphere Message Broker Trial Edition をインストールする場合は、ランチパッドを使用する前に WebSphere MQ と Eclipse プラットフォームをインストールする必要があります。これらの製品は、Trial Edition では提供されていません。WebSphere Message Broker Trial Edition をサポートするには、他のソースから前提ソフトウェアを入手しなければなりません。詳しくは、35 ページの『第 5 章 インストール・パッケージ』を参照してください。

- 7. 「**WebSphere Message Broker のインストールの起動**」をクリックします。

1 つ以上の必須の製品のチェックを外した場合は、選択を確認するよう求められます。

ランチパッドは、選択した製品を示されている順序でインストールします。インストール・プロセスの開始後に、「インストール」ウィンドウを変更することはできません。ランチパッドが各インストールを開始すると、状況が「**保留**」から「**進行中**」に更新されます。

WebSphere MQ のレベルが誤っている (V6.1 など) 場合は、以下の警告が出されることがあります。ランチパッドは WebSphere MQ V6.1 をアンインストールし、WebSphere MQ V7.0.1 をインストールします。

選択された 1 つ以上のインストールがインストール済みソフトウェアの既存のバージョンをアップグレードします。追加のプロンプトが出されることなく古いバージョンが除去されることがあります。続行するには、「OK」をクリックします。

- WebSphere MQ V7.0.1 を選択した場合は、ランチパッドは WebSphere Eclipse Platform V3.3 用のインストール・ウィザードのサイレント・インターフェースを開始します。すべてのオプションでデフォルト値が使用されます。進行状況表示バーが表示されます。インストールが完了すると、ランチパッドは WebSphere MQ V7.0.1 用のインストール・ウィザードのサイレント・インターフェースを開始します。すべてのオプションでデフォルト値が使用されます。進行状況を確認できるように、進行状況表示バーが表示されます。
- WebSphere Message Broker V7.0 (ブローカー・コンポーネント) を選択した場合は、ランチパッドはインストール・ウィザードのグラフィカル・インターフェースを開始します。インストール・ウィザードに必要な入力を行わなければなりません。

インストール・ウィザードは一連のウィンドウを表示するので、コンポーネントのインストール場所に関する選択を行うことができます。

また、表示されるソフトウェアのご使用条件を読んで受諾する必要があります。

ご使用条件には、WebSphere MQ バージョン 7.0.1 の使用も含まれています。この製品は、WebSphere Message Broker との併用のみライセンス交付されており、他の目的で使用することはできません。

ウィザードの終了時にコマンド・コンソールを開くかどうか尋ねられます。コマンドの起動に正しい環境を使用して初期化されているコンソール・ウィンドウを開くには、「はい」を選択します。コマンド・コンソールについては、インフォメーション・センターの『コマンド環境: Windows プラットフォーム』で説明されています。この時点でコマンドを入力しない場合は、「いいえ」を選択します。

- WebSphere Message Broker Toolkit を選択した場合は、ランチパッドはインストール・ウィザードのグラフィカル・インターフェースを開始します。

プロセスは Installation Manager によって制御されます。このコンピューターに Installation Manager がまだインストールされていない場合はインストールされます。Installation Manager について詳しくは、19 ページの『追加のソフトウェア要件』を参照してください。

インストール・ウィザードは一連のウィンドウを表示するので、コンポーネントのインストール場所、インストール先のパッケージ・グループ、およびインストールする言語サポートを選択できます。インストール・ウィザードに必要なすべての入力を行わなければなりません。表示されるソフトウェアのご使用条件も受諾しなければなりません。

インストール・ウィザードの完了時に WebSphere Message Broker Toolkit を起動する場合は、完了ウィンドウに表示されるインストール済み製品のリスト内で「**WebSphere Message Broker Toolkit**」を選択します。「終了」をクリックすると、ウィザードは終了し、ランチパッドに制御が戻り、WebSphere Message Broker Toolkit が開始されます。

- WebSphere Message Broker Explorer V7.0 を選択した場合は、ランチパッドはインストール・ウィザードのグラフィカル・インターフェースを開始します。インストール・ウィザードで必要な入力を行わなければなりません。

インストール・ウィザードは一連のウィンドウを表示するので、コンポーネントのインストール場所に関する選択を行うことができます。

また、表示されるソフトウェアのご使用条件を読んで受諾する必要があります。

ランチパッドでインストールが完了すると、各製品の状況が「**インストール済み**」に変わります。

選択したすべての製品がランチパッドでインストールされると、「インストール」ウィンドウに制御が戻ります。

8. リストされている各製品の状況を確認するには、「**最新表示**」をクリックします。
9. 「**ランチパッドの終了**」をクリックして、プログラムを終了します。

インストール中の問題解決

以下のアドバイスを、製品コンポーネントのインストール中に生じる可能性のある問題を解決するための最初のステップとして使用してください。

ランチパッドは、開始した各インストール・ウィザードからの戻りコードを待ちます。インストールが失敗したことが戻りコードに示される場合は、ランチパッドはエラーを報告し、失敗した製品に関する資料を参照できるようにします。ほとんどのインストール・ウィザードは、エラーの時点からロールバックし、失敗した試行の前の状態にシステムを戻すので、エラーの訂正後に再試行できます。

エラーの発生前にランチパッドが既に 1 つ以上の製品を正常にインストールしている場合は、これらのインストールはロールバックしません。ランチパッドを再始動すると、インストール済みの製品の状況は、以前の起動時の正常なインストールを反映します。

失敗が発生した場合は、エラーを訂正してランチパッドを再始動するか、「**最新表示**」をクリックして、失敗した製品の選択をクリアしなければなりません。

製品をインストールできない場合:

- インストール指示に対する最新の変更について、README ファイル `readme.html` を参照します。
- WebSphere Message Broker ランタイム・コンポーネントのインストールに失敗した場合は、ホーム・ディレクトリーに保管されているインストール・ログ・ファイル `mqs17_install.log` の内容を確認します。
- WebSphere Message Broker Toolkit のインストールに失敗した場合は、インストール・ログ・ファイル `YYYYMMDD_TIME.xml` の内容を確認します。YYYYMMDD_TIME はインストールの日時です。このログ・ファイルの場所は、121 ページの『インストールにおける問題点』で定義されています。

- WebSphere Message Broker Explorer のインストールに失敗した場合は、インストール・ログ・ファイル MBExplorer_install.log の内容を確認します。このログ・ファイルはインストール・ディレクトリーに保管されます。
- WebSphere MQ バージョン 7.0.1 のインストールに失敗した場合は、ホーム・ディレクトリーの temp ディレクトリーに保管されている MQV7_install.date_time.log の内容を確認します。
- 121 ページの『インストールにおける問題点』で説明されている問題のシナリオを検討し、与えられている指針に従ってください。

それでも問題を解決できない場合には、IBM サポートに連絡してください。

第 10 章 WebSphere Message Broker ブローカーのインストール

インストール・ウィザードを使用して、WebSphere Message Broker ブローカーをインストールします。

このトピックでは、サポートされているすべてのオペレーティング・システム上でブローカー・コンポーネントをインストールするために完了しなければならないタスクについて説明します。

Windows で WebSphere Message Broker をインストールする場合は、ランチパッドを使用してこのタスクを完了できます。詳しくは、73 ページの『第 9 章 Windows ランチパッドを使用したインストール』を参照してください。LaunchPad を使用しない場合は、代替の方法として、このトピックで説明する作業を完了してください。

以下のリストは、ブローカー・コンポーネントのインストール時の選択項目と、選択したタスクを完了するために取らなければならないアクションを示します。

1. これらのインストール指示に対する更新について、`readme.html` ファイルを調べてください。この `readme` ファイルの場所は、9 ページの『第 2 章 システム要件』で説明しています。
2. メモリーとディスク・スペースが十分あることを確認します。11 ページの『メモリーおよびディスク・スペースの要件』を参照してください。
3. まだ WebSphere MQ をインストールしていない場合は、ブローカー・コンポーネントをインストールする前にインストールします。ブローカー・コンポーネントをインストールした後に WebSphere MQ をインストールすることができませんが、インストール・ウィザードは、サポートされるレベルの WebSphere MQ かそれ以降がインストールされているかどうか検査します。グラフィカルまたはコンソール・インターフェースを使用しているときにこの検査が失敗した場合、インストール・ウィザードは潜在的な問題をリストする警告を表示します。続行することにした場合、何らかのブローカーを作成または開始する前に、WebSphere MQ のインストールを完了する必要があります。

インストール・サイレント・インターフェースを開始すると、WebSphere MQ の検査は失敗します。調整された応答ファイルを指定することによりデフォルトの動作を変更したのではない限り、ウィザードはそれ以上何のアクションも取らずに終了します。この検査を無視するように応答ファイルを変更した場合には、インストール・ウィザードは続行します。

4. サーバーからインストールするか、それとも各システム上でローカルにインストールするか決めます。これらの選択は、CD および DVD の両方について、さらにパスポート・アドバンテージ (ユーザーがその体系に登録されている場合) からダウンロードしたイメージについて、49 ページの『CD および DVD へのアクセス』で説明されています。このトピックの指示は、CD とダウンロード済みイメージとの間で違いはなく、動作は同じです。

5. グラフィカル・インストール、コンソール・インストール、サイレント・インストールのうちどれを使用するか決めます。これらのインターフェースについて詳しくは、59 ページの『ブローカーのインストールおよびアンインストールの方法』を参照してください。
6. グラフィカル・インストールを使用することに決めた場合は、この指示を続行します。コンソール・インストールを使用するには、83 ページの『コンソール・モードでの WebSphere Message Broker ブローカーのインストール』を参照してください。サイレント・インストールを使用するには、84 ページの『サイレント・モードでの WebSphere Message Broker ブローカーのインストール』を参照してください。
7. ご使用のオペレーティング・システム用のインストール・ウィザード名を判別します。68 ページの『インストール・ウィザード名』を参照してください。
8. インストール・ウィザードのグラフィカル・インターフェースを開始します。
 - a. ローカル・アクセスの場合、製品 CD または DVD をロードします。

Linux および UNIX

コマンド・プロンプトを開き、CD のルート・ディレクトリーにナビゲートします。オプションを付けずにインストール・ウィザード名を入力し、**Enter** を押します。

Windows

以下のアクションのいずれかを実行します。

- 自動実行が有効になっている場合、ランチパッドがすぐに開始されます。ランチパッドを使用するには、73 ページの『第 9 章 Windows ランチパッドを使用したインストール』を参照してください。ランチパッドを取り消すには、「ランチパッドの終了」をクリックします。
 - Windows エクスプローラで、CD または DVD のルート・ディレクトリーにナビゲートします。インストール・ウィザードを見つけ、ウィザードをダブルクリックして開始します。
 - コマンド・プロンプトを開き、CD または DVD のルート・ディレクトリーにナビゲートします。オプションを付けずにインストール・ウィザード名を入力し、**Enter** を押します。
- b. リモート・サーバーからインストールする場合には、リモート CD または DVD ドライブか、製品メディアが使用可能なネットワーク・ドライブにアクセスします。CD、DVD、またはネットワーク・ドライブでインストール・ウィザードを見つけ、上記の説明どおりにそれを開始します。

インストール・ウィザードはシステム・ロケール設定を検査します。そのロケール設定がサポートされる場合 (33 ページの『第 4 章 多文化サポート』にリストされています)、ウィザードはこのロケールで続行します。現行の設定がサポートされない場合には、ウィザードがダイアログ・ボックスを表示するので、サポートされる言語のリストから選択してください。この言語はインストールにのみ使用され、コンピューター上の他のプロセスには影響しません。

9. ウィザードが開始したら、ウィンドウをナビゲートし、要求されたときに入力データを指定します。また、ソフトウェアのご使用条件を読んで受諾する必要があります。

インストール用に指定したディレクトリーに以前のバージョンの WebSphere Message Broker (例えば、バージョン 6.1.0.4) が既にある場合、インストール・ウィザードはバージョン 7.0 をこの場所にはインストールしません。別の場所を指定する必要があります。それから、以前のバージョンからバージョン 7.0 へ、コンポーネントを適宜マイグレーションすることができます。

Linux および UNIX のみ

このインストーラーの終わりに、WebSphere Message Broker ODBC Database Extender (IE02) SupportPac のインストールを開始するかどうかを尋ねるパネルが表示されます。選択すると、IE02 SupportPac インストーラーが GUI モードで自動的に起動されます。詳しくは、WebSphere Message Broker ODBC Database Extender (IE02) SupportPac のインストール指示を参照してください。この指示は、WebSphere Message Broker インストール・イメージに含まれている IE02 ディレクトリー内にあります。

10. 要約ウィンドウが表示されたら、行った選択を確認し、「次へ」をクリックして、インストールを完了させます。進行状況を確認できるように、進行状況表示バーが表示されます。
11. WebSphere Message Broker ODBC Database Extender パッケージをインストールする場合は、インストール・プロセスの終わりにウィンドウが表示される時点で「はい」を選択します。詳細は、86 ページの『WebSphere Message Broker ODBC Database Extender のインストール (IE02)』を参照してください。
12. インストール中に問題が発生した場合は、88 ページの『WebSphere Message Broker ブローカーのインストール中の問題の処理』を参照してください。

インストールの完了後に、105 ページの『第 13 章 インストールの検証』、115 ページの『第 14 章 ブローカーの動作モードと機能レベルの確認』、およびインフォメーション・センターの『インストール後のスタート・メニューおよびメインメニューの更新』を参照してください。

コンソール・モードでの WebSphere Message Broker ブローカーのインストール

インストール・ウィザードをコンソール・モードで使用して、WebSphere Message Broker ブローカーをインストールします。

以下のリストは、コンソール・モードでのブローカー・コンポーネントのインストール時の選択項目と、選択したタスクを完了するために取らなければならないアクションを示します。

1. ご使用のオペレーティング・システム用のインストール・ウィザード名を判別します。68 ページの『インストール・ウィザード名』を参照してください。
2. ローカルまたはリモートの CD か DVD、あるいはネットワーク・ドライブのルート・ディレクトリーにあるインストール・ウィザードを見つけます。
3. HP-Itanium 上にインストールする場合は、PATH ステートメントに /usr/sbin/ が含まれていなければなりません。
4. デフォルトの起動の場合、以下のコマンドをコマンド・プロンプトに入力します。

`installer -console` (ここで `installer` はインストール・ウィザード名)。

ウィザードが存在するディレクトリー以外のディレクトリーからインストールを開始する場合、絶対パスまたは相対パスをコマンド名とともに組み込みます。

5. ウィザードが開始したら、ウィンドウをナビゲートし、要求されたときに入力データを指定します。また、ソフトウェアのご使用条件を読んで受諾する必要があります。

インストール用に指定したディレクトリーに以前のバージョンの WebSphere Message Broker (例えば、バージョン 6.1.0.4) が既にある場合、インストール・ウィザードはバージョン 7.0 をこの場所にはインストールしません。別の場所を指定する必要があります。それから、以前のバージョンからバージョン 7.0 へ、コンポーネントを適宜マイグレーションすることができます。

Linux および UNIX のみ

このインストーラーの終わりに、WebSphere Message Broker ODBC Database Extender (IE02) SupportPac のインストールを開始するかどうかを尋ねるパネルが表示されます。選択すると、IE02 SupportPac インストーラーがコンソール・モードで自動的に起動されます。詳細については、86 ページの『WebSphere Message Broker ODBC Database Extender のインストール (IE02)』を参照してください。

6. 要約ウィンドウが表示されたら、行った選択を確認し、1 を入力して、インストールを完了させます。
7. インストール中に問題が発生した場合は、88 ページの『WebSphere Message Broker ブローカーのインストール中の問題の処理』を参照してください。

インストールの完了後に、105 ページの『第 13 章 インストールの検証』、115 ページの『第 14 章 ブローカーの動作モードと機能レベルの確認』、およびインフォメーション・センターの『インストール後のスタート・メニューおよびメインメニューの更新』を参照してください。

サイレント・モードでの WebSphere Message Broker ブローカーのインストール

インストール・ウィザードをサイレント・モードで使用して、WebSphere Message Broker ブローカーをインストールします。

以下のリストは、サイレント・モードでのブローカー・コンポーネントのインストール時の選択項目と、選択したタスクを完了するために取らなければならないアクションを示します。

1. ご使用のオペレーティング・システム用のインストール・ウィザード名を判別します。68 ページの『インストール・ウィザード名』を参照してください。
2. ローカルまたはリモートの CD か DVD、あるいはネットワーク・ドライブのルート・ディレクトリーにあるインストール・ウィザードを見つけます。
3. HP-Itanium 上にインストールする場合は、PATH ステートメントに `/usr/sbin/` が含まれていなければなりません。
4. すべてデフォルトの設定による標準インストールの場合には、以下のコマンドをコマンド・プロンプトに入力します。

ウィザードが存在するディレクトリー以外のディレクトリーからインストールを開始する場合、絶対パスまたは相対パスをコマンド名とともに組み込みます。

Linux および UNIX

`installer -silent -G licenseAccepted=true` (ここで `installer` はインストール・ウィザード名)。

Windows

パラメーター `/w` を指定した `start` コマンド内でインストール・ウィザードを開始することにより、コマンド・プロンプトに戻る前にインストールが確実に完了するようにします。

```
start /w setup.exe -silent -G licenseAccepted=true
```

デフォルト以外の設定を指定する場合は、呼び出しに応答ファイルを組み込みます。バージョン 7.0.0.1 をカスタマイズされた場所にインストールする場合には、応答ファイルを指定する必要があります。応答ファイルの使用方法、応答ファイルの作成方法、およびそれを編集して要件を定義する方法については、63 ページの『ランタイム・コンポーネントでの応答ファイルの使用』を参照してください。

5. インストール・ウィザードはユーザーとの対話なしで完了します。

ウィザードが存在するディレクトリー以外のディレクトリーからインストールを開始する場合、絶対パスまたは相対パスをコマンド名とともに組み込みます。

Linux および UNIX のみ

注: サイレント・モードでインストールを実行している場合は、WebSphere Message Broker ODBC Database Extender (IE02) インストーラーを自動的に開始できません。詳細については、86 ページの『WebSphere Message Broker ODBC Database Extender のインストール (IE02)』を参照してください。

デフォルト以外の設定を指定する場合は、呼び出しに応答ファイルを組み込みます。バージョン 7.0.0.1 をカスタマイズされた場所にインストールする場合には、応答ファイルを指定する必要があります。応答ファイルの使用方法、応答ファイルの作成方法、およびそれを編集して要件を定義する方法については、63 ページの『ランタイム・コンポーネントでの応答ファイルの使用』を参照してください。

- 6.
7. インストール中に問題が発生した場合は、88 ページの『WebSphere Message Broker ブローカーのインストール中の問題の処理』を参照してください。

インストールの完了後に、105 ページの『第 13 章 インストールの検証』、115 ページの『第 14 章 ブローカーの動作モードと機能レベルの確認』、およびインフォメーション・センターの『インストール後のスタート・メニューおよびメインメニューの更新』を参照してください。

WebSphere Message Broker ODBC Database Extender のインストール (IE02)

WebSphere Message Broker ODBC Database Extender は、UNIX システム用の Open Database Connectivity インターフェースの実装である unixODBC ドライバー・マネージャーをカプセル化します。このトピックでは、そのインストール方法について説明します。

始める前に:

unixODBC Project および IBM solidDB® 製品ファミリー についての情報を参照してください。

WebSphere Message Broker バージョン 7.0.0.1 をインストールします。

WebSphere Message Broker ODBC Database Extender は、WebSphere Message Broker を使用して ODBC データ・ソース (DataDirect ODBC ドライバーではサポートされていない) とのインターフェースをとるために必要になります。

1. WebSphere Message Broker ODBC Database Extender をインストールするには、プラットフォームに対応するパッケージを任意のディレクトリーにダウンロードするか、または WebSphere Message Broker ODBC Database Extender を製品ディスクからインストールするオプションを選択します。

パッケージを外部的にダウンロードするには、WebSphere MQ SupportPacs Web ページ 上で WebSphere Message Broker を選択して、パッケージ・ファイルを見つけます。

すべてのプラットフォーム上で、パッケージ・ファイルの名前は ie02-install.bin です。

このパッケージは、WebSphere Message Broker のインストール時に使用したものと同一特権 (通常は root) を使用して実行する必要があります。

2. 以下のいずれかのモードで、インストーラーを実行します。
 - グラフィカル
 - コンソール
 - サイレント
 - a. 「**グラフィカル**」。パッケージ・ファイルをダウンロードしたディレクトリーから、次のコマンドを実行します。

```
./ie02-install.bin
```

インストーラーが別のウィンドウ内で起動して、インストール・プロセス全体を案内します。ただし、インストーラーがグラフィカル・モードで起動できない場合には、コンソール・モードで起動します。

- b. 「**コンソール**」。パッケージ・ファイルをダウンロードしたディレクトリーから、次のコマンドを実行します。

```
./ie02-install.bin -i console
```

コマンドを実行したコンソールと同じコンソールでインストーラーが起動し、インストール・プロセスの説明が表示されていきます。

- c. 「サイレント」。サイレント・インストールを指定するときは、インストーラーが提供するオプションに対する必要な応答を定義するための、応答ファイルが必要です。応答ファイルの例を以下に示します。

```
# This file was built by the Replay feature of InstallAnywhere.  
# It contains variables that were set by Panels, Consoles or Custom  
# Code.  
  
#Has the license been accepted  
#-----  
LICENSE_ACCEPTED=TRUE  
  
#Choose Install Folder  
#-----  
USER_INSTALL_DIR=/opt/ibm/IE02
```

上の例で、ライセンスを受け入れることが指定されている点に注目してください。このスクリプト例を使用すると、ライセンス条件を受諾することになります。

応答ファイルは、名前を `installer.properties` として、WebSphere Message Broker ODBC Database Extender インストーラーと同じディレクトリーに配置する必要があります。

WebSphere Message Broker ODBC Database Extender をダウンロードしたディレクトリーから、次のコマンドを実行します。 `./ie02-install.bin -i silent`

インストールが完了した後で、インストール・ログを検査します。これはインストールの際に指定されたインストール・パスの下にあります。ログのファイル名は、`WebSphere_Message_Broker_ODBC_Database_Extender_InstallLog.log` です。

以前の (同じインストール・ディレクトリー内にある) インストールの上にもインストールする場合は、以前のインストールがサイレントでアンインストールされてから、新しいバージョンがインストールされます。

次に、WebSphere Message Broker Database Extender を構成します。

WebSphere Message Broker ODBC Database Extender の構成 (IE02)

WebSphere Message Broker ODBC Database Extender は、UNIX システム用の Open Database Connectivity インターフェースの実装である `unixODBC` ドライバー・マネージャーをカプセル化します。このトピックでは、その構成方法について説明します。

始める前に:

WebSphere Message Broker ODBC Database Extender をインストールします。

WebSphere Message Broker が追加のデータベース・サポートを活用できるようにするには、SupportPac のインストール場所を知る必要があります。SupportPac の場所は、環境変数 `IE02_PATH` の値によって設定する必要があります。

この環境変数は、ディレクトリー /var/mqsi/common/profiles 内に配置される IE02.sh という名前のスクリプトの作成によって、SupportPac のインストールの際に WebSphere Message Broker プロファイル内に自動的に設定されます。ファイルの例を以下に示します。

```
#!/usr/bin/sh
# This file was created as part of the IBM WebSphere Message Broker ODBC
# Database Extender SupportPac (IE02) install
export IE02_PATH=/opt/ibm/IE02
chmod 755 /var/mqsi/common/profiles/IE02.sh
```

\$MQSI_WORKPATH の場所を変更して、そのために WebSphere Message Broker がプロファイルを読みながら追加のスクリプトを動的に実行する場所を変更する場合は、新しい {\$MQSI_WORKPATH}/common/profiles ディレクトリー内に、必要な内容を含む既存のファイルをコピーするかまたは新しいファイルを作成する必要があります。

WebSphere Message Broker ODBC Database Extender の lib ディレクトリーをライブラリー・パス (LD_LIBRARY_PATH またはそれと同等のもの) に入れないでください。それを入れた場合、WebSphere Message Broker ODBC Database Extender が WebSphere Message Broker によって正常にロードされなくなり、予測不能の結果が生じることがあります。

WebSphere Message Broker ブローカーのインストール中の問題の処理

WebSphere Message Broker ブローカー・コンポーネントのインストール中の問題を処理します。

インストール中に問題がある場合は、以下のようにします。

1. インストール指示に対する最新の変更について、README ファイル readme.html を参照します。
2. ホーム・ディレクトリーに保管されているインストール・ログ mqsi7_install.log の内容を確認します。このログ・ファイルの場所は、121 ページの『インストールにおける問題点』で定義されています。
3. 121 ページの『インストールにおける問題点』で説明されている問題のシナリオを検討し、与えられている指針に従ってください。
4. それでも問題を解決できない場合には、IBM サポートに連絡してください。

第 11 章 WebSphere Message Broker Toolkit のインストール

インストール・ウィザードを使用して、WebSphere Message Broker Toolkit をインストールします。

このトピックでは、x86 オペレーティング・システム上の Windows および Linux で WebSphere Message Broker Toolkit をインストールするために完了しなければならないタスクについて説明します。

Windows で WebSphere Message Broker Toolkit をインストールする場合は、LaunchPad を使用してこのタスクを完了できます。詳しくは、73 ページの『第 9 章 Windows ランチパッドを使用したインストール』を参照してください。LaunchPad を使用しない場合は、代替りの方法として、このトピックで説明する作業を完了してください。

以下のリストは、WebSphere Message Broker Toolkit のインストール時の選択項目と、選択したタスクを完了するために取らなければならないアクションを示します。

1. これらのインストール指示に対する更新について、`readme.html` ファイルを調べてください。この `readme` ファイルの場所は、9 ページの『第 2 章 システム要件』で説明しています。
2. メモリーとディスク・スペースが十分あることを確認します。11 ページの『メモリーおよびディスク・スペースの要件』を参照してください。
3. サーバーからインストールするか、それとも各システム上でローカルにインストールするか決めます。この選択については、49 ページの『CD および DVD へのアクセス』を参照してください。DVD についても、パスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージについても (その方式への登録が必要)、説明されています。ここに記載されている指示は、特に記されている場合を除いて、それら 3 つの選択すべてで同一です。
4. グラフィカル・インストールまたはサイレント・インストールのうちどれを使用するか決めます。これらのインターフェースについて詳しくは、65 ページの『WebSphere Message Broker Toolkit のインストールおよびアンインストールの方法』を参照してください。
5. グラフィカル・インストールを使用することに決めた場合は、この指示を続行します。サイレント・インストールを使用するには、93 ページの『サイレント・モードでの WebSphere Message Broker Toolkit のインストール』を参照してください。WebSphere Message Broker Toolkit のインストールは、Installation Manager によって制御されます。Installation Manager がまだコンピューターにインストールされていない場合、Installation Manager はそれ自体と WebSphere Message Broker Toolkit の両方をインストールします。
6. ご使用のオペレーティング・システム用のインストール・ウィザード名を判別します。68 ページの『インストール・ウィザード名』を参照してください。
7. インストール・ウィザードのグラフィカル・インターフェースを開始します。
 - a. ローカル・アクセスの場合、製品 DVD をロードします。

Linux(x86)

コマンド・プロンプトを開き、DVD の
/Message_Broker_Toolkit_V7/disk1/IBMInstallationManager ディ
レクトリーにナビゲートします。オプションを付けずにインストー
ル・ウィザード名を入力し、**Enter** を押します。

Windows

以下のアクションのいずれかを実行します。

- 自動実行が有効になっている場合、ランチパッドがすぐに開始され
れます。ランチパッドを使用するには、73 ページの『第 9 章
Windows ランチパッドを使用したインストール』を参照してくだ
さい。ランチパッドを取り消すには、「ランチパッドの終了」を
クリックします。
 - Windows エクスプローラーで、DVD の
/Message_Broker_Toolkit_V7/disk1/IBMInstallationManager デ
ィレクトリーにナビゲートします。インストール・ウィザードを
見つけ、ウィザードをダブルクリックして開始します。
 - コマンド・プロンプトを開き、DVD の
/Message_Broker_Toolkit_V7/disk1/IBMInstallationManager デ
ィレクトリーにナビゲートします。オプションを付けずにインス
トール・ウィザード名を入力し、**Enter** を押します。
- b. ローカルにダウンロードされたイメージから、またはメディアのコピーから
インストールする場合には、その場所にナビゲートし、インストール・ウィ
ザードを見つけて、上記のとおりそれを開始します。
- c. リモート・サーバーからインストールする場合には、リモートの DVD ドラ
イブ、あるいは製品イメージが使用可能なネットワーク・ドライブにアクセ
スします。DVD またはネットワーク・ドライブ上で必要とするインストー
ル・ウィザードを見つけて、上記の説明どおりそれを開始します。
- d. 望むなら、バッチ・ファイル installToolkit.sh (Linux 上) または
installToolkit.bat (Windows 上) を実行してインストール・ウィザード・
グラフィカル・インターフェースを開始することもできます。それらのファ
イルは、DVD の /Message_Broker_Toolkit_V7/disk1 ディレクトリーにあ
ります。

インストール・ウィザードはシステム・ロケール設定を検査します。そのロケ
ール設定がサポートされる場合 (33 ページの『第 4 章 多文化サポート』にリ
ストされています)、ウィザードはこのロケールで続行します。現行の設定がサ
ポートされない場合には、ウィザードは米国英語で続行します。この言語はイ
ンストールにのみ使用され、コンピューター上の他のプロセスには影響しませ
ん。Installation Manager が開始され、「パッケージのインストール」ウィンド
ウが開きます。

8. インストール・ウィザードは Installation Manager と WebSphere Message
Broker Toolkit の両方をインストールするように事前構成されているので、
WebSphere Message Broker Toolkit パッケージはこのウィンドウで既に選択さ
れています。Installation Manager がこのコンピューター上にインストールされ
ていない場合は、そのパッケージも選択されます。Installation Manager の選択

をクリアすることはできません。「次へ」をクリックして先に進みます。「ソフトウェア・ライセンス契約」ウィンドウが開きます。

9. ご使用条件を読み、「使用条件の条項に同意します」を選択して「次へ」をクリックします。

ライセンスに同意しない場合には、インストール・ウィザードが終了します。このコンピューター上に Installation Manager をインストールしていないか、または Installation Manager をインストールしたものの Installation Manager によって管理される製品をまだ何もインストールしていない場合には、「共有ディレクトリー」ウィンドウが開きます。10 のステップから続行してください。そうでない場合は、共有リソース・ディレクトリーが既に定義されているので、「パッケージ・グループ・ディレクトリー」ウィンドウが開きます。ステップ 11 から作業を続けてください。

10. Installation Manager で管理するすべての製品で使用する共有リソース・ディレクトリーの位置を指定します。デフォルトの場所が表示されます。

- Linux (x86): /opt/IBM/SDP70Shared/
- Windows: C:\Program Files\IBM\SDP70Shared\ (32 ビット版の場合)

C:\Program Files(x86)\IBM\SDP70Shared\v.r (64 ビット版の場合)

別の場所を指定する場合には、デフォルト・ロケーションを上書きするか、または「参照」をクリックします。

共有リソース・ディレクトリーには、WebSphere Message Broker Toolkit の別のインストールや、他のファイルまたは製品が入ってはいけません。このフィールドには新規ディレクトリーを指定する必要があります。

Installation Manager がまだインストールされていない場合には、そのインストール・ディレクトリーも指定する必要があります。デフォルトの場所が表示されます。

- Linux (x86): /opt/IBM/InstallationManager/
- Windows: C:\Program Files\IBM\InstallationManager\ (32 ビット版の場合)

C:\Program Files(x86)\IBM\InstallationManager\ (64 ビット版の場合)

別の場所を指定する場合には、デフォルト・ロケーションを上書きするか、または「参照」をクリックします。

「次へ」をクリックします。「パッケージ・グループ・ディレクトリー」ウィンドウが開きます。

11. 米国英語以外のロケールで WebSphere Message Broker Toolkit を使用したい場合には、提示されたリストから追加のサポートを選択します。英語は常に選択され、インストールされます。この選択をクリアすることはできません。1 つ以上の代替ロケールを選択すると、サポートされるすべての言語の資料およびプロパティー・ファイルがインストールされます。「次へ」をクリックして先に進みます。「要約」ウィンドウがオープンします。
12. 自分の選択を確認し、前のウィンドウのいずれかで自分の応答にさらに変更を加えたい場合は「戻る」をクリックします。このウィンドウは、まもなくイン

ストールするパッケージに必要なスペースについてのガイダンス情報を表示し、ディスクに十分なスペースがあることを示します。

「次へ」をクリックしてインストールを開始してください。「インストール進行状況」ウィンドウが開きます。

13. インストール中のフィーチャー、それらに関連するディレクトリー、および選択したロケールが、通知用に表示されます。インストールの状況を確認できるように、進行状況表示バーが表示されます。インストールが完了すると、「完了」ウィンドウが開きます。
14. ウィザードは成功か失敗かの標識を表示し、インストールした製品とオプションをリストします。「ログ・ファイルの表示」をクリックして、インストールの結果を確認します。

Windows 上でのみ、「終了」をクリックしてウィザードを閉じる際に、WebSphere Message Broker Toolkit が起動されるよう、指示することができます。このオプションは Linux (x86) では使用できません。root 権限を持たない別のユーザー ID でログオンしている間に検証を完了させたい場合があるからです。

15. インストール中に問題が発生した場合は、93 ページの『WebSphere Message Broker Toolkit のインストール中の問題の処理』を参照してください。

インストールの完了後に、105 ページの『第 13 章 インストールの検証』、115 ページの『第 14 章 ブローカーの動作モードと機能レベルの確認』、およびインフォメーション・センターの『インストール後のスタート・メニューおよびメインメニューの更新』を参照してください。

この時点でオプションのロケールをインストールしない場合、以下の方法で、それらを後でインストールすることができます。

- Linux (x86) 上では、Installation Manager インストール・ディレクトリー内の /eclipse ディレクトリーにナビゲートし、Installation Manager プログラム IBMIM を開始します。

(root として既にログオンしているのでなければ、メインメニュー・エントリーを使用することはできません。メニュー項目は root になるためのオプションを提供しておらず、root 権限はすべてのインストール作業に必要です。)

- Windows では、「スタート」 → 「プログラム」 → 「IBM Installation Manager」 → 「IBM Installation Manager」をクリックして Installation Manager を起動し、「パッケージの変更」をクリックして、インストールを変更します。

コマンド行を使用することにした場合には、Installation Manager インストール・ディレクトリー内の %eclipse ディレクトリーにナビゲートし、Installation Manager プログラム IBMIM.exe を開始します。

サイレント・モードでの WebSphere Message Broker Toolkit のインストール

インストール・ウィザードをサイレント・モードで使用して、WebSphere Message Broker Toolkit をインストールします。

サイレント・インストールを実行するには、以下のようにします。

1. ご使用のオペレーティング・システム用のインストール・ウィザード名を判別します。 68 ページの『インストール・ウィザード名』を参照してください。
2. ローカルまたはリモートの DVD、あるいはネットワーク・ドライブの /Message_Broker_Toolkit_V7/disk1/IBMInstallationManager ディレクトリーにあるインストール・ウィザードを見つけます。
3. すべてデフォルトの設定によるインストールの場合には、以下のコマンドをコマンド・プロンプトに入力します。

Linux(x86)

```
./install -nosplash --launcher.suppressErrors -input  
mbtoolkit-silent.xml -silent
```

ここで mbtoolkit-silent.xml は、インストール用のすべてのデフォルト設定を含む応答ファイルの名前です。

Windows

```
install.exe -nosplash --launcher.suppressErrors -input  
mbtoolkit-silent.xml -silent
```

ここで mbtoolkit-silent.xml は、インストール用のすべてのデフォルト設定を含む応答ファイルの名前です。

デフォルト以外の設定を指定する場合は、呼び出しにさまざまな応答ファイルを組み込みます。異なる応答ファイルを作成する場合は、-record オプションを指定して、グラフィカル・インターフェースの使用による最初のインストールを実行してください。インストール・ウィザードは、ユーザーが選んだすべての選択を組み込む応答ファイルを記録します。応答ファイルの記録および使用方法の詳細は、66 ページの『WebSphere Message Broker Toolkit での応答ファイルの使用』を参照してください。

4. インストール・ウィザードはユーザーとの対話なしで完了します。インストール・プロセスの成否について、ログを確認してください。
5. インストール中に問題が発生した場合は、『WebSphere Message Broker Toolkit のインストール中の問題の処理』を参照してください。

インストールの完了後に、105 ページの『第 13 章 インストールの検証』、115 ページの『第 14 章 ブローカーの動作モードと機能レベルの確認』、およびインフォメーション・センターの『インストール後のスタート・メニューおよびメインメニューの更新』を参照してください。

WebSphere Message Broker Toolkit のインストール中の問題の処理

WebSphere Message Broker Toolkit のインストール中の問題を処理します。

インストール中に問題がある場合は、以下のようにします。

1. インストール指示に対する最新の変更について、README ファイル `readme.html` を参照します。
2. インストール・ログ・ファイル `YYYYMMDD_TIME.xml` の内容を確認します。
`YYYYMMDD_TIME` はインストールの日時です。このログ・ファイルの場所は、121 ページの『インストールにおける問題点』で定義されています。
3. 121 ページの『インストールにおける問題点』で説明されている問題のシナリオを検討し、与えられている指針に従ってください。
4. それでも問題を解決できない場合には、IBM サポートに連絡してください。

第 12 章 WebSphere Message Broker Explorer のインストール

完全な WebSphere Message Broker Toolkit をインストールする代わりに WebSphere Message Broker Explorer を使用する場合は、WebSphere Message Broker Explorer インストール・ウィザードを使用して WebSphere Message Broker Explorer をインストールします。

WebSphere Message Broker Explorer を Windows または Linux にインストールする場合、以下のタスクを完了してください。完全な WebSphere Message Broker Toolkit をインストールする場合は、89 ページの『第 11 章 WebSphere Message Broker Toolkit のインストール』を参照してください。

1 つのシステムにインストールできる WebSphere MQ Explorer のバージョンは 1 つだけなので、一度にアクティブにできる WebSphere Message Broker Explorer のバージョンも 1 つに限られます。

WebSphere MQ Explorer が既にインストールされている状態で新しいバージョンの WebSphere Message Broker Explorer をインストールすることにした場合は、既存のバージョンをアップグレードする必要があります。

既存のバージョンをアップグレードするには、以下のステップを完了します。

1. WebSphere Message Broker Explorer をアンインストールします。WebSphere Message Broker Explorer をアンインストールできるのは、管理ユーザー (Linux の root や Windows の Administrator など) に限られます。
2. 以前のインストール・ディレクトリーにファイルが存在しないことを確認します。
3. WebSphere Message Broker Explorer をインストールします。

既存のバージョンの WebSphere Message Broker Explorer からアップグレードする場合は、新しいバージョンの WebSphere Message Broker Explorer をインストールした後に、以下の手順を実行する必要があります。

1. 新しいバージョンの WebSphere Message Broker Explorer を初期化するには、以下のコマンドを実行します。

```
strmqcfg -i
```

このコマンドを実行するには、管理ユーザー (Linux の root や Windows の Administrator など) でなければなりません。

2. Windows の WebSphere Message Broker Explorer ショートカットを使用するか、以下のコマンドを実行して、WebSphere Message Broker Explorer を始動します。

```
strmqcfg -c -d
```

Windows Windows の場合: 「プログラムの追加と削除」パネルの参照先は、新しいインストール場所になります。古いバージョンを除去するには、ファイル・システム上で古い場所にナビゲートし、そこにあるアンインストーラーを実行してください。

Windows Windows で WebSphere Message Broker Explorer をインストールする場合は、Launchpad を使用してこのタスクを完了できます。Launchpad を使用しない場合は、代替りの方法として、このトピックで説明する作業を完了してください。

アクセシビリティ上の理由で、WebSphere Message Broker Explorer のインストール・ウィザードと Java 互換スクリーン・リーダーを併用する場合は、98 ページの『ウィザードとスクリーン・リーダーを併用した WebSphere Message Broker Explorer のインストール』を参照してください。

Linux Linux システムで WebSphere Message Broker Explorer をインストールするには、インストールおよびデータ (構成) ディレクトリー用に使用する場所への書き込みアクセス権がなければなりません。デフォルトのインストール・ディレクトリー以外の、ホーム・ディレクトリー内のインストール・ディレクトリーを使用する場合は、パスの接頭部として波形記号 (~) を使用しないでください。ディレクトリー・パス名を完全に指定します。波形記号を使用すると InstallAnywhere エラーが発生します。このエラーが発生すると、製品がインストールされず、インストール・プロセスを再度行う必要があります。デフォルトのインストール場所へのルート・アクセス権がない場合は、指定の場所にインストールできます。

インストール・プロセス中に問題が発生した場合は、インストール・ログ MBExplorer_install.log を表示できます。このインストール・ログは、C:%Program Files%IBM%MBExplorer%MBExplorer_install.log などのインストール・ディレクトリー内に作成されます。

注: インストール・ウィザードを完了し、「完了」をクリックしてウィザードを終了するまで、インストール・ログは作成されません。

IS02: WebSphere Message Broker Explorer プラグイン SupportPac を以前にインストールした場合は、以下のステップを完了した後に WebSphere Message Broker Explorer をインストールしなければなりません。

1. IS02 SupportPac の抽出先の場所を移動するか削除します。
2. links ディレクトリーにコピーした、BrokerExplorer.link ファイルを削除します。Windows の場合、ディレクトリー名は C:%Program Files%IBM%WebSphere MQ%eclipseSDK33%eclipse%links% です。Linux の場合、ディレクトリー名は /opt/mqm/eclipseSDK33/eclipse/links です。
3. WebSphere Message Broker Explorer の Windows ショートカットを使用するか、次のコマンドを実行して、WebSphere Message Broker Explorer を開始します。

```
strmqcfg -c -d
```
4. オプション: WebSphere Message Broker Explorer の新規インストールを希望する場合は、以下のいずれかのステップを完了します。
 - WebSphere Message Broker Explorer metadata ディレクトリーを移動するか削除します。Windows ではディレクトリー名は C:%Documents and

Settings¥<user>¥Application Data¥IBM¥MQ Explorer¥.metadata で、Linux ではディレクトリー名は /home/user/.mqdata/.metadata です。

- あるいは、Eclipse ワークスペースを切り替えます。

metadata ディレクトリーの移動または削除を行うか、Eclipse ワークスペースを切り替えると、WebSphere Message Broker Explorer が初期の始動状態にリセットされます。リセット後、リモート・キュー・マネージャーに再接続しなければなりません。ローカル・キュー・マネージャーは自動的に検出されます。

以下のリストは、WebSphere Message Broker Explorer のインストール時の選択項目と、選択したタスクを完了するために取らなければならないアクションを示します。

1. これらのインストール指示に対する更新について、readme.html をチェックします。この readme ファイルの場所は、9 ページの『第 2 章 システム要件』で説明しています。
2. メモリーとディスク・スペースが十分あることを確認します。11 ページの『メモリーおよびディスク・スペースの要件』を参照してください。
3. まだ WebSphere MQ をインストールしていない場合は、WebSphere Message Broker Explorer をインストールする前にインストールします。
4. サーバーからインストールするか、それとも各システム上でローカルにインストールするか決めます。これらの選択は、CD および DVD の両方について、さらにパスポート・アドバンテージ (ユーザーがその体系に登録されている場合) からダウンロードしたイメージについて、49 ページの『CD および DVD へのアクセス』で説明されています。このトピックの指示は、CD とダウンロード済みイメージとの間で違いはなく、動作は同じです。
5. グラフィカル・インストール、コンソール・インストール、サイレント・インストールのうちどれを使用するか決めます。
 - グラフィカル・インストールを使用する場合は、以下の手順で操作を続けます。
 - インストール・ウィザードとスクリーン・リーダーを併用するには、98 ページの『ウィザードとスクリーン・リーダーを併用した WebSphere Message Broker Explorer のインストール』を参照してください。
 - **Windows** Windows 上でコンソール・インストールを使用するには、99 ページの『Windows におけるコンソール・モードでの WebSphere Message Broker Explorer のインストール』を参照してください。
 - **Linux** Linux 上でコンソール・インストールを使用するには、100 ページの『Linux におけるコンソール・モードでの WebSphere Message Broker Explorer のインストール』を参照してください。
 - サイレント・インストールを使用するには、101 ページの『サイレント・モードでの WebSphere Message Broker Explorer のインストール』を参照してください。
6. 実行可能ファイルかバイナリー・ファイルを使用して、インストール・ウィザードを起動します。このファイルは、Windows では install.exe で、Linux プラットフォームでは install.bin です。このファイルは CD の ¥MExplorer ディレクトリーにあります。

7. ウィザードが起動したら、以下の各パネルで作業して、インストール・プロセスを続行します。インストール・ウィザード自体に、選択したパネルに関するヘルプ情報が含まれています。
8. インストール・プロセスに使用する言語を選択します。「OK」をクリックします。
9. 「概要」パネルで、「次へ」をクリックします。
10. ソフトウェアのご使用条件を読み、ライセンスの条件を受諾するオプションを選択します。「次へ」をクリックします。
11. WebSphere Message Broker Explorer の製品インストール・ディレクトリーを入力 (または参照) するか、デフォルトの場所を受け入れます。Windows で、WebSphere Message Broker Explorer のデフォルトのインストール・ディレクトリーは C:\Program Files\IBM\MBExplorer です。Linux で、WebSphere Message Broker Explorer のデフォルトのインストール・ディレクトリーは /opt/IBM/MBExplorer です。

以前に WebSphere Message Broker Explorer をインストールしたために、製品インストール・ディレクトリーが存在している場合は、既存のインストールの「リフレッシュ」か、新しい製品ディレクトリーの「選択」を選択できます。
12. 「次へ」をクリックします。
13. 要約パネルを読みます。「前へ」をクリックして、前のパネルに戻って変更できます。
14. 「インストール」をクリックして、ファイルがインストールされている間待ちます。
15. インストール完了パネルで、「完了」をクリックします。

これで、『WebSphere Message Broker Explorer』を使用することができます。WebSphere Message Broker Explorer を開始するには、以下のようになります。

- Windows の場合:

「スタート」 → 「すべてのプログラム」 → 「IBM WebSphere Message Broker 7.0」 → 「IBM WebSphere Message Broker Explorer」をクリックします。

- Linux の場合:

コマンド行で strmqcfg コマンドを入力するか、または /usr/bin/strmqcfg を実行して、WebSphere Message Broker Explorer を開始します。

インストールの完了後に、105 ページの『第 13 章 インストールの検証』を参照してください。

ウィザードとスクリーン・リーダーを併用した WebSphere Message Broker Explorer のインストール

WebSphere Message Broker Explorer インストール・ウィザードでは、アクセシビリティ上の理由でスクリーン・リーダー・ソフトウェアを使用できるようにするインストール・ウィザードを起動することもできます。

インストール・ウィザードとスクリーン・リーダー・ソフトウェアを併用する場合は、以下のステップを使用してください。

1. スクリーン・リーダー・プログラムをインストールします。
2. インストール・ウィザードをコンソール・モードで使用して、WebSphere Message Broker Explorer をインストールします。詳しくは、『Windows におけるコンソール・モードでの WebSphere Message Broker Explorer のインストール』または 100 ページの『Linux におけるコンソール・モードでの WebSphere Message Broker Explorer のインストール』を参照してください。

Windows におけるコンソール・モードでの WebSphere Message Broker Explorer のインストール

Windows および Linux 上で、コンソール・モードでインストール・ウィザードを使用して WebSphere Message Broker Explorer をインストールできます。

以下のステップを実行して、Windows 上でコンソール・モードを使用して WebSphere Message Broker Explorer をインストールします。インストール・プロセス中に問題が発生した場合は、インストール・ログ MBExplorer_install.log を表示できます。

1. コンソール・インストールを実行するには、コマンド行に以下のコマンドを入力します。

```
<dvd_rom>/MBExplorer/install.exe -i console
```
2. 言語の隣に数値を入力して **Enter** キーを押し、インストール・プロセスに使用する言語を選択します。インストーラーでは「言語」ではなく「ロケール」という用語を使用します。あるいは、**Enter** キーを押してデフォルトの言語を受け入れます。
3. インストール場所が正しいことを確認し、**Enter** キーを押して続行します。
4. ソフトウェアのご使用条件を読み、1 と入力してライセンスの条件を受諾します。**Enter** を押します。
5. WebSphere Message Broker Explorer の製品インストール・ディレクトリーの名前を入力して、**Enter** キーを押します。あるいは、**Enter** キーを押してデフォルトの場所を受け入れます。Windows 上の WebSphere Message Broker Explorer のデフォルトのインストール・ディレクトリーは C:\Program Files\IBM\MBExplorer です。
6. プリインストールの要約情報を読み、**Enter** キーを押して、WebSphere Message Broker Explorer をインストールします。ファイルがインストールされている間待ちます。
7. 「インストールの完了」パネルで、**Enter** キーを押してコンソール・インストーラーを終了します。

これで、『WebSphere Message Broker Explorer』を使用することができます。

WebSphere Message Broker Explorer を使用するには、WebSphere MQ Explorer を開始しなければなりません。「スタート」 → 「すべてのプログラム」 → 「IBM WebSphere MQ」 → 「WebSphere MQ Explorer」をクリックするか、コマンド行で strmqcfig コマンドを入力して、WebSphere MQ Explorer を開始します。

インストールの完了後に、105 ページの『第 13 章 インストールの検証』を参照してください。

Linux におけるコンソール・モードでの WebSphere Message Broker Explorer のインストール

Windows および Linux 上で、コンソール・モードでインストール・ウィザードを使用して WebSphere Message Broker Explorer をインストールできます。

以下のステップを実行して、Linux 上でコンソール・モードを使用して WebSphere Message Broker Explorer をインストールします。インストール・プロセス中に問題が発生した場合は、インストール・ログ MBExplorer_install.log を表示できます。

1. コンソール・インストールを実行するには、コマンド行に以下のコマンドを入力します。

```
<cd_rom>/MBExplorer/install.bin -i console
```
2. 言語の隣に数値を入力して **Enter** キーを押し、インストール・プロセスに使用する言語を選択します。インストーラーでは「言語」ではなく「ロケール」という用語を使用します。あるいは、**Enter** キーを押してデフォルトの言語を受け入れます。
3. ソフトウェアのご使用条件を読み、1 と入力してライセンスの条件を受諾します。**Enter** を押します。
4. WebSphere Message Broker Explorer の製品インストール・ディレクトリーの名前を入力して、**Enter** キーを押します。あるいは、**Enter** キーを押してデフォルトの場所を受け入れます。Linux システム上の WebSphere Message Broker Explorer のデフォルトのインストール・ディレクトリーは /opt/IBM/MBExplorer です。以前に WebSphere Message Broker Explorer をインストールしたために、製品インストール・ディレクトリーが既存の場合は、既存のインストールをリフレッシュするか、新しい製品ディレクトリーを選択できます。
5. インストール場所が正しいことを確認し、**Enter** キーを押して続行します。
6. プリインストールの要約情報を読み、**Enter** キーを押して、WebSphere Message Broker Explorer をインストールします。ファイルがインストールされている間待ちます。
7. 「インストールの完了」パネルで、**Enter** キーを押してコンソール・インストーラーを終了します。

これで、『WebSphere Message Broker Explorer』を使用することができます。WebSphere Message Broker Explorer を使用するには、WebSphere MQ Explorer を開始しなければなりません。コマンド行で strmqcfg コマンドを入力するか、または /usr/bin/strmqcfg を実行して、WebSphere MQ Explorer を開始します。

インストールの完了後に、105 ページの『第 13 章 インストールの検証』を参照してください。

サイレント・モードでの WebSphere Message Broker Explorer のインストール

インストール・ウィザードをサイレント・モードで使用して、WebSphere Message Broker Explorer をインストールすることができます。

サイレント・モードでインストール・ウィザードを実行するには、その前にインストール・オプションを含む応答ファイルを作成する必要があります。グラフィカル・インストール・ウィザードを使用してインストール中に応答ファイルを作成することもできれば、インストール・メディアのルート・ディレクトリーの `samples-scripts` ディレクトリーに用意されているサンプル応答ファイルを使用することもできます。サイレント・インストールするには、インストール・コマンドに対する引数として応答ファイルへのパスを指定します。

以下のステップを使用して、応答ファイルを作成してサイレント・モードでインストール・ウィザードを実行します。

1. 以下のようにして、グラフィカル・インストール・ウィザードを使用するか、手動で応答ファイルを編集して、応答ファイルを作成します。
 - グラフィカル・インストール・ウィザードを使用してインストール中に応答ファイルを作成します。応答ファイルの絶対パスを提供しなければなりません。提供しないと、インストール・ウィザードによって応答ファイルが作成されません。

コマンド・プロンプトに以下のコマンドを入力します。

- Windows の場合:

```
install.exe -r <filepath>
```

- Linux の場合:

```
install.bin -r <filepath>
```

このコマンドは、GUI インストールを通常どおりに開始します。ただし、応答もすべて記録し、`c:%temp%\mbx-response.properties` などの指定したファイル内に保存します。その後、WebSphere Message Broker Explorer の後続のインストールにこの応答ファイルとサイレント・インストーラーを併用できます。

- ローカルまたはリモートの CD/DVD またはネットワーク・ドライブのルート・ディレクトリーの `samples-scripts` ディレクトリーに用意されているテンプレートを使用することもできます。あるいは、以下のテンプレートを使用して手動で応答ファイルを作成します。

```
# Thu Jul 09 16:44:28 BST 2009
# Replay feature output
# -----
# This file was built by the Replay feature of InstallAnywhere.
# It contains variables that were set by Panels, Consoles or Custom Code.

#Has the license been accepted
#-----
LICENSE_ACCEPTED=TRUE

#Choose Install Folder
#-----
USER_INSTALL_DIR=C:\Program Files\IBM\MBExplorer
```

2. 応答ファイルを使用してサイレント・モードでインストール・ウィザードを実行するには、以下のコマンドを使用します。

- Windows の場合:

```
install.exe -i silent -f <filename>
```

- Linux の場合:

```
install.bin -i silent -f <filename>
```

<filename> は、d:\messagebroker_runtime1\sample-scripts\mbx-response.properties などの、応答ファイルへのパスです。

これで、『WebSphere Message Broker Explorer』を使用することができます。WebSphere Message Broker Explorer を使用するには、WebSphere MQ Explorer を開始しなければなりません。

- Windows の場合:

「スタート」 → 「すべてのプログラム」 → 「IBM WebSphere MQ」 → 「WebSphere MQ Explorer」をクリックするか、コマンド行で strmqcfcg コマンドを入力して、WebSphere MQ Explorer を開始します。

- Linux の場合:

コマンド行で strmqcfcg コマンドを入力するか、または /usr/bin/strmqcfcg を実行して、WebSphere MQ Explorer を開始します。

インストールの完了後に、105 ページの『第 13 章 インストールの検証』を参照してください。

第 4 部 インストール後

本書のこの部分では、WebSphere Message Broker のインストール後に行うべきことについて説明します。

インストールの検証

Linux(x86)、Linux(x86-64)、または Windows コンピューターでは、WebSphere Message Broker Toolkit または WebSphere Message Broker Explorer の起動時に使用可能になるウィザードおよびサンプル・プログラムを使用して、インストールを検証することができます。サンプルを利用するには、すべての WebSphere Message Broker コンポーネントが同じコンピューター上にインストールされている必要があります。105 ページの『第 13 章 インストールの検証』に説明されている手順に従ってください。

他のすべてのプラットフォームでは、コマンドを使用してブローカーを作成、開始、停止、削除することにより、インストールを検証できます。

製品についての解説

WebSphere Message Broker Toolkit または WebSphere Message Broker Explorer を Linux(x86)、Linux(x86-64)、または Windows にインストールした後、WebSphere Message Broker インフォメーション・センターにアクセスできます。インフォメーション・センターは、Linux(x86)、Linux(x86-64)、および Windows では WebSphere Message Broker Toolkit および WebSphere Message Broker Explorer の標準装備としてインストールされます。インフォメーション・センターと「ようこそ」ページのリソースを調べることにより、この製品とその使用方法について学習できます。

ドメイン構成およびリソースの開発と単体テスト

WebSphere Message Broker のライセンスを購入した後、組織内のすべての開発者は、全コンポーネントの 1 つのコピーを自分のテスト・コンピューターにインストールして、コンポーネントやビジネス・リソースを開発および単体テストすることができます。このオプションは、Linux(x86)、Linux(x86-64)、または Windows を実行しているコンピューターでのみ使用可能です。単体テストを完了するには WebSphere Message Broker Toolkit をインストールする必要があるからです。さらに、WebSphere Message Broker と共に使用する目的でのみ、付属の WebSphere MQ 製品をご使用のテスト・コンピューターにインストールすることもできます。

ブローカー動作モードおよび機能レベルの検査

インストール、検査、およびテストが完了した後、ブローカーの動作モードを変更しなければなりません。詳しくは、115 ページの『第 14 章 ブローカーの動作モードと機能レベルの確認』を参照してください。

z/OS にランタイム・コンポーネントをインストールするには、「*Program Directory for WebSphere Message Broker for z/OS*」に説明されている手順に従ってください。

第 13 章 インストールの検証

このセクションの指示を使用して、WebSphere Message Broker のインストールを検証します。

このセクションでは、Linux(x86)、Linux(x86-64)、または Windows 上で、WebSphere Message Broker Toolkit または WebSphere Message Broker Explorer のいずれかを使用してインストールを検証する方法について説明します。

- 『WebSphere Message Broker Toolkit を使用したインストールの検査』
- 111 ページの 『WebSphere Message Broker Explorer を使用したインストールの検査』

検証後に、すべてのコンポーネントで、追加の開発と単体テストの実行を続けることができます。開発環境とテスト環境は、各コンポーネントの 1 つのコピーがインストールされている Linux(x86)、Linux(x86-64)、および Windows の各コンピューターに制限されます。テスト・コンピューター上に追加のコンポーネントとリソースを作成して、この製品によってビジネス要件を満たす方法を調べることができます。

WebSphere Message Broker Remote Adapter Deployment または Starter Edition を購入した場合は、この章の手順を完了した後でブローカーの動作モードを変更しなければなりません (テスト環境を実行している場合を除く)。全製品パッケージからブローカー・コンポーネントをインストールする際には、ブローカーの動作モードは常にデフォルトの `enterprise` に設定されます。この章で作成したデフォルトのブローカーを保持して使用したい場合は、ライセンスの条件に準拠するようにモードを変更する必要があります。このタスクの詳細については、115 ページの 『第 14 章 ブローカーの動作モードと機能レベルの確認』 を参照してください。

WebSphere Message Broker Toolkit を使用したインストールの検査

このチュートリアル of 指示を使用して、WebSphere Message Broker のインストールを検査し、WebSphere Message Broker Toolkit でサンプルを実行する方法を学びます。

このチュートリアルを実行するには、WebSphere Message Broker Toolkit をインストールしておくことが必要です。

WebSphere Message Broker Toolkit を使用してインストールを検査するには、以下の作業を実行してください。

- デフォルト構成を作成する
- Pager サンプルを実行する
- (オプション) サンプル準備ウィザードを開始する
- サンプルを除去する

サンプル・プログラムを実行できるようにするには、その前にデフォルト構成ウィザードを使用して、サンプルが使用する固定名とプロパティを持つブローカーを作成する必要があります。

デフォルト構成ウィザードでは、以下の条件が満たされている必要があります。

- ブローカーと WebSphere Message Broker Toolkit がインストールされている。
- デフォルト・コンポーネントがない (コンポーネントは、このセクションで後述されている表にリストされています)。
- この構成が、テストと評価の目的に限り必要である。
- 現行のユーザー ID が、以下の特性を持っている (Windows のみ)。
 - グループ mqbrkrs および mqm のメンバーである。
 - Administrator 権限がある。
 - ドメイン ID ではなくローカル ID である。

セキュリティ要件の詳細については、インフォメーション・センターの『ブローカーのセキュリティのセットアップ』をご覧ください。

上記の条件が満たされていない場合は、この章で説明されている構成と検証を完了できません。

以下の指示に従って、これらの作業を実行してください。

1. WebSphere Message Brokerを始動します。

- Windows の場合:

Windows では、Administrator 権限がない場合は検証を完了できません。インストールを完了するのに使用したユーザー ID を使用して検証を実行します。

インストール・ウィザードから WebSphere Message Broker Toolkit を起動しなかった場合は、「スタート」メニューから起動するか、提供されているスクリプト・ファイルを実行します。コマンド行で、パッケージ・グループのルート・ディレクトリーにナビゲートし、以下のコマンドを入力します。

```
mb.exe
```

このスクリプト・ファイルは以下のコマンドを実行します。必要に応じて、このコマンドを自分で使用できます。

```
eclipse.exe -product com.ibm.etools.msgbroker.tooling.ide
```

- Linux の場合:

Linux(x86) および Linux(x86-64) では、検証を完了するのに、root 権限は必要ありません。WebSphere Message Broker Toolkit をインストール・ウィザードから起動することはできません。root としてログインしている間にブローカーなどのリソースを作成するなら、操作中に問題が発生する恐れがあるためです。したがって、このオプションは無効になっています。

製品のインストールに使用したユーザー ID からログオフします。同じ ID (ID が root でない場合) としてログインするか、別の ID としてログインしてルートにならないようにします。

メインメニューから WebSphere Message Broker Toolkit を起動するか、提供されているスクリプト・ファイルを実行します。コマンド行で、パッケージ・グループのルート・ディレクトリーにナビゲートし、以下のコマンドを入力します。

```
./launcher
```

必要に応じて、以下のようにしてアプリケーションを直接実行することもできます。

```
./eclipse -product com.ibm.etools.msgbroker.tooling.ide
```

ただし、アプリケーションを実行する前に、`LD_LIBRARY_PATH` を設定する必要があります。`LD_LIBRARY_PATH` を設定する方法の詳細については、ランチャー・スクリプトの項を参照してください。

初めて WebSphere Message Broker Toolkit を起動する際に、ワークスペースの場所を指定するよう求められます。このディレクトリーは、ローカル・ドライブ上にあり、作成したすべてのリソースを WebSphere Message Broker Toolkit が保管する場所です。示されたデフォルトのディレクトリーを受け入れるか、または入力するか「参照」をクリックして場所を指定することにより独自の選択項目を指定できます。「これをデフォルトとして使用し、再度尋ねない」を選択して、次回 WebSphere Message Broker Toolkit を起動する際に、ワークスペース・ダイアログが表示されないようにします。

WebSphere Message Broker Toolkit が開き、ウェルカム・ページが表示されず。

2. 「始めに」アイコン をクリックして、構成と検証のプロセスを始めます。

「始めに」ページが開き、このページからクイック・ツアーを開始するか、サンプル・プログラムで使用されるデフォルト構成を作成して、インストールが成功したかを検証できます。

3. デフォルト構成を作成します。

- a. 「始めに」ページで、「**デフォルト構成の作成**」  へのリンクをクリックします。「デフォルト構成の作成」ページが開きます。
- b. 「**デフォルト構成の開始ウィザード**」をクリックします。

このウィザードで提供される指針に従い、ページをナビゲートします。

このウィザードは、インストールが成功したかを検証するためにサンプル・プログラムで使用できるデフォルト・ブローカーを作成します。

このウィザードは、進行状況表示バーを表示して現在実行中のタスクを示します。また、進行情報をスクロール可能テキスト・ウィンドウ内に書き込んで、このウィザードが取るすべてのアクションを報告します。このウィンドウに表示される情報の一部またはすべてをコピー・アンド・ペーストできます。

テキスト・ウィンドウ内の情報は、ワークスペース・ディレクトリー構造内のログ・ファイルにも書き込まれます。例にデフォルトのワークスペース・ディレクトリーを示しますが、WebSphere Message Broker Toolkit の開始時に別の場所を選択できます。

Linux(x86)

```
user_home_dir/IBM/wmbt70/workspace/.metadata/  
DefaultConfigurationWizard.log
```

Windows

```
user_home_dir\IBM\wmbt70\workspace\metadata\  
DefaultConfigurationWizard.log
```

処理中にこのウィザードでエラーが発生すると、発生した内容が通知され、コマンドからの戻りコードなどのエラー情報が戻されます。エラー・テキストからエラーの発生理由が分かる場合は、その状態を訂正できればこの時点で訂正します。エラー・メッセージ表示に戻り、「はい」をクリックして、ウィザードを続行します。

エラーについて理解できず、修正方法が分からない場合、「いいえ」をクリックします。ウィザードは可能な場合はこれまでに取ったすべてのアクションをロールバックして、完了時にシステムがウィザードの開始前と同じ状態になるようにします。テキスト・ウィンドウに、ウィザードが行ったことと行わなかったことが正確に表示されます。

「ログ・ファイルを開く」をクリックし、ウィザードの要約ページからログにアクセスします。このオプションは、ウィザードが成功したか失敗したかに関係なく使用できます。

リソースを作成するウィザードを以下の表に示します。

表 18. デフォルト構成ウィザードによって作成されたリソース

名前	タイプ
MB7BROKER	ブローカー
MB7QMGR	ブローカーをホストする WebSphere MQ キュー・マネージャー。このキュー・マネージャーには、2414 以上の最初の使用可能なポートにリスナーがあります。

またブローカーを開始して、サンプルを処理できるように準備します。

- c. 最後のページで、サンプル準備ウィザードを開始するオプションを無視します。この指示では、このウィザードは後で開始します。
 - d. 「終了」をクリックして、ウィザードを閉じます。ウィザードが完了すると、「ブローカー・アプリケーション開発」パースペクティブが開き、ウィザードで作成したリソースが表示されます。
4. インストールを検証するには、「ヘルプ」 → 「サンプルおよびチュートリアル」 → 「WebSphere Message Broker Toolkit - Message Broker」をクリックして、「サンプルおよびチュートリアル」パネルを開きます。「サンプルおよびチュートリアル」パネルは、ウェルカム・ページからも開くことができます。

- a. 「アプリケーション・サンプル」を展開し、Pager サンプルの「詳細情報」をクリックして「Pager サンプル」ページを開きます。以下のオプションが表示されます。

- 「Pager サンプルのセットアップ」

このオプションは、サンプル準備ウィザードを開始します。このウィザードは、サンプルをワークスペース内にインポートしたり、サンプルと関連リソース（メッセージ・フローなど）をデフォルトのプロカーにデプロイしたりするのに役立ちます。

- 「Pager サンプルの実行」

このオプションは、3 つの各サンプル・プログラムの説明と、各プログラムを開始するためにクリックするアイコンを含むヘルプ・ページを開きます。

- 「Pager サンプルの実行内容の検出」

このオプションは、Pager サンプルの作業内容と、作業方法の詳細を説明するページを開きます。サンプル機能を実装するメッセージ・フローと、これらのフローによって処理されるメッセージを検討できます。

- b. 「Pager サンプルのセットアップ」をクリックします。サンプル準備ウィザードが開始され、最初のページが表示されます。インポートしてデフォルトのプロカーにデプロイするオプションが事前選択されています。
- c. 「次へ」をクリックして、このウィザードで提供される指針に従い、ページをナビゲートします。

このウィザードは、進行状況表示バーを表示して現在実行中のタスクを示します。また、進行情報をスクロール可能テキスト・ウィンドウ内に書き込んで、このウィザードが取るすべてのアクションを報告します。

このテキスト・ウィンドウに報告される情報の一部またはすべてをコピー・アンド・ペーストできます。この情報は、以下のログ・ファイルにも書き込まれます。

Linux(x86)

```
user_home_dir/IBM/wmbt70/workspace/.metadata/  
samplePreparationWizard.log
```

Windows

```
user_home_dir\eclipse\workspace\metadata\  
samplePreparationWizard.log
```

処理中にこのウィザードでエラーが発生すると、発生した内容が通知され、コマンドからの戻りコードなどのエラー情報が戻されます。エラー・テキストからエラーの発生理由が分かる場合は、その状態を訂正できればこの時点で訂正します。エラー・メッセージ表示に戻り、「はい」をクリックして、ウィザードを続行します。

エラーについて理解できなかつたり、修正方法が分からない場合、「いいえ」をクリックします。ウィザードは可能な場合はこれまでに取ったすべてのアクションをロールバックして、完了時にシステムがウィザードの開始前

と同じ状態になるようにします。テキスト・ウィンドウに、ウィザードが行ったことと行わなかったことが正確に表示されます。

このウィザードは、Pager サンプルと関連リソースがデプロイされ、実行の準備ができたことを示すために情報メッセージを表示します。

- d. このウィザードによって完了したアクションに関するメッセージを読み終わったら、「次へ」をクリックします。確認ページが表示されます。
- e. 「終了」をクリックして、ウィザードを閉じます。「Pager サンプル」ページ(ウィザードを起動したページ)が再表示されます。
- f. 「**Pager サンプルの実行**」をクリックします。開いたページで、「**アプリケーションの使用法**」をクリックして、テキスト・メッセージングおよびサーフ・レポート・パブリッシャー・アプリケーションについて読みます。アプリケーションが行うことと使用法について理解した時点で、実行するアプリケーションを表すアイコンをクリックします。

これらのアプリケーションの内容とメッセージ・フローの作業方法に関する詳細情報を必要とする場合は、「**Pager サンプルの実行内容の検出**」をクリックします。

- g. メッセージを正常に送受信した時点で、インストールの完了を検証し終わりました。この時点で、Pager アプリケーションとサンプル・ギャラリーを閉じてもかまいません。
5. (オプション) サンプル準備ウィザードを開始して、リソースを作成し、他の提供されているサンプル・プログラムを開始できます。WebSphere Message Broker Toolkit で、「**ファイル**」→「**新規**」→「**その他**」→「**ブローカー管理 - 始めに**」をクリックし、「**サンプルの準備**」を選択します。サンプル準備ウィザードが開き、使用可能な他のサンプルがリストされます。

サンプルに関する情報は、WebSphere Message Broker Toolkit と統合されているインフォメーション・センターか、オンライン・インフォメーション・センターを使用する場合にのみ表示できます。WebSphere Message Broker Toolkit と統合されているインフォメーション・センターを使用する場合にのみ、サンプルを実行できます。

6. サンプルを使用後に除去するには、サンプル準備ウィザードを再実行し、追加したサンプルを除去します。このアクションにより、ブローカーからサンプルが除去され、ワークスペースからサンプルのリソースが除去されます。

検証テストを完了した時点で、デフォルト構成ウィザードを実行して、すべてのデフォルト・リソースを除去します。リソースの作成に使用したものと同一ワークスペースとユーザー ID を使用します。ウィザードを WebSphere Message Broker Toolkit から開始するには、「**ファイル**」→「**新規**」→「**その他**」をクリックし、「**ブローカー管理 - 始めに**」を展開します。「**デフォルト構成の作成**」を選択し、「**次へ**」をクリックします。

チュートリアルは完了しました。

WebSphere Message Broker Explorer を使用したインストールの検査

このチュートリアル of 指示を使用して、WebSphere Message Broker のインストールを検査し、WebSphere Message Broker Explorer でブローカー・アーカイブ・ファイルをデプロイする方法を学びます。

このチュートリアルを実行するには、WebSphere Message Broker Explorer をインストールしておく必要があります。WebSphere Message Broker Toolkit を使用している場合は、サンプルの 1 つを使用してインストールを検査できます。サンプルのリストについては、インフォメーション・センター内の『サンプル』を参照してください。

WebSphere Message Broker Explorer を使用してインストールを検査するには、以下の作業を実行することができます。

- デフォルト構成の作成
- ブローカー・アーカイブ・ファイルのデプロイ
- デプロイメントの結果の確認
- メッセージ・フローのテスト

以下の指示に従って、これらの作業を実行してください。

1. WebSphere Message Broker Explorer を使用するには、WebSphere MQ Explorer を開始しなければなりません。

- Windows の場合:

「スタート」 → 「すべてのプログラム」 → 「IBM WebSphere Message Broker 7.0」 → 「IBM WebSphere Message Broker Explorer」をクリックするか、コマンド行で `strmqcfc` コマンドを入力して、WebSphere MQ Explorer を開始します。

- Linux の場合:

コマンド行で `strmqcfc` コマンドを入力するか、または `/usr/bin/strmqcfc` を実行して、WebSphere MQ Explorer を開始します。

2. デフォルト構成を作成します。

- 以下のリンクを使用して、「デフォルト構成の作成」ウィザードを開始します。

デフォルト構成ウィザードの開始

WebSphere Message Broker Toolkit または WebSphere Message Broker Explorer と統合されているインフォメーション・センターを使用する場合にのみ、このリンクを使用できます。

- またはその代わりに、以下の指示を使用して「デフォルト構成の作成」ウィザードを開始することもできます。
 - a. 「WebSphere MQ Explorer - ナビゲーター」ビューで、「ブローカー」フォルダーをクリックします。
 - b. 「WebSphere MQ Explorer - コンテンツ」ビューで、「デフォルト構成の作成」ボタンをクリックします。「デフォルト構成の作成」ウィザードが表示されます。

- a. 「キャンセル」をクリックすると、いつでもデフォルト構成の作成を取り消すことができます。
- b. 「デフォルト構成の要約」ページに、作成されるリソースがリストされます。「次へ」をクリックして先に進みます。
- c. 「終了」をクリックします。

デフォルトのブローカーが作成されて開始されます。このブローカーは「WebSphere MQ Explorer - ナビゲーター」ビューにも追加されます。

3. ブローカー・アーカイブ・ファイルをブローカーにデプロイします。
 - a. 「ブローカー・アーカイブ・ファイル」フォルダーを展開します。
 - b. 「始めに」フォルダーを展開します。
 - c. pager.bar ファイルを右クリックして「ファイルのデプロイ」をクリックします。
 - d. MB7BROKER ブローカーを選択して、「終了」をクリックします。ブローカー・アーカイブ・ファイルがブローカーにデプロイされます。
4. デプロイメントの結果を確認します。
 - a. 「WebSphere MQ Explorer - ナビゲーター」ビューで、「ブローカー」を展開します。
 - b. MB7BROKER をクリックして、ブローカーを選択します。
 - c. 「管理ログ」ビューでブローカーからのメッセージを表示します。デプロイメントが正常に実行された場合は、メッセージ BIP2881I が「管理ログ」ビューに表示されます。また、TextMessenger メッセージ・フローと PagerMessageSets メッセージ・セットが、MB7BROKER ブローカーの下のデフォルト実行グループにデプロイされていることも確認できます。
5. メッセージ・フローをテストします。
 - a. 「WebSphere MQ Explorer - ナビゲーター」ビューで、「キュー・マネージャー」フォルダー内の MB7QMGR を展開します。
 - b. 「キュー」フォルダーを右クリックして、「新規」 → 「ローカル・キュー」をクリックします。
 - c. キューの名前として TEXTMESSENGER と入力し、「終了」をクリックします。このキューは、Pager メッセージ・フローの入力キューです。
 - d. 「OK」をクリックします。
 - e. 「キュー」フォルダーを右クリックして、「新規」 → 「ローカル・キュー」をクリックします。
 - f. キューの名前として TEXTMESSENGER_FAIL と入力し、「終了」をクリックします。このキューは、Pager メッセージ・フローの障害キューです。
 - g. 「OK」をクリックします。
 - h. 「キュー」フォルダーを右クリックして、「新規」 → 「ローカル・キュー」をクリックします。
 - i. キューの名前として PAGER と入力し、「終了」をクリックします。このキューは、Pager メッセージ・フローの出力キューです。
 - j. 「OK」をクリックします。

- k. 「WebSphere MQ Explorer - コンテンツ」ビューで、TEXTMESSENGER キューを右クリックし、「テスト・メッセージの送信」をクリックします。「テスト・メッセージの送信」ダイアログが表示されます。
- l. メッセージ・データ・フィールドに以下のメッセージを入力し、「メッセージの送信」をクリックして、テスト・メッセージを Pager メッセージ・フローの入力キューに入れます。

```
<Pager><text>This is my message to the pager.</text></Pager>
```

テスト・メッセージがメッセージ・フローの中を移動し、変換され、出力メッセージが Pager キューに入ります。

- m. 「Close」をクリックして、「テスト・メッセージの送信」ダイアログを閉じます。
- n. Pager キューを右クリックし、「メッセージの参照」をクリックします。「メッセージ・ブラウザー」ダイアログが開き、キュー上のメッセージが表示されます。テストが成功すると、キュー上のメッセージは以下のようになります。

```
<?xml version="1.0"?><!DOCTYPE Pager>  
<!--MRM Generated XML Output on :Sat Jun 20 10:38:56 2009-->  
<Pager><Text> Powered by IBM.</Text></Pager>
```

6. 「Close」をクリックして、「メッセージ・ブラウザー」ダイアログを閉じます。

チュートリアルは完了しました。

第 14 章 ブローカーの動作モードと機能レベルの確認

このチュートリアルの指示に従って、ご使用の実動環境のブローカーがライセンス条件に適合していることを確認してください。

最新のフィックスパックで提供されたノードを使用可能にするため、機能レベルを変更する必要がある場合があります。

以下のタスクを完了している必要があります。

- ご使用のライセンスに適合するようにブローカーを構成します。
- ブローカーの機能レベルを変更します。

以下の指示に従って、これらの作業を実行してください。

1. ライセンスに適合するようにブローカーを構成するには以下のようになります。
 - a. Trial Edition からのアップグレードの場合:

WebSphere Message Broker Trial Edition をインストールしてあって、今回製品を購入した場合、既に作成して構成したコンポーネントとすべての関連するリソースを保持しておくことができます。Trial Edition をアンインストールして、購入したパッケージを再インストールする必要はありません。ただし再インストールしない場合は、既存のブローカーの動作モード、および作成するすべての新しいブローカーのデフォルトの動作モードには、`trial` 値が設定されており、以下の手順でこの値を変更する必要があります。

- トライアル・ドメイン用に作成したブローカーを、開発者による今後の開発と単体テストのために保持しておきたい場合、インフォメーション・センターの「ブローカーの動作モードの変更」の説明に従って、各ブローカーの動作モードを `enterprise` に変更します。

この変更を行えば、使用しているブローカーにトライアル期間の制限は課せられなくなりますが、ライセンス契約ファイルを調べて、使用している構成が開発および単体テストのすべての制約事項に従っていることを確認してください。開発および単体テストの条件についての説明は、24 ページの『ライセンス要件』を参照してください。

- トライアル・ドメイン用に作成したブローカーを実動目的で使用するには、購入したライセンスに適合させるため、以下のように動作モードを変更します。
 - Remote Adapter Deployment を購入した場合、動作モードを `adapter` に変更します。
 - Starter Edition を購入した場合、動作モードを `starter` に変更します。
 - フル・ライセンス (制約条件なし) を購入した場合、動作モードを `enterprise` に変更します。

購入した製品のブローカー・コンポーネントを新しい物理パッケージまたは電子パッケージから再インストールすると、その後に新規作成するすべてのブローカーではデフォルトの動作モードに、`enterprise` 値が設定されます。

Starter Edition、Remote Adapter Deployment、 を購入した場合、購入したライセンスに応じてモードを必ず変更する必要があります。

WebSphere MQ のトライアル・バージョンもインストールしていた場合、WebSphere Message Broker の一部として提供された制限付きライセンス・バージョンをインストールする権利が与えられています。提供された製品が、必要とする要件を満たしており、常に WebSphere Message Broker とともに使用する予定であれば、それ以上製品を追加購入する必要はありません。

トライアル・バージョンの WebSphere MQ をアップグレードするには、以下の手順を実行します。

- 1) トライアル・バージョンをアンインストールします。
- 2) ライセンスされたバージョンの WebSphere MQ をインストールします。このとき、以下のように行います。
 - WebSphere Message Broker に組み込まれているバージョン 7.0.1 が使用できるのは、WebSphere Message Broker とともに使用する場合のみです。このバージョンをインストールするには、提供されたメディア、またはダウンロードしたイメージを使用します。Windows にインストールする場合、Launchpad を使用してこの製品をインストールできます。
 - WebSphere MQ を WebSphere Message Broker の使用と関連しないアプリケーションで使用する場合は、別個のライセンスを購入する必要があります。

WebSphere MQ バージョン 7.0 に組み込まれた追加機能や機能拡張を使用する場合も、別個のライセンスを購入することができます。

b. Remote Adapter Deployment、Starter Edition、 を購入した場合:

WebSphere Message Broker Remote Adapter Deployment、WebSphere Message Broker Starter Edition、 を購入し、ランタイム・パッケージの完全版からコンポーネントをインストールした場合:

- 作成したすべてのブローカー (例えば、検証手順を完了することによって作成した場合) では、動作モードに `enterprise` が設定されています。これはこのインストールのデフォルト設定です。このブローカーを今後の開発と単体テストで使用するために保持しておくには、ライセンスに示されたとおり、単体テスト環境に適用される制約事項に従う必要があります。開発および単体テストの条件についての説明は、24 ページの『ライセンス要件』を参照してください。
- これらのブローカーを実動目的で使用するには、購入したライセンスに適合させるため、インフォメーション・センターの「ブローカーの動作モードの変更」に示された指示に従って、以下のように行います。
 - Remote Adapter Deployment を購入した場合、動作モードを `adapter` に変更します。
 - Starter Edition を購入した場合、動作モードを `starter` に変更します。
- デフォルトの動作モード値は `enterprise` に設定されているので、新しいブローカーを作成するときは、購入したライセンスに適合するように動作モードを設定してください。 `mqsicreatebroker` コマンドで `-o` フラグを付

けて、代替値 `adapter`、`starter`、を指定することにより、このデフォルト値をオーバーライドできます。あるいは、`mqsimode` コマンドを使用することによって作成されたブローカーのモードを変更することもできます。

- c. WebSphere Message Broker のフル・ライセンス (制約条件なし) を購入した場合は以下のようにします。

フル・ライセンス (制約条件なし) を購入してフル・ランタイム・パッケージからコンポーネントをインストールした場合、作成するすべてのブローカーの動作モードには、デフォルト値である `enterprise` が設定されます。これは、ライセンスに適合した正しい設定です。

既存のインストール済み環境、同一コンピューター上の別のインストール環境、または別のコンピューター上の環境のいずれにおいても、新しいブローカーを作成した場合は動作モードが常に `enterprise` に設定されます。この値を変更する必要はありません。

既に作成したコンポーネントおよび関連するリソースすべては、引き続き作業に使用することができます。例えば、検証を完了した後で、作成済みのリソースを今後の開発と単体テストで使用するために保持しておくことができます (ライセンスに示されたとおり、単体テスト環境に適用される制約事項に従う必要があります)。開発および単体テストの条件についての説明は、24 ページの『ライセンス要件』を参照してください。

- d. ブローカーの動作モードおよび各モードに関連した動作に関する完全な説明については、インフォメーション・センターの「動作モード」を参照してください。

- 2. ブローカーの機能レベルを変更するには以下のようにします。

注: バージョン 7.0.0.1 は、一般出荷可能なフル・バージョンか、またはフィックスパックとしてインストールできます。バージョン 7.0.0.1 は、選択したインストール経路にかかわらず、機能を V7.0.0.1 対応にします。将来のバージョン 7.0 フィックスパックでは、以下の手順に戻る可能性があります。

フィックスパックが配信されている場合、メッセージ・フローに追加して特定の機能を提供する新しいノードが含まれている可能性があります。

ブローカーのデフォルトの機能レベルは特定の値に設定されていません。この場合のデフォルト値は、値 `7.0.0.0` と等価であり、これはレベルがバージョン 7.0 であることを示します。このレベルでは、後にリリースされるフィックスパックによってノードが追加される場合、ブローカーがそれをサポートしない可能性があります。

後にリリースされるフィックスパックで追加されるノードは、WebSphere Message Broker Toolkit によって使用可能になるので、それによってメッセージ・フローにそれらのノードを組み込めるようになります。メッセージ・フローをブローカーにデプロイできるのは、そのブローカーに、そのノードが最初に供給されたフィックスパックを表す機能レベル値が設定されている場合だけです。

各ブローカーの機能レベルは自分で管理できるので、実動環境のブローカーの動作に影響を与えずに、テスト用ブローカー上で新しいノードを試用することがで

きます。そのノードが提供する機能が要件を満たし、期待どおりに動作することがわかったなら、適切と思える時点でドメイン内の他のブローカーの機能レベルを設定することができます。

ブローカーの機能レベルを変更するには、`mqsichangebroker` コマンドで `-f` フラグとともに適切な値を指定して実行します。

フィックスパックで追加されるノードおよび `mqsichangebroker` コマンドの使用に関する詳細については、インフォメーション・センターの「`mqsichangebroker` コマンド」を参照してください。

チュートリアルは完了しました。

第 5 部 付録

付録. インストールにおける問題点

分散システムへのコンポーネントのインストールで直面する可能性のある問題シナリオ

z/OS へのインストールで問題が生じた場合、「*Program Directory for WebSphere Message Broker for z/OS*」を参照してください。

インストール・ウィザードは、インストールに成功した場合、戻りコードにゼロを返します。ゼロ以外の戻りコードが返された場合、エラーと説明を調べるため、インストール・ログ・ファイルを確認してください。以下のように行います。

- ブローカー・コンポーネントのインストールと関連した問題は、ログ・ファイル `mqs17_install.log` に記録されます。このファイルは、使用しているアカウントのホーム・ディレクトリーに保管されており、次のようにして確認できます。

Linux および UNIX

ホーム・ディレクトリーを調べるには、`echo $HOME` を入力します。

Windows

ホーム・ディレクトリーを調べるには、`echo %HOMEPATH%` を入力します。一般に、このディレクトリーの場所は以下のデフォルト値に設定されています。

- Windows XP および Windows Server 2003 では、`C:%Documents and Settings%ユーザー ID`
 - Windows Vista およびそれ以降のオペレーティング・システムでは、`C:%Users%ユーザー ID`
- WebSphere Message Broker Toolkit のインストールと関連した問題は、Installation Manager ログ・ファイル `YYYYMMDD_TIME.xml` に記録されます。ここで、`YYYYMMDD_TIME` はインストールの日付および時刻です。このファイルは以下の場所に保管されます。
 - Linux の場合: `/var/ibm/InstallationManager/logs`
 - Windows システムの場合、`%ALLUSERSPROFILE%Application Data%IBM%Installation Manager%logs` にディレクトリーが作成されます。ここで、`%ALLUSERSPROFILE%` はシステム作業ディレクトリーを定義する環境変数です。デフォルトのディレクトリーは、オペレーティング・システムによって異なります。
 - Windows XP および Windows Server 2003: `C:%Documents and Settings%All Users%Application Data%IBM%Installation Manager%logs`
 - Windows Vista およびそれ以降のオペレーティング・システム: `C:%ProgramData%IBM%Installation Manager%logs`

実際の場所はコンピューターによって異なる場合があります。

- WebSphere Message Broker Explorer のインストールと関連した問題は、ログ・ファイル `MBExplorer_install.log` に記録されます。このファイルは、インストール・ディレクトリーに保管されています。デフォルトのインストール・ディレクトリーは、以下のとおりです。

Linux opt/IBM/MBExplorer

Windows

C:\Program Files\IBM\MBExplorer

以下のリストに、典型的な問題と、それに対応する解決策または回避策を示します。

すべてのオペレーティング・システム: ブローカー・コンポーネントのインストール処理が中断する

ブローカー・コンポーネントをインストール中、処理が完了する前に電源障害などの原因で中断した場合、*install_dir* とそのすべての内容を削除してから、インストール・プログラムを再開します。

Linux: java.lang.UnsatisfiedLinkError

Linux でグラフィカル・インターフェースを使用してインストールしている場合、インターフェースが正常に動作するために追加のパッケージのインストールが必要です。詳細については、16 ページの『オペレーティング・システム要件』を参照してください。

Linux: RPM 照会で障害が起こる

製品をインストールした後に Red Hat パッケージ・マネージャ (RPM) 照会を開始したのに何も応答が返されない場合、必要な RPM サポートがシステムに存在しない可能性があります。

以下のような情報メッセージがインストール・ログに報告されていることがあります。

```
(01-Jun-2005 09:02:27), mqsi.Setup,  
com.ibm.wizard.platform.linux.LinuxProductServiceImpl, wrn,  
The installer could not successfully add the product information  
into the RPM database. Installation will continue as this is not  
critical to the installation of the product.
```

16 ページの『オペレーティング・システム要件』にある説明に従って、追加の RPM ビルド・パッケージをインストールしてください。

Linux および UNIX: 表示上の問題がある

グラフィカル・インターフェースを使用してランタイム・コンポーネントをインストールしようとしているとき、2 つの一般的なエラーのうちのどちらかが報告されることがあります。これらのエラーは一般に、リモート側でログインしている場合や、ユーザー ID を切り替えている場合に発生します。

- Can't open display localhost:1.0

DISPLAY 変数が正しい値に設定されているかどうかを確認します。ローカルでログインしている場合、標準的な値は :0.0 または localhost:0.0 になります。

- Connection to ":0.0" refused by server

以下のコマンドを実行します。ここで、*user* にはログイン中のユーザー ID を指定します。

```
xauth merge ~user/.Xauthority
```

このエラーを修正できない場合、システム管理者に連絡を取ってさらに援助を求めてください。

Linux および UNIX: 一時スペースが不足している

製品をインストールするとき、インストール・プログラムは製品ファイルをローカル・システムの一時ファイル・スペースにアンパックしようとして、Linux および UNIX システムでは一般に、一時スペースは /tmp に配置されています。このディレクトリで十分なファイル・スペースが利用可能でない場合、コマンドは理由を示さずに (コマンドがコメントを表示せずに) 失敗することがあります。あるいは、ファイル・スペースの不足が報告されることもあります。

この問題を修正するには、インストール・ウィザード (setupaix など) に、使用する一時ファイル・システムを知らせます。コマンド行オプションに、-is:tempdir 一時ディレクトリー名 を指定します。

例えば、AIX では以下のコマンドを入力します。

```
./setupaix -is:tempdir /largetemp
```

指定する一時ディレクトリーには、別のマシンにある NFS マウントしたディレクトリーを指定しないでください。これを行うと、インストーラーがユーザーのアクセス権チェックを実行するときに、ローカル・マシンにセキュリティ・プリンシパル mqm および mqbrkrs が存在しないというエラーが報告され、インストールが失敗する場合があります。

一時スペースの必要量を確認するには、11 ページの『メモリーおよびディスク・スペースの要件』を参照してください。

Linux (x86) および Windows: Installation Manager

最初に Installation Manager で開く画面の「次へ」をクリックしたときに、Installation Manager がハングすることがあります。ウィンドウを閉じて、もう一度開いてください。

Linux (x86) および Windows: Installation Manager

WebSphere Message Broker Toolkit をインストールしていて、Installation Manager が表示する初期 Install Packages ページに WebSphere Message Broker Toolkit コンポーネントが表示されない場合、更新リポジトリーの場合が正しく設定されていないことが原因です。

「ファイル」 → 「プリファレンス」 を選択して、「プリファレンスの追加」をクリックします。インストール・パッケージを保管した URL またはディレクトリーを入力するか、または「参照」をクリックして正しい場所を見つけて指定します。

「OK」をクリックします。Install Packages ページにパッケージがリストされるようになります。

Linux および Windows: Installation Manager

IBM Installation Manager が既にマシンにインストールされていて、そのバージョンは、Installation Manager バージョン 1.3.4.1 よりも前のバージョンです。IBM Installation Manager の新しいバージョン (WebSphere Message Broker Toolkit バージョン 7.0.0.1 で用意されているバージョンなど) のインストール中に、処理の完了前にインストールをキャンセルします。既にインストールされている Installation Manager をマシンで再始動すると、以下のエラーが生成されます。

Installation Manager の状態の復元中にエラーが発生しました。
インストール・データに非互換バージョン 0.0.4 が含まれています。
予期される値は [0.0.2,0.0.3] です。
新しいバージョンの Installation Manager がシステムで使用されていました。

このエラーが表示されないようにするには、以下のステップを完了します。

1. Installation Manager の `installRegistry.xml` ファイルを開きます。そのファイルは、Installation Manager のエージェント・データの場所にあります。そのファイルの場所は、プラットフォームによって異なります。ご使用のマシンでの場所については、Installation Manager のインフォメーション・センター (http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1r2/index.jsp?topic=/com.ibm.silentinstall12.doc/topics/r_app_data_loc.html) を参照してください。
2. `installRegistry.xml` ファイルを見つけたら、そのファイルの以下の行を変更します。

```
<?installRegistry version='0.0.4'?>
```

変更後の行は、以下のようになります。

```
<?installRegistry version='0.0.3'?>
```

Installation Manager を正しく始動できるようになります。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

- アンインストール
 - 複数ブローカーのインストール 62
- インストール
 - イメージ, ダウンロードされた 49
 - イメージのコピー 53
 - ウィザード名 68
 - 応答ファイル
 - ランタイム・コンポーネント 63
 - Message Broker Toolkit 66
 - コマンド行オプション 59
 - 電子イメージ 36
 - パッケージ 35
 - パッケージ化のオプション 35
 - パッケージの内容 36
 - 物理メディア 36
 - フル・バージョン 35
 - メディアへのアクセス
 - リモートで 53
 - ローカルで 50
 - 問題 93
 - ブローカー・コンポーネント 88
 - ランチパッド 78
 - WebSphere Message Broker Toolkit 93
- 要件
 - オペレーティング・システム 16
 - 通信ハードウェア 14
 - ディスク・スペース 11
 - ブラウザ 19
 - JRE 19
 - WebSphere MQ 19
 - z/OS 上のディスク・スペース 13
- AIX 81
- HP-UX 81
- Linux
 - ブローカー・コンポーネント 81
 - WebSphere Message Broker Toolkit 89
 - Message Broker Explorer 95
 - コンソール・モード, Linux 100
 - コンソール・モード, Windows 99
 - サイレント・モード 101
 - スクリーン・リーダー 99

- インストール (続き)
 - Solaris 81
 - Trial Edition 35
 - Windows
 - ブローカー・コンポーネント 81
 - ランチパッド 73
 - WebSphere Message Broker Toolkit 89
- インストールの検証
 - Explorer を使用した 111
 - Toolkit を使用した 105
- インストール・イメージのコピー 53
- エディション, ライセンス・オプション 24
- 応答ファイル
 - ランタイム・コンポーネント 63
 - Message Broker Toolkit 66

[カ行]

- カーネル, パラメーターの更新 56
- 共用リソース・ディレクトリ (shared resources directory) 22
- クイック・スタート CD
 - フル・バージョン 36
 - WebSphere Message Broker Toolkit 40
- クイック・スタート・ガイド 36
- コード・ページサポート 33

[サ行]

- サポート Web サイト 9
- サポートされる稼働環境 10
- サポートされる通信ハードウェア 14
- サポートされるハードウェア 10
- システムの構成
 - カーネル・パラメーター 56
 - デフォルト構成ウィザード 105
- システムの準備
 - カーネル・パラメーター 56
 - セキュリティ 45
 - CD および DVD へのアクセス 49
- 製品要件 Web サイト 9
- セキュリティ
 - インストールの 46
 - 検証のための 105
 - プリンシパル 45
 - ユーザー ID の制限 45
 - Linux および UNIX システム 46

- セキュリティ (続き)
 - Windows
 - 概説 47
 - ドメイン環境 48
 - z/OS 49
 - ソフトウェアのご使用条件 81

[タ行]

- 多文化サポート
 - コード・ページ・サポート 33
 - メッセージ・カタログ 33
 - ロケール 34
 - WebSphere MQ 33
- デフォルト構成
 - 作成 105
 - 作成されるリソース 105

[ナ行]

- 内容
 - ブローカー・パッケージ 38
 - 補足パッケージ 40
 - WebSphere Message Broker Toolkit パッケージ 40

[ハ行]

- パスポート・アドバンテージ, ダウンロード・パッケージ 35
- パッケージの内容
 - ブローカー・コンポーネント 38
 - DVD 41
 - パッケージ・グループ 22
- 複数ブローカーのインストール
 - アンインストール 62
- ブラウザ
 - サポートされているバージョン 19
- プラットフォームのサポート, 32 ビット および 64 ビット 15
- フル・バージョン
 - パッケージの内容 36
- ブローカー・コンポーネント
 - インストールにおける問題 88
 - ブローカー・パッケージ, 内容 38

[マ行]

- メッセージ・カタログ
 - 多文化サポート 33

メッセージ・カタログ (続き)
ユーザー定義ノードまたはパーサー
33
メディアへのアクセス
リモートで
サーバー 53
ターゲット・システム 55
ローカルで 50

[ヤ行]

要件
ライセンス交付 24

[ラ行]

ライセンス
要件 24
ランチャッド
インストール 75
インストールのための 73
ロケール 34
WebSphere Message Broker Toolkit の
インストール 89

[ワ行]

ワークスペース 105

[数字]

32 ビット・プラットフォームのサポート
15
64 ビット・プラットフォームのサポート
15

A

AIX
インストール
コンソール・インターフェース 83
サイレント・インターフェース 84
ブローカー・コンポーネント 81
問題 88
Message Broker Database
Extender 86

C

Citrix、パブリッシュ・サポート 16

D

DVD の内容 41

126 WebSphere Message Broker: インストール・ガイド

E

Explorer
説明 58

H

HP-UX
インストール
コンソール・インターフェース 83
サイレント・インターフェース 84
ブローカー・コンポーネント 81
問題 88
Message Broker Database
Extender 86

I

Installation Manager
インストール・ディレクトリー 22
共用リソース・ディレクトリー 22
コマンド行の呼び出し 89
整合性の維持 23
パッケージ・グループ 22
要件 22

J

Java
サポートされている JRE 19
JRE、サポートされているバージョン 19

L

Linux
インストール
コンソール・インターフェース 83
サイレント・インターフェース 84
ブローカー・コンポーネント 81
問題、ブローカー・コンポーネント
88
問題、WebSphere Message Broker
Toolkit 93
Message Broker Database
Extender 86
WebSphere Message Broker
Toolkit 89
カーネル・パラメーター 56

M

Message Broker Toolkit
ワークスペース 105
mqsilanchpad 74

P

Pager サンプル
実行 105
セットアップ 105

R

RACF 49
RAD 22
Rational Application Developer 22
Rational Software Architect 22
Rational 製品 22
README ファイル 9
Remote Adapter Deployment 24
RSA 22

S

Solaris
インストール
コンソール・インターフェース 83
サイレント・インターフェース 84
ブローカー・コンポーネント 81
問題 88
Message Broker Database
Extender 86
Starter Edition 24

T

Terminal Services、Windows 47
Toolkit
説明 58
SSL 接続 19
Trial Edition
パッケージの内容 35
ライセンス要件 24

U

UNIX
カーネル・パラメーター 56

W

WebSphere Integration Developer 22
WebSphere Message Broker Database
Extender
インストール
AIX 86
HP-UX 86
Linux 86
Solaris 86

WebSphere Message Broker Database
Extender (続き)
構成
 AIX 87
 HP-UX 87
 Linux 87
 Solaris 87
WebSphere Message Broker Toolkit 93
インストール
 グラフィカル・インターフェース
 89
 サイレント・インターフェース 93
 要約 89
 Linux 上で CD から 89
 共用リソース・ディレクトリー 89
 ソフトウェアのご使用条件 89
 パッケージの内容 40
 パッケージ・グループ 89
 ロケール・フィーチャー 89
WebSphere MQ
 サポートされているバージョン 19
WID 22
Windows
 インストール
 コンソール・インターフェース 83
 サイレント・インターフェース 84
 ブローカー・コンポーネント 81
 問題、ブローカー・コンポーネント
 88
 問題、ランチパッド 78
 問題、WebSphere Message Broker
 Toolkit 93
 WebSphere Message Broker
 Toolkit 89
 ランチパッド
 インストール 75
Terminal Services 47
UNC パス 49



Printed in Japan